平成 25 年度

椙山女学園大学・大学院 FD 委員会活動報告書

椙山女学園大学・大学院
ファカルティ・ディベロップメント

第1号（通巻第14号）

椙山女学園大学・大学院 ＦＤ 委員会活動報告書（平成 25 年度）

目　次

はじめに　全学 ＦＤ 委員会委員長・大学院 ＦＤ 委員会委員長　北岡　崇

Ⅰ　大学ＦＤ委員会の活動

1　全学ＦＤ委員会の活動記録(平成 25 年度)…… 1

2　全学ＦＤ活動報告(平成 25 年度) …… 4

3　学部ＦＤ活動報告(平成 25 年度)

・生活科学部ＦＤ活動報告…… 6

・国際コミュニケーション学部ＦＤ活動報告…… 8

・人間関係学部ＦＤ活動報告…… 11

・文化情報学部ＦＤ活動報告…… 13

・現代マネジメント学部ＦＤ活動報告…… 17

・教育学部ＦＤ活動報告…… 22

・看護学部ＦＤ活動報告…… 24

Ⅱ　大学院ＦＤ委員会の活動

1　研究科ＦＤ活動報告

・生活科学研究科のＦＤ活動報告…… 26

・人間関係学研究科のＦＤ活動報告…… 28

Ⅲ　大学教育の質の向上に向けて

1　シリーズ「私の授業論」

・生活科学部（間瀬　民生）…… 30

・国際コミュニケーション学部（水島　和則）…… 32

・人間関係学部（佐川　佳之）…… 34

・文化情報学部（向　直人）…… 36

・現代マネジメント学部（和久　豊）…… 38

・教育学部（服部　次郎）…… 40

・看護学部（鳥居　修平）…… 42

Ⅳ　大学院教育の質の向上に向けて

1　シリーズ「私の授業論」

・生活科学研究科（加藤　昌彦）…… 45

・人間関係学研究科（李　敏子）…… 47

Ⅴ　「授業についてのアンケート調査」

・実施について…… 49

・分析結果…… 53

はじめに

椙山女学園大学全学ＦＤ委員会委員長
椙山女学園大学大学院 FD 委員会委員長
北岡　崇

本学において全学ＦＤ委員会が組織され、全学的なＦＤへの取り組みが始まったのは平成 12（2000）年度のことである。以来 10 数年間の FD 活動は、多くの教員に、FD 活動の重要性に対する意識を浸透させてきた。こうした意識の深まりと広がりは、本学が今後、大学のユニバーサル化や 18 歳人口の減少の動向、さらに近年のわが国の高等教育政策の急激な改変に柔軟に対応していく上で不可欠の条件であるが、それにとどまらず、本学の将来を展望し、本学に固有の未来を切り拓いてゆく際に、最も信頼できる事柄でもある。

従来型の FD 活動の単なる反復では不十分であると特に近年言われることが多いが、本学の FD 活動もこの数年間、年毎に新しい企画に取り組んできた。しかも、これら新しい企画は、従来の活動やその不備を年毎の全学 FD 委員会が点検・検証した上で試みられたものであり、そのかぎりでは素朴ながらも PDCA サイクルを、あるいはその一部分を意識した企画であり試みであったことは事実である。とはいえ、ここに言う素朴さや一部分という点に、本学における大学ならびに大学院での FD 活動全般の未熟さがあったこともまた事実である。本学においても、大学及び大学院が将来にわたり自律的な改善・発展を遂げていくために、本学に固有の PDCA サイクルを今後、確立してゆく必要がある。

本学における平成 25（2013）年度の FD 活動として、下記のような取り組みを挙げることができる。

・教員相互の授業参観期間を前期・後期ともに一ヶ月間ほど設定した。期間を長くすることで、各教員の自己教育の機会の拡大、教員間の相互教育の場の充実、公開授業科目数と参加者数の増加を図った。

・毎年開催する「FD 講演会」を、教員の参加意識を高めるために、講演型からワークショップ型に改めた。

・昨年度いったん中断した授業アンケートの調査項目をより適切なものへと改変しアンケートを再開し、評価結果に対する各教員のリフレクション・ペーパーの提出率を高めた。【授業アンケートの調査項目については、さらに次年度に向けて、次項のシラバス記載事項の改変と連動させ、改変することにした。改変の趣旨は、個人レベルの FD 活動をミドルレベルの FD 活動（教育母体としての学部学科レベルの教育力向上を目指す活動）へと連動させる上で役立つ調査項目の追加である。】

・シラバスを充実させ、次年度より、各科目の毎回の授業の内容を詳細に記すことで履修者にとって予習がやりやすい体裁に改めることにした。また、当該の科目の履修を通して育成できる主たる能力（知識・理解、志向・判断、態度・志向性、技能・表現

など）の明示、当該の科目の教授に際し採用されているアクティブ・ラーニングの種別の明示などを行なうことにした。

・その他の活動として、例年通り、科学研究費獲得者による申請説明会の開催、新任役職者、本学新任教員の研修などをあげることができる。

最後に一言。平成 25 年度からは、椙山女学園大学全学 FD 委員会活動報告と、今年度はじめて刊行することになった椙山女学園大学大学院 FD 委員会活動報告とを一冊の報告書として刊行することとし、号数は従来の『椙山女学園大学全学 FD 委員会活動報告書』からの通し番号を残しつつも報告書の名称を『椙山女学園大学・大学院 FD 委員会活動報告書』と改めることにした。従って、本報告書は、『椙山女学園大学・大学院 FD 委員会活動報告書』第 1 号（通巻 14 号）である。

Ⅰ　大学ＦＤ委員会の活動

１　全学 FD 委員会の活動記録（平成25年度）
２　全学 FD 活動報告
３　学部 FD 活動報告

Ⅰ．１　全学ＦＤ委員会の活動記録（任期：平成 25 年 5 月 1 日～平成 26 年 4 月 30 日）

（第１回） 平成 25 年 4 月 16 日（火） 17：30～18：45	１．報告事項 （１）平成 24 年度全学ＦＤ委員会活動状況について （２）平成 24 年度全学ＦＤ委員会予算の執行状況について （３）平成 25 年度前期授業アンケートの対象科目選定について （４）平成 25 年度全学ＦＤ委員会予算について （５）平成 25 年度新任教員研修プログラムについて （６）その他 ２．議　　題 （１）平成 25 年度全学ＦＤ委員会活動に関する件 （２）「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に関する件 （３）「学士課程教育の質的転換のための改革アクションプランの実施」に関する件 （４）その他 ※平成 24 年度第 9 回委員会と合同開催
（第２回） 平成 25 年 5 月 21 日（火） 17：30～19：30	１．報告事項 （１）平成 25 年度前期授業アンケートについて （２）その他 ２．議　　題 （１）平成 25 年度全学ＦＤ委員会活動案に関する件 （２）「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に関する件 （３）シラバスの様式に関する件 （４）その他
（第３回） 平成 25 年 6 月 18 日（火） 17：30～18：00	１．報告事項 （１）新任教員研修（学外）について （２）平成 25 年度科研費取得のための研修会について （３）その他 ２．議　　題 （１）平成 25 年度ＦＤ研修会に関する件 （２）平成 25 年度 GLEXA（e-learning システム）活用に向けての講習会開催に関する件 （３）平成 25 年度全学ＦＤ委員会予算に関する件 （４）その他
（第４回） 平成 25 年 9 月 12 日（木） 13：30～15：30	１．報告事項 （１）平成 25 年度科研費取得のための研修会について （２）平成 25 年度ＦＤ研修会について （３）平成 25 年度前期授業改善のための授業参観期間の実施状況ついて （４）平成 25 年度授業アンケートの実施状況について （５）平成 25 年度リフレクション・ペーパーの提出状況について ２．議　　題 （１）平成 25 年度授業アンケートのリフレクション・ペーパー提出の再依頼及び修正の依頼に関する件 （２）平成 25 年度全学ＦＤ委員会活動に関する件 （３）平成 26 年度授業アンケートに関する件 （４）平成 26 年度シラバスに関する件 （５）平成 26 年度全学ＦＤ委員会活動に関する件

（第５回） 平成 25 年 10 月 22 日（火） 18：00～20：00	１．報告事項 （１）平成 25 年度リフレクション・ペーパーの 提出状況について（最終版） （２）平成 25 年度ＦＤ研修会の実施状況について （３）平成 25 年度 GLEXA（e-learning システム）活用に 向けての講習会の実施状況について （４）大学教育の質的転換に向けたアクションプランの 見直しについて （５）その他 ２．議　　題 （１）平成 26 年度全学ＦＤ委員会活動に関する件 （２）平成 26 年度全学ＦＤ委員会予算に関する件 （３）平成 26 年度授業アンケートに関する件 （４）平成 26 年度授業計画（シラバス）に関する件 （５）平成 25 年度全学ＦＤ委員会活動に関する件 （６）その他
（第６回） 平成 25 年 11 月 26 日（火） 17：00～19：20	１．報告事項 （１）平成 25 年度全学ＦＤ委員会予算について （２）平成 26 年度全学ＦＤ委員会予算について （３）「社会人基礎力の中で育成したい資質と目標値に関する アンケート」について （４）その他 ２．議　　題 （１）平成 25 年度全学ＦＤ委員会活動報告書の作成に関する件 （２）平成 26 年度授業計画（シラバス）に関する件 （３）平成 26 年度授業アンケートに関する件 （４）平成 25 年度全学ＦＤ委員会活動に関する件 （５）その他
（第７回） 平成 26 年 1 月 28 日（火） 17：00～19：20	１．報告事項 （１）平成 25 年度全学ＦＤ委員会予算について （２）平成 25 年度後期授業改善のための授業公開実施状況に ついて （３）平成 26 年度新任教員研修プログラムについて （４）その他 ２．議　　題 （１）平成 26 年度授業アンケートに関する件 （２）平成 25 年度ＦＤ委員会活動報告書に関する件 （３）平成 25 年度全学ＦＤ委員会活動に関する件 （４）平成 25 年度教育・学修環境及び学生の 学修時間等に関するアンケート調査に関する件 （５）その他
（第８回） 平成 26 年 2 月 25 日（火） 17：00～19：00	１．報告事項 （１）平成 25 年度全学ＦＤ委員会予算について （２）平成 25 年度ＦＤ委員会活動報告書の作成について （３）平成 26 年度全学ＦＤ委員会予算について （４）その他 ２．議　題 （１）平成 26 年度授業アンケートに関する件 （２）平成 25 年度全学ＦＤ委員会活動に関する件 （３）その他

（第９回） 平成 26 年 3 月 25 日（火） 17：00～18：00	１．報告事項 （１）平成 26 年度授業アンケートについて （２）平成 26 年度教育・学修環境及び学生の学修時間等に関するアンケート調査実施状況について （３）大学教育改革フォーラム in 東海 2014 の参加について （４）平成 26 年度新任教員研修（学外）について （５）その他 ２．議　題 （１）平成２６年度授業アンケートに関する件 （２）その他
（第１０回） 平成 26 年 4 月 22 日（火） 17：00～18：00	１．報告事項 （１）平成 25 年度全学ＦＤ委員会活動状況について （２）平成 25 年度全学ＦＤ委員会予算の執行状況について （３）平成 26 年度前期授業アンケートの対象科目選定について （４）平成 26 年度全学ＦＤ委員会予算について （５）平成 26 年度新任教員研修プログラムについて （６）平成 26 年度新任教員研修（学外）について （７）「学士課程教育の質的転換のための改革アクションプラン」について （８）「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」について （９）その他 ２．議　題 （１）平成 26 年度全学ＦＤ委員会活動案に関する件 （２）その他

Ⅰ．２　平成２５年度　全学ＦＤ活動報告

◆ＦＤ研修会

１．第１回研修会

●科学研究費取得のための研修会

・日　時：平成２５年７月１２日（金）１７：００～１８：３０

・場　所：国際コミュニケーション学部棟２０６教室

・テーマ：科学研究費補助金を獲得するために

・報告者：見田隆鑑　文化情報学部講師（若手研究）

中嶋文子　看護学部講師（挑戦的萌芽研究）

平野順雄　人間関係教授（基盤研究）

中本龍市　現代マネジメント学部講師　（若手研究）

・参加者：２５名

２．第２回研修会

●ＦＤ研修会（カフェ形式のグループ研修）

・日　時：平成２５年９月１３日（金）１１:１５～１２:１５、１３:００～１４:００

・場　所：星が丘キャンパス　大学会館　大会議室

・テーマ：「学生を授業に巻き込む方法」

・講　師：近田 政博氏　名古屋大学高等教育研究センター准教授

・参加者：１６８名（出席率７１．８％）

３．第３回研修会

●ＧＬＥＸＡ（e - learning システム）活用方法の実技講習会

・日　時：平成２５年９月１３日（金）１５：３０～１７：００

・場　所：文化情報学部メディア棟　３２４・３２５演習室

・内　容：ＧＬＥＸＡ（e - learning システム）の簡単な活用方法の実技講習

・参加者：大学　　４０名

大学院　　５名

◆授業改善のための授業参観週間

教員がお互いの授業を参観する。参観した者は良い工夫を自分の授業に生かすとともに参観の後フィードバックシートを授業担当者にメール等で伝える。授業を公開した教員も、意見やアドバイスを参考にし、授業改善を図った。

前期　授業公開科目数：９２科目　参加者：教員１１５名（５７．８％）

後期　授業公開科目数：７６科目　参加者：教員　８５名（４２．７％）

◆新任研修プログラム

●新任教員研修プログラム

・開催日：平成２５年４月１日 他

・着任時の研修・ガイダンス：事務関係

（学園の歴史、本学ポータルサイト、コースナビ、教務事項他）

・大学学術研究倫理憲章、３つのポリシー及び授業等について、学部・学科ごとに実施。

・新任教員からの要望があれば授業参観を実施した。

・継続した相談窓口（学部長・学科主任が対応）

●新任教員研修（学外）の参加

新任教員研修の一環として八王子セミナーハウスが主催する第３回新任教員研修セミナー（９月２日から４日までの２泊３日）に３名の新任教員が参加した。

◆授業評価アンケート

授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的に実施した。

・実施時期　　平成２５年６月１７日（月）～６月２２日（土）（予備日）
　　平成２５年６月２４日（月）～６月２９日（土）
　　平成２５年７月　１日（月）～７月　６日（土）（予備日）

・対象科目

卒業研究、集中講義を除く全科目の中から、専任教員は原則講義科目を含んだ２科目以上を、非常勤講師は１科目以上を実施。

実施対象科目数７７９科目の内、７１１科目で実施した。（９１．３％）

・リフレクション・ペーパー

「授業についてのアンケート調査」結果を踏まえた授業評価(リフレクション・ペーパー)の提出科目数は、５９２科目であった。（８３．３％）

提出されたリフレクション・ペーパーを学部・科目ごとに作成し、学生支援システムを使用して、ＰＤＦ版冊子を当該学部の学生に対し閲覧可能とした。学生のアクセス数は、合計　１，１５３件であった。また、自己点検・授業評価（冊子）としてまとめ、教員同士が閲覧できるようにした。

授業アンケートの分析結果や評価の高かった教員による「私の授業論」を掲載した、全学ＦＤ委員会活動報告書（ＰＤＦ版）を大学のホームページに公開予定である。

Ⅰ．２ 平成２５年度 学部ＦＤ活動報告

生活科学部ＦＤ活動報告（平成 25 年度）

生活科学部 FD 委員会委員
（管理栄養学科）加藤昌彦、加賀谷みえ子
（生活環境デザイン学科）阿部順子、井上尚子
(学部長・オブザーバー)戸部栄一

【1】活動計画(目標)

① 全学で実施される授業アンケートや授業参観などの参加率を高めるよう努力すること。
② 学部の FD 活動を推進するために、学部教職員からの提案を積極的に募ること。
③ 予定されている学科行事をつつがなく達成すること。

【2】実施報告

① 委員会の開催

平成 23 年 4 月～平成 24 年 3 月の期間委員会開催はなし。協議事項については、FD 委員間のメール会議および各学科会議・教授会にて対応。

〈協議事項〉

- H25 年度学部 FD 予算の使途→新人研修合宿参加費、書籍購入、学部 FD 委員会サイトの更新費用に決定。
- 学部 FD 委員会ウェブサイトの更新。

② 学部 FD 委員会ウェブサイトの更新

名物教授頁、委員会蔵書一覧、活動記録の更新および FD アンケート結果のリンク切れの補修を行った。

③ 購入した書籍

- 広田照幸ら「シリーズ大学　第 1 巻　「グローバリゼーション、社会変動と大学」(岩波書店、2013)
- 広田照幸ら「シリーズ大学　第 2 巻　「大衆化する大学」(岩波書店、2013)
- 広田照幸ら「シリーズ大学　第 3 巻　「大学とコスト」(岩波書店、2013)
- 広田照幸ら「シリーズ大学　第 4 巻　「研究する大学」(岩波書店、2013)
- 広田照幸ら「シリーズ大学　第 5 巻　「教育する大学」(岩波書店、2013)
- 広田照幸ら「シリーズ大学　第 6 巻　「組織としての大学」(岩波書店、2013)
- 広田照幸ら「シリーズ大学　第 7 巻　「対話の向こうの大学像」(岩波書店、2014)

④　H25 年度に企画・実施された FD 活動

- H25 年 4 月　新任教員に対し、各担当教員及び事務室からガイダンスを実施（管理栄養学科）
- H25 年 6 月　授業アンケート実施(全学)
- H25 年 7 月　授業参観週間(全学・7/1-7/20)、科研費取得のための研修会(全学・7/12)
- H25 年 9 月　新任教員研修合宿(八王子セミナーハウス)に参加(生活環境デザイン学科・桑原里美助教)
- H25 年 10 月　教授会にて新任教員研究合宿参加者の感想の発表
- H25 年 11 月-12 月　授業参観週間(全学)

【3】課題点

- 目標①については、本学部は授業アンケートでは、実施率 89.2%(全学 91.3%)、リフレクションペーパー提出率 63.1%(全学 53.3%)、授業参観でも前期 61.3%(全学 57.8%)、後期 48.4%(全学 42.7%)を達成しており、全学的にみれば健闘しているといえる。参加率アップのための働きかけは、教授会や学部メーリングリストを通じて全員にアナウンスという形で行い、非回答者・非参加者を把握してピンポイントで依頼をするという手間はかけていない。H26 年度はこれらの FD 活動の意義をより丁寧に説明したうえでアナウンスを増やし、前年度より参加率があがるようにしたい。
- 目標②については、予算申請計画の折など、その都度、教授会でアナウンスを行ったが、積極的な提案はあがらず、FD 委員主導でウェブサイトの更新や FD 関連書籍の購入が行われた。H26 年度からは学部に自動的に FD 活動のための予算がつかず、活性化予算を申請して獲得するシステムになるため、より一層、自発的な提案が望まれる旨、教授会とメーリングリストで繰り返し説得していきたい。
- 目標③については、問題なく達成されたといえる。

【4】次年度へ向けた計画

H25 年度に掲げた目標①②③の達成度をみると、積極的に FD 活動を推進する力がまだまだ弱いことがわかる。FD 活動の意義と重要性を FD 委員がまず理解し、他の教職員の理解を助け、積極的な提案や活動が生まれるように、アナウンスの仕方を工夫する。また、FD 委員自らも積極的に提案を考え、実施報告の内容が増えるように、学部の協力のもと様々な活動を実現していきたい。そのためには、参加率など既存の学部 FD 活動の現状をより詳細に把握していく必要もあるかもしれない。

両学科教員とも、個人レベルではそれぞれ授業や学科運営業務などで様々な改良を試みていることと推察される。しかしながら、各自の試みが現状では十分相互に認識されているとはいえない。個々の努力と成果をどのように共有できるか、そのためのプラットフォームづくりも次年度検討していきたい項目のひとつである。

また H26 年度より、FD 予算の学部割り当てがなくなり、大学活性化経費として活動のための予算申請が必要となる。これまで以上に学部としての企画力・実行力が必要となろう。(以上)

平成 25 年度　国際コミュニケーション学部 FD 活動報告

堀田あけみ

はじめに

国際コミュニケーション学部では、学部独自の FD 活動として、学部の提供する授業・環境について学生がどのように感じているのか、また学生による自発的な学習意欲に対し、十分に応えられているのか、更には学生の入学前を吹くむ生活スタイルが学習にどのような影響を与えているのかといった観点に立ったアンケート調査を行って来た。そこでは、在籍する学生の全般的な満足度の高さとともに、少数ながら謙虚に耳を傾けるべき要求が示された。そこでは、授業全般に対する評価が数値を中心に示されたと言える。

そこで今年度は視点を変えて、「学生による授業論―ゼミ編―」として、各ゼミの３年生１名、４年生１名にゼミについての報告をまとめてもらうことにした。いうまでもなく、全学 FD 委員会活動報告書では、例年、教員によって記される「私の授業論」を元にしたものである。

この報告を通して、それぞれの教員が、自分の担当するゼミが学生にどのように受け止められているかを確認すると同時に、通常では知ることのない、他の教員が担当するゼミでどのような授業が展開されているかを知ることができる。

更に大きな意義として、学生のゼミ選択に活用出来ると言う側面もある。毎年、２年生にとって３年生以降に所属するゼミを選択するのは難しい課題である。関心を絞り切ることができず迷うこともあれば、興味の対象は決まっているのだが、どのゼミに行けば自分のしたい研究が出来るのかが、明確ではないこともある。そこで、２年生以下の学生の役に立つかどうかも考慮した上で以下のように原稿を依頼した。

報告のフォーマット

ゼミについての意見をまとめると言っても、学生にとって、いきなりそれだけを課題として示されても困惑するであろうことが予想される。また、内容がばらばらでは、FD 活動としての意味も小さくなる。そこで、以下の４点を報告の基準として示した。

① 私がゼミを決めるまで
② 授業で何をしているか
③ 私がゼミで得たもの
④ 卒業論文で何を書きたいか (実施時期が 12 月から１月にかけてだったので、４年生は何を書いたか)

以上を中心に、「私のゼミ論」をまとめて欲しい旨を文書にし、それぞれのゼミを担当する教員を通じて執筆を担当する学生に依頼した。FD 活動の一環であると同時に、次年度以降にゼミを選択する学生にも役立てることができるよう、多くの情報が含まれることが望ましいと考え、

文字数は各人 400 字以上、上限無しとした。

また、担当教員からの一言を加えることにより、学生の文章では表されていない部分を補ったり、ゼミ決めの指標として用いる際に、より明確な情報を得られるようにした。

長い報告書

国際コミュニケーション学部は、現在、大きな変革の中にある。昨年度から今年度にかけて、教員の産休や退職が重なっており、ゼミの数が減ったり、他のゼミに移籍する学生がいたりと不安定の状態ではある。そのような中で、18 ゼミから提出があった。報告書には、敢えて学科を分けず、提出があったすべてのゼミを 50 音順に並べて誌面を構成した。国際コミュニケーション学部の特徴の一つは、学科間の垣根が低いことである。学科を超えた授業やゼミの履修が可能であることには繰り返し触れているが、それでもゼミの履修にあたり、学科の壁を気にする学生もいる。学部が一体であることを強調する意味も含んだ構成である。

提出された原稿は、「400 字以上」どころではない。単位にならない、成績には関係無い文章を彼女達は何千字にもわたって書き綴って提出した。それぞれの担当教員が、この子なら書けると踏んで選んだ学生であったり、自ら志願した学生であったりすれば、熱心なのは当然かもしれないが、それにしても長い。

それだけではない、学生からは担当教員をとおして FD 委員に対し、自発的な要望が多く寄せられた。「授業風景の写真を掲載したい」「ゼミで行ったイベントの様子も伝えたい」「授業に使用したハンドアウトも読んで欲しい」といった要望は、出来る限り受け容れるようにした。ここから、FD 委員が、教員も他のゼミで何が行われているのか、知りたいのではないか知るべきなのではないかと考えていたように、学生達は自分達がゼミで何をしているのかを知らせたいと思っていたことがわかる。それは、自分達の研究活動に対する誇りが無ければ出来ないものであろう。

それぞれに、ゼミに対する強い帰属意識や、教員への信頼、研究への思いが溢れていた。

ゼミで得たもの

学生達は、ゼミでどんなものを得たと考えているのであろうか。以下に、それについて書かれた部分を一部抜粋する。

- 創造力が養われたと思います。（中略）答えを導くために、多々のシチュエーションを推測することで、自分の中の創造力により一層磨きがかかったのでは、と感じます。
- 既存の考え方や、事実とされている情報が本当にそうであるのだろうかと疑問を持って取り組めること
- 事前学習の大切さ、オリジナルな視点を大切にすること
- 古い文章を読むことに抵抗がなくなった

- 文章読解力が身に付いた
- どのように行きて行きたいかについて考えるようになった
- 物事の考え方の幅が広がった
- 視野を広げる楽しさ

ここでは主に、学習面についてまとめたが、ほとんどの学生が、得られたのはなにか、という設問に対して「仲間」「絆」の記述がある。

まとめ

ゼミを対象にした調査の結果、国際コミュニケーション学部では、学修・生活の両側面で、ゼミが学生の拠点となり、満足度が高い結果が示された。

しかし、あくまでもゼミの代表の意見であり、担当教員を通して提出されたので、教員に対する配慮もあったものと思われる。

慢心することなく、より満足度の高いゼミを作って行くべく、努力が必要であることを忘れてはならないであろう。

平成 25 年度　人間関係学部FD活動報告

平野順雄

人間関係学部のFD活動には、全学のFD活動の一環としてなされたものと、人間関係学部が独自に行ったFD活動の 2 種類がある。学部が独自に行ったFD活動は、年度末に行った授業アンケートと（以下1参照）、ベネッセより講師を招いて行った学部FD講演会（以下2参照）の二つである。これらの報告については、椙山女学園大学人間関係学部FD委員会活動報告書（平成 25 年度）『人間関係学部ファカルティ・ディベロップメント』を参考にして作成した。

1. 年度末授業アンケートの実施

平成 23 年度から開始した新カリキュラムについて、年度末に学部独自の授業アンケートを実施した。昨年度とほぼ共通の質問項目を用いて新カリキュラムの評価検証を行った。

アンケートは、人間関係学科の学生を対象にしたものと心理学科の学生を対象にしたものの 2 種類あり、それぞれの学科の科目に対する意見を聞いた。人間関係学科の学生に対しては、1 年次開始時のワークシートが役に立ったかをはじめとし、入門演習、基礎演習、教養教育科目、外国語教育、専門科目が、科目として充実していたと思えるかどうかを尋ねた。またケースメソッドや演習については、希望するクラスに入れたかどうか、満足度はどうかを聞いた。さらに、卒論については、自分の関心に沿ったテーマを選んだかどうか、やり遂げて満足しているかどうかを尋ねた。以上のような科目に沿った問いに加えて、受講した科目間の関連がわかったかどうか、人間関係学科は何を学ぶ学科なのかが自分なりにわかったと思うかどうかという点についても尋ねた。

心理学科の学生に対しては、人間関係学科の学生に対するアンケート項目と同様、入門演習、教養教育科目、外国語科目、専門科目が、科目として充実していたと思えるかどうかを尋ねた。またケースメソッドや演習、卒論についても、人間関係学科の学生を対象としたアンケートと同じ内容を尋ねた。一方で、受講した科目間の関連がわかったと思うかどうかや、心理学科が何を学ぶ学科なのかわかったと思うかという問いは設けなかった。さらに、両学科に共通の問いとして、学科における学びに満足しているかどうかや、シラバスについてどう思うかということを最後に尋ねた。

アンケートは、まず両学科ともS*mapを用いて行った。その上で、人間関係学科では有志の教員が行い、心理学科では必修となっている卒論発表会の時に配布した紙媒体でのアンケートも行った。最終的な有効回答数は、人間関係学科 96、心理学科 226 となった。

その結果を見ると、教養教育科目や専門教育科目、さらにはケースメソッド、演習においては、両学科とも「充実している」「どちらかといえば充実している」との回答が圧倒的に多かった。それに対して外国語教育については、いずれの学科においても、「どちらかといえば充実していない」もしくは、「あまり充実していない」「まったく充実していない」という回答が半数以上を占めていた。この点は、今後

カリキュラムを見直していく上での課題であろう。またケースメソッドや演習については、希望するクラスに入ることができ、かつ自分の関心にそったテーマを選べたという割合が、両学科とも非常に高かった。さらに、卒論の満足感も両学科とも高かった。これらの科目については、現行の方法が概ね機能していると評価できるであろう。また人間関係学科にのみ設けた、科目間の関連がわかったかどうか、人間関係学科が何を学ぶ学科なのかがわかったかという設問に対しては、いずれも「わかったと思う」「少しはわかったと思う」という回答が 8 割近くを占め、まずまずの結果と考えることができるだろう。一方でこれらの設問に対して、「どちらともいえない」「よくわからない」「まったくわからない」と答えた学生が 20 名程度おり、この点は今後の検討課題である。

2. 学部FD講演会

学部独自のFD講演会を平成 26 年 1 月 7 日に行った。平成 24 年度入学生から 1 年次の必修科目である「入門演習」の時間内と 3 月の在学生ガイダンスの際に行っているコンピテンシーテストについて、1 年生 2 年分と 2 年生 1 年分の結果をもとに、このテストの開発主体であるベネッセコーポレーション大学事業部のスタッフを招いて、そのアセスメント結果から分かる学部の特徴と学部に必要な初年次教育等について講演を依頼した。

人間関係学科においては、入学後に本当にやりたいことを見つけられる支援があることが必要であり、心理学科においては高校卒業時に抱いている「心理学」と大学で学ぶ心理学とのミスマッチが起こらないようにする支援が必要であるとの概要が示された。また、両学科とも初年次こそ学生にとって重要な期待である「良い教育が受けられる大学、自分を成長させてくれる大学」に応えていく必要があること、受身的な学び（力をつけてもらえる）から、主体的な学びへシフトすることが重要だとの指摘もなされた。

これに対して、教員の側から何をもって成果と考えるのかという質問や、なぜモチベーションを問題にするのかという質問がなされた。また、データを指定校と併設校に分けて提示するべきではないかという提言や、学生が教員との交流を望んでいるというが具体的には何をしたいのか、学生に聞いて個別データを作成するべきだという提言があった。

参考書目：椙山女学園大学　人間関係学部ＦＤ委員会活動報告書（平成 25 年度）
『人間関係学部　ファカルティ・ディベロップメント』

平成 25 年度　文化情報学部 FD 報告書

松山智恵子

１．はじめに

文化情報学部では平成 23 年にメディア情報学科が新たに開設され、文化情報学科とともに二学科体制となって本年度で 3 年目となった。よりよい教育内容充実のために、学生満足度の高い教育内容、カリキュラム内容の充実、教育の質保証のための活動をこれまで以上に強化していくことを目標に、学部 FD 研修会の開催、学生へのアンケート調査の実施、学部 FD 活動報告書の作成を学部 FD として計画した。また、学科 FD としては、文化情報学科は学生アンケートを軸に必須演習科目の在り方について検証し、メディア情報学科は初年次教育の在り方について取り上げた。

２．文化情報学科の FD 活動

文化情報学科では、カリキュラム改革の一つとして、必修演習科目の再編成を行っている。新カリキュラムにおける必修演習科目では、学年とともに表 1 のようにプログラムが進んで行く。改革後 3 年目に当たる本年度は、3 年次配当科目である「展開演習 2」「卒業研究指導 1」が新規のプログラムとして始まった。文化情報学科では FD 活動として、平成 23 年度は「プレゼミ」「基礎演習」を、平成 24 年度は「基幹演習」「展開演習 1」について学生へのアンケート調査を実施してきた。基礎演習と展開演習 1 ついては、これらの調査をふまえ、クラス数を 10 クラスにまで増やし、17 名を上限とする少人数クラスを実現させた。そこで、今年度は新規プログラムである「展開演習 2」「卒業研究指導 1」を 3 年生はどのように受け取ったのかをアンケートにより調査した。また、1 年次配当の「プレゼミ」と「基礎演習」においても調査を実施し、平成 23 年度の実施したアンケート調査との比較を行った。

表 1　文化情報学部必修演習科目（両学科共通）

学　年	1　年	2　年	3　年	4　年
前　期	プレゼミ	基幹演習	展開演習 2	卒業研究指導 2
後　期	基礎演習	展開演習 1	卒業研究指導 1	卒業研究

「展開演習 2･卒業研究指導 1」のアンケートの回収率は 3 年生全体約 130 名のうちの 34%（44

名）であった。展開演習２の授業内容と方法については、「やや良い」(38.6%)が最も多く、「とても良い」(36.4%)と合わせて 75%が好評であったことがわかった。また、「授業の内容は興味が持てた」などの記述からわかるように、展開演習２の意図する「専門的な内容・多様な授業形態」が好意的に受とめられている。その一方で、レポート作成や発表という授業が多く、その進行や段取りに対する不満が少し見られた。卒業研究指導１については、興味のあるテーマを集中的に学べることから、学生の満足度はかなり高い。ただし授業の進め方に対する不満も少し見みられた。

「プレゼミ・基礎演習」のアンケートの回収率は 86%（112 名）であった。プレゼミで「得られたもの」についての調査では、レポートの作成技術や友人、大学生活への順応力などプレゼミの実施意図に相応する習得成果があったと学生がとらえていることがわかった。その一方で、期待していたのに得られなかったものとして、「就職活動への準備」や「将来設計への関心」を指摘する学生が多かった。H23 年度調査でも同じ傾向が見られたことから、プレゼミ等でそれらの内容を扱うなど対応が必要である。なお、プレゼミで実施した「研究室紹介(教員紹介)」については、「教員のことを知ることができたが、4 年間の学びの見通しがついたとは言えない」というコメントがあり、改善の必要性があることがわかった。基礎演習については、情報に関する演習を含める内容としていることから情報技術の基礎的な知識が習得でき、満足感が高かったことがわかった。

文化情報学科 FD では、今回の調査から明らかになったことをもとにしながら、演習科目だけでなく全科目にわたって充実した授業が実現されるよう、さらに力を入れて取り組んでいきたい。その一つとして今年度の学科のカリキュラム改革において、「1 年生で履修できる科目が少ない」という新入生の不満を解消させることを目的とし、2 年次配当科目（「図書館概論」、「博物館概論」、「アジア文化交流論」、「文化と地域」、「観光学」、「女性とライフコース」、「社会組織論」、「情報産業」の 8 科目）を平成 26 年度から 1 年次配当科目に移行させることが決まった。

３．メディア情報学科の FD 活動

メディア情報学科では、初年次教育（プレゼミ、基礎演習）を中心に平成 23 年度、平成 24 年度の FD 活動を行ってきた。3 年目になる本年度は、プレゼミの運営概要、プログラム、評価をまとめ、学部紀要にその報告を行った。また、学科 FD 研修会では「本学科における初年次教育の現状と課題」について報告を行った。ここでは、学科 FD 研修会の概要を記す。

2 学科体制となった新しいカリキュラムでの初年次教育（「プレゼミ」・「基礎演習」）について、平成 23 年度と平成 24 年度の取り組みの概要解説として、初年次教育の種類とこれに基づ

いて整理した実施内容と詳細を配布し、2 年間の取り組みの概要を学科で共有した。

平成 25 年度のプレゼミ・基礎演習での取り組みとしては、前年度の実施結果をもとに、学科の学びへの動機づけを重視し、プレゼミ・基礎演習のガイダンスや総括で、学科の学びと今後の学びを関連づけて説明する機会を設定した。プレゼミでは学部の 4 年生 4 名に、学生時代に何をやってきたのか、何を大切にしてきたのかといった内容で話をしてもらい、1 年生に好評であった。言語力については外国語（英語と中国語）への意識づけをはかるとともに、漢字検定（プレゼミ）と、メディア企業の入社問題（基礎演習）に取り組んだ。基礎演習では、これまでの内容を踏襲する形であったが、新聞社の採用試験に出される時事問題に関するテストを実施するなど、メディア情報学科ならではの動機づけにつながるような改善をした。

平成 25 年度の授業評価の試みとして、「ノート・テイキング」を取り上げ、学生には４月と７月にノート・テイキングに関する質問紙調査を行った。5 月に実施した漢字テストの結果をもとに、成績下位、中位、上位群での意識変化を比較した。下位群でノート・テイキングへの意識づけができたことが推測されたが、上位群への意識の変化は小さく、同じ授業内容でも学生の意識の変化がやや異なることが示唆された。

学科 FD 研修会の中で今後の課題として、「学びへの動機づけをいかにするか、動機づけ・力（基礎学力と学士力）をどうつけさせるか、その力をどう実感させるか」、また学科全体でどのようなことができるなど、活発な意見交換が行われた。継続してこれらの課題に取り組むため、学科 FD として、平成 26 年度は 7 月に一回、3 月に一回学科 FD 研修会を開催することを提案した。また、これまで１・2 年次の必修演習科目の総括は行ってきたので、2・3 年次開講の「基幹演習」「展開演習１・２」の総括が期待される。

４．学部 FD 活動

学部全体の FD 研修会では、(株)ベネッセコーポレーション大学事業部の世登典子氏を講師に招き、平成 23 年度から 3 年間実施したベネッセのアセスメントテストの結果をもとに、経年比較、3 年間の過年度推移の 2 つを軸に学生の学力や社会的強み、学習習慣、初年次教育にスポットを当て、両学科の学生の特性について解説していただいた。主な内容は次のとおりである。

「アセスメントテストの結果報告」

日時：平成 26 年 3 月 1 日 10:50～12:00

講師：(株)ベネッセコーポレーション大学事業部　世登　典子氏

場所：メディア棟 009 室　　参加：文化情報学部 教員　23 名

内容：

【経年比較】学生がどれだけ伸びたか？

①高校までの学習習慣と大学生活 1 年を経た後の学習習慣の変化、②学士力のお役立ち度の変化、③社会的強み（社会人基礎力）の変化、④充実度・お勧め度・満足度の変化、⑤学力について

【3 年間過年度推移】学生の質はどう変化しているか？

①大学・学科志望度の変化、②入学理由の変化、③学習習慣の変化、④カリキュラムへの期待の変化、⑤社会的強み（社会人基礎力）の変化

ベネッセアセスメントテストの構成は次のとおりである。

- 1 年生：大学生基礎力調査Ⅰ（学生向け名称：自己発見レポートⅠ）
- 2 年生：大学生基礎力調査Ⅱ（学生向け名称：自己発見レポートⅡ）
- 3 年生：キャリア・アプローチ

参加した教員から「学生の実態を数量的・客観的に把握できるのは有益」、「日頃感じている問題点とデータとの対応がよくわかった」などのコメントが寄せられ、調査データを基に数値的に学生の実態が把握できたことに対して概ね好評であった。経年比較や過年度推移による学生の学習実態の変化や意識の変化は興味深く、「もう少し時間をかけて説明してもらいたい」「このような FD 研修会を開催してほしい」とこうした FD 研修を望む意見もあった。また、初年次教育の見直しや、学びへの動機づけをどのように盛り込んでいくのか等、学部学科として今後取り組むべき課題について意見を出し合うためのよい機会となった。こうした研修会の実施は次年度も引き続き行っていきたい。

５．今後の課題

学部 FD 研修会での情報共有、意見交換を通して、初年次教育や「学びへの動機づけ」を各学科が学科全体で取り組んでいくことの重要性が共有でき、そこに向けた課題や対策の方向性も見えてきた。今年度研修会で実施したアセスメントテストの結果報告は数値データを基に学生の実態が把握でき、教員側の意識の変化につながったと考えている。平成 26 年度も引き続きアセスメントテストの実施を予定しており、7 月にはその結果がまとまる時期でもあるので、学部 FD 研修会の実施を計画したいと考えている。それにより、データに基づいた初年次教育、2 年次・3 年次での継続した「学びへの動機づけ」についてより効果的な授業の実施・授業改善につながるように学部 FD 活動を行っていきたい。また、各学科でも PDCA サイクルに沿った FD 活動の実施を働きかけていきたい。

平成 25 年度 現代マネジメント学部ＦＤ活動報告

石井圭介

現代マネジメント学部でのＦＤ活動は、主に次の４つからなる。①学生生活評価アンケートの実施、②現代マネジメント研究会（講演会）、③教育研究報告の作成・発行、④授業改善のための授業参観（教員）である。本報告ではこれらの概要を「平成 25 年度 教育研究報告」に記載された内容を中心に紹介することとする。

１．教育・研究活動について

本学では平成 22 年度文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」に採択されて以降、「トータルライフデザイン教育の構築と推進」をテーマに、学生たちの社会的・職業的自立のための教育実践に取り組み、現在の社会経済状況を踏まえた就業力育成の支援体制を整備・強化し、「幅広い職業人養成」を目指してきた。本学部がめざす企業、地域・公共、国際社会で職業的能力を発揮できる人材の育成は、まさにこの目標と合致したものであることから、その実践的な教育への期待がさらに高まっている。

１）教育活動

本学部の特徴を一層明確にすべく、今年度はカリキュラム改正の初年度であった。新カリキュラムにおいては、従前の経営、経済、法律、政治の各分野に現代マネジメント分野が加わって５分野となり、経営分野に多くの科目が配置されるようになった。経営関連科目の充実は、本学部の特徴をより明確にし、学生たちのニーズに合致したカリキュラムとなった。また、旧カリキュラムに比べ、一年次の科目選択の幅が広がったことも、学生たちの興味関心に応じた学修を可能にした。さらに、新カリキュラムへの移行と併せて、今年度は、学生たちに実践的な知識やスキルを育むアクティブラーニングにも力が注がれるようになった。

また、ゼミ活動を中心に、企業や各種機関の訪問をはじめ、学生たちによる商品開発やアプリの制作、日韓学生研究交流プログラムの実施など、マネジメント力を高める実践的で興味深い数々の活動が展開された。

２）大学院「現代マネジメント研究科」の設置認可

平成 26 年 4 月からスタートする同研究科では､従来とは異なる視点で新たなビジネスモデルや新機軸を創造する「イノベーションマネジメント」に関する教育研究を行う。特に経営、会計・税務、経済・公共の３領域におけるイノベーションマネジメント能力を育み、既存のモノや仕組みに対して高度な知識を統合し、まったく新しい価値を生み出すことのできる知的人材を養成しようとしている。大学院の設置認可は、学部教員の研究業績の高度な水準が認められた結果でもあり、これにより、今後は学部においても、大学院進学を念頭においた、より専門性の高い教育を実施することが可能となる。

３）研究活動

本学部の教育活動が充実していくなかで、学部教員による研究活動については、年度初めに4名の新しい教員を迎え、教授9名、准教授10名、講師4名の合計23名が、それぞれの専門分野を中心に、広く現代マネジメントに関する研究活動に取り組んだ。今年度の学部教員の研究活動（過去3年間を基本とする実績）について、教員一人あたりの業績数を整理すると、下表のとおりである。ここでは、第1回教育研究報告ならびに昨年度の報告にみられる実績も併記した。

「教育研究報告」にみる学部教員の研究活動の推移（過去3年間を基本とする実績）

項　　目	第1回教育研究報告（平成14年度）	第11回教育研究報告（平成24年度）	第12回教育研究報告（平成25年度）
著書・訳書・学術論文	7.6編	8.4編	5.4編
特許・その他	4.1編	8.5編	7.7編
著書・学術論文他　小計	11.7編	16.9編	13.1編
研究助成金（学内）	1.6件	2.2件	1.4件
研究助成金（学外）	0.4件	1.3件	1.3件
研究助成金　小計	2.0件	3.5件	2.7件
所属学会	4.4件	5.0件	4.7件
学外委員	0.5件	1.0件	1.2件

＜注＞1．表中の数字は教員1人当たりの数字である。
　　2．「第1回教育研究報告（平成14年度）」は本学部の前身である生活社会科学科の最終年度のものである。

今年度の教育研究報告にみられる（過去3年間の）本学部の教員による研究業績数の平均は、著書・訳書・学術論文が5.4編、特許・その他が7.7編で合計13.1編であった。この数値を昨年度の実績と比べると平均一人当たり3.8編の減少となっている。今年度は様々な新しい取組があり、各教員においては多忙な1年であったと思われるが、研究活動はすぐれた教育活動を支えるものでもある。大学院教育をより充実したものにするためにも、各教員の研究の一層の深化と成果の公表が求められる。

また、研究活動を支える助成金の獲得数についてみると、学内1.4件、学外1.3件、合計2.7件で、昨年度に比べ、学内助成金の獲得数が平均一人当たり0.5件減少した。なお、助成金の獲得数については教員間の違いが大きいことから、各教員が積極的に学内外の助成金を獲得し、研究業績の充実をはかることが期待される。そのほか、所属学会数は昨年度より若干減少し、学外委員数は微増した。

２．学生生活評価アンケート（第12回）

調査期間は、平成25年11月15日（金）から12月13日（金）まで、調査対象は、 現代マネジメ

ント学部 在学生734名（1年生：174名、2年生176名、3年生2020名、4年生182名）で、回答数：575名、回答率78.3%であった。調査の目的は、全学ＦＤ活動の一環として、現代マネジメント学部の学生が本学での生活をどのように受け止めているかを調査した。今回も過去の11回とほぼ同じ調査項目をもって実施した。その成果を現代マネジメント学部のＦＤ活動の基礎的資料とし、教育研究と学生生活の質的向上の一助とすることを主目的としている。

１）カリキュラム

各項目群に対する満足度について、『満足＆ほぼ満足』と回答した学生は「語学科目」では54.9%（56.5%）（カッコ内の数字は昨年度の結果、以下同様）、「情報科目」では70.8%（72.1%）、「その他教養科目」では76.7%（72.7%）、「専門科目」は79.3%（82.8%）であった。昨年および一昨年とほぼ同様の値ではあるが、「その他教養科目」が4.0%上昇しているが、「語学科目」、「情報科目」、「専門科目」は2～3%程度前年より下がっている。

「情報科目」の達成度別クラス編成について、『満足＆ほぼ満足』と回答した学生は70.4%（71.0%）であり、「オリエンテーション」については86.2%（89.4%）の学生が参加したと回答している。「単位制度」については72.3%（72.4%）の学生が『理解＆ほぼ理解』していると答えたのに対して、「履修と成績評価に関する説明や手続き」については、60.6%（60.2%）の学生しか『判る＆ほぼ判る』と回答していなかった。自由記述回答では、外国語教育の充実を要望する声が多く、また、カリキュラムの改善を訴える声も上がっていたが、今年度から適用された新カリキュラムへの評価についても、今後注視すべきであろう。

２）大学の環境

環境面では、ハラスメント相談室、図書館、チケットサービスコーナー、トイレについて、66～77%程度の学生が『満足＆ほぼ満足』と回答していた。特に大学の中枢施設のひとつである図書館は平成26年3月に改装を終えており、来年の学生の評価の変化に注目したい。また、昨年度まで学生に不評であったトイレについては改修を終え、ワーストから一転している。一方、学生控室、売店、書店などについては、昨年と同様に評価は低い。

自由記述回答では、コンビニやＡＴＭの設置を求める声が多く、近年建設された他学部の建物と比較して見劣りするのか、学部棟の建物や設備などの改善を求める声も多い。

３）事務職員の窓口対応

アンケート結果からは、学内の各窓口での対応に『満足＆ほぼ満足』と回答した学生が、昨年と同様に72.6～77.6%となっており、好印象を抱いている学生が多い。自由記述回答では『親身に相談に乗ってくれる』『お世話になっている』といった評価する声がある反面、業務の不手際を指摘する声もあった。文言通りに各々の学生の言い分を鵜呑みにする必要はないと思われるが、学生に対する対応には留意する必要はあろう。

４）他学部開放科目について

他学部の開放科目については前向きに捉えている学生が７割を超えており、他学部の講義に関心を持っている学生の割合は高い。特に支障のない限り開放可能な科目数を増やし、多様な学生

を受け入れることが望まれる。

５）学部間・他大学間との単位互換、所定の資格等の単位認定

例年同様82.8％（82.9％）もの学生が単位互換や資格等の単位認定を希望している。他大学の動向にも配慮しつつ、可能であるなら学生の希望に沿った早期の単位認定の制度の実現を望みたい。

６）就職指導

本学のキャリアサポート課による就職指導を受けた経験のある学生に限った回答であるが、その就職指導に関して『満足＆ほぼ満足』と回答した学生は73.8％（71.8％）、同課が主催する各種講座についても72.2％（76.1％）となっている。今後共、迅速かつ的確な就職情報の提供および指導が望まれる。

７）インターンシップ

インターンシップについて『有効である』と回答した学生は84.0％（81.6％）であり、実際に参加した学生の満足度も75.9％（72.8％）と高い率を示し、今後も同制度の重要性、ニーズは高まっていくことだろう。自由記述回答にもあるように、例年卒業要件単位としての認定を求める声は多く、難しい課題ではあるが、引き続き検討しなければならない。

８）奨学金制度

奨学金制度に対する学生の認知度は例年低く41.6％（43.4％）、しかも毎年下がっている。他方、奨学金受給者の満足度は71.7％（65.9％）が『満足＆ほぼ満足』と回答しており、一定の成果をあげていると判断できよう。

しかしながら、現在も奨学金制度の拡充を期待する声も多く、拡充だけでなく現況に対応する新たな奨学金制度の導入も早期の検討課題であろう。

９）学生生活等

学生でありながら、予習・復習を合わせて週にわずか２時間（２時間20分）程度しか勉強をしていない！ 留年してしまう学生は毎年少ないことから、試験前に少しの対策やレポート提出の提出で単位を取得しているのであろう。大学生（卒業生）として認められる実力を身に付けて巣立って欲しいものである。シラバスも“事前・事後学習”について記載するように改善されてはいるが、抜本的な対策を講ずる必要があろう。

一方、アルバイトは週に3.0日（3.0日）、15.8時間（16.0時間）も行っている。もちろん、これは学部の平均値であり、個人差はあるにしても勉学に励むという学生の本分からは程遠い現状である。

また、授業についていけると回答している学生が71.1％（72.9％）存在し、前述のとおり、早急に何らかの検討をする必要に迫られている。

10）学生生活全般

学生生活全般に対する学生の満足度については、79.2％（72.9％）が『満足＆ほぼ満足』と回答しており、自由記述の回答からも概ね好意的に捉えても良いであろう。一方、大学や学部の設

備、諸制度についての不満は存在し、今後、改善もしくは検討すべきである。より一層、学生生活の満足度を高めていくことが求められよう。

３．講演会の開催

１）第１回学部ＦＤ講演会

日　時 ： 平成 25 年 11 月 13 日（水）10:50～12:00

会　場 ： 現代マネジメント学部 205 講義室

演　題 ： ニュースになる政治経済　―日独比較―

講　師 ： ルートヴィヒスハーフェン経済大学（ドイツ）　教授・東アジアセンター長
レーヴェカンプ・フランク 氏

司　会 ： 星野優太（現代マネジメント学部 教授）

参加者 ： 学生、他学部教員にも公開し、教職員及び学生 50 名程が参加

２）第２回学部ＦＤ講演会

日　時 ： 平成 26 年 1 月 17 日（金）10:50～12:15

会　場 ： 現代マネジメント学部 205 講義室

演　題 ： こんな学生を採用したい！―企業側の視点から―

講　師 ： タキヒヨー株式会社 常務取締役（管理部門統括）
武 藤　篤 氏

司　会 ： 石井圭介（現代マネジメント学部 准教授）

参加者 ： 学生、他学部教員にも公開し、教職員及び学生 40 名程が参加

以 上

平成 25 年度　教育学部 FD 活動報告

教育学部　山田真紀・磯部錦司

１．平成 25 年度の計画（PLAN）

教育学部の FD 活動は、大森隆子学部長が平成 23 年 4 月に策定した「学部改善の方向性」を礎として、その実現のために計画されている。

学部改善の方向性

①教育学部の教育理念を踏まえ、大学院教育を含めた中長期目標を明確化する。学士課程教育の質的転換に向け、学生への教育活動のさらなる強化を図る。
②専修、コースの違いから来る独自性を踏まえた教育学部としての一体性のさらなる構築を図る。
③附属幼稚園、附属小学校、併設中学、併設高等学校との実習等を通じた有機的連携強化を図る。また、認定子ども園構想の方向性を見定めていく。
④卒業生のフォローアップ、卒業生との連携をさらに発展させる。
⑤教員と事務職員との協同、対等な関係と連携を維持する。

これに基づき、平成 25 年度は、教育学部の FD 活動として「授業公開週間の実施」「研究授業の実施」「FD 講演会の実施」「FD 研修会の実施」の４つの計画を立てた。「授業公開週間の実施」と「研究授業の実施」は①の学士課程教育の質的転換に向けた教育活動の強化とともに、②の専修やコースの独自性を踏まえた教育学部としての一体性のさらなる構築を目指したものである。なぜなら、教員が相互に授業内容を理解し、教育学部のカリキュラムの全体像を把握することが、各授業間において有機的連携を図り、学生の学びを構造化するうえで不可欠であるためである。また、「FD 講演会の実施」は卒業生を招き、学部教員と学部生がともに参加し、現場についての理解を深めるために行われるため、①の学生の教育活動の強化と、④の卒業生との連携の発展と密接な関係をもつ活動である。また「FD 研修会の実施」は、大学院発足を目前に控え、長期インターンシップを実現していくうえで、附属や併設校との研究協力の在り方を模索するためのものであり、①の大学院教育の目標の明確化と、③の附属・併設校との有機的連携強化を意図したものである。

２．計画の実行（DO）

①「授業公開週間」は、前期は 6 月 25 日から 7 月 20 日にかけて行われ、公開された授業は 40、参観者の延べ数は 50 人となった。後期は 11 月 18 日から 12 月 20 日にかけて行われ、公開された授業は 24、参観者の延べ数は 32 人であった。教育学部では公開授業リストに掲載されていない授業でも、事前に授業者に申し出があれば自由に参観できるというルールで行っている。
②「研究授業」は、「授業公開週間」の取り組みをさらに発展させ、指定された授業を全教員で

参観し、授業後にさらなる改善のための討論会をもつという取り組みである。前期には6月25日の1限「環境の科学」（野崎健太郎准教授）と2限「道徳の指導法（初等）」（山田真紀准教授）、6月27日の2限「模擬授業演習」（坂本徳弥教授のクラスと清葉子講師のクラス）を「研究授業指定科目」とし、研究授業を行うとともに討論会をもった。後期には、11月22日の3・4限「スポーツ科学（バドミントン）」（國井修一教授）の授業を「研究授業指定科目」とし、参加型の研究授業という新しい試みを行った。

③「FD講習会」では平成26年1月25日（土）15時30分から17時に、「明日の保育・教育実践を探る」という講演会を実施した。講演Ⅰは「子ども達とともに楽しい学校を」という講演題目のもと、椙山女学園大学の卒業生であり、現名古屋市立小学校校長である内田玲子先生を講師にお招きした。講演Ⅱは「幼稚園教諭の職務にて～その特性と魅力」という講演題目のもと、元浜松市立幼稚園長・幼稚園長会会長の鈴木まき子先生を講師にお招きした。

④「FD研修会」は平成26年3月4日（火）16時から17時30分に、聖徳大学副学長･教授の増井三夫先生をお招きし、「質的研究の方法と展望―教育実践学研究の推進にあたって、その方法の在り方と今後の方向を探る―」という研修会を行った。研修会の趣旨は、「教科」と「指導法」を止揚する研究方法を身に付けるとともに、自身の研究の方法論として、また、院生指導の方法として、質的研究法を習得し、学部と大学院教育に生かしていくためのものである。

３．評価（CHECK）

①「授業公開週間」については、公開される授業は多いものの、参観する教員の偏りが大きいことが問題である。つまり、複数回参観し、授業者にフィードバックを与えてくれる熱心な教員がいる一方で、「ひとり1回以上の参観」が義務付けられているのにも関わらず、1度も参加しない教員がいることが問題である。また、前後期ともに、授業公開週間が15回の授業のうちの後半部分に位置づけられているため、今後は前半や中盤に設けるなど、フレキシブルに時期を設定したい。教育学部としては、いつでも時間のあるときにお互いの授業を参観し、意見交換するような風土を作っていきたい。

②「研究授業」は、授業改善のためにも、教員間の相互理解のためにも非常に効果的な活動であるものの、研究授業対象科目を設定するのに毎回苦労すること、また全教員参加が原則であるものの、参観者が「いつもの熱心なメンバー」に固定化されつつあるのが問題である。

③と④は、充実した内容となった。「きっかけづくり」を与えてくれる内容であったため、今後も全教員で継続的に議論を重ねていくことが重要である。

４．来年度に向けて（ACT）

来年度は、これまで実施してきた上記４つの活動を継続するとともに、平成26年度はカリキュラム改訂の年にあたるため、新しい試みとして、全教員が毎月一回集まり、教育学部の現状と将来計画について意見交換する機会を設けることを行っていきたい。　　以上

平成 25 年度　看護学部 FD 活動報告

服部　律子

平成 25 年度は「椙山女学園大学における学士課程教育の質的転換のための改革アクションプラン」を受け、看護学教育における教育内容と教育方法の向上に焦点を当てて FD 活動に取り組んだ。

１．教育内容の向上に関する取り組み

１）カリキュラムの検討

前年度に実施されていたカリキュラムの見直しを受け、看護学の各専門領域の責任者と教務委員で構成する「カリキュラム検討ワーキンググループ」を立ち上げ、新しいカリキュラムの作成に取り組んだ。

２）看護学教育に関するワークショップ等への教員の参加

新カリキュラムの作成や今後の教育内容の検討に向け、下記のワークショップ等に教員が参加した。

（１）看護学教育ワークショップ「看護実践と教育の有機的連携に向けた看護系大学の取り組み」（主催：千葉大学、後援：文部科学省）

日　程：平成 25 年 10 月 28 日(月)～10 月 30 日(水)

会　場：千葉大学けやき会館

参加教員：杉浦美佐子教授

（２）「臨床と大学の協働により人を育てることのできる人を育てる」

（主催：愛知医科大学看護実践研究デンター）

日　程：平成 26 年 2 月 22 日(土)

会　場：愛知医科大学看護学部

参加教員：佐原弘子教授、杉浦美佐子教授、田中結花子講師、溝江弓恵助手、和田貴子助手、服部律子

２．教育方法の向上に関する取り組み

１）研修会の開催

（１）「教授学習観の転換とアクティブラーニング」

日　時：平成 25 年 8 月 23 日(金)　14：30～16：30

講　師：溝上慎一氏（京都大学高等教育研究開発推進センター/京都大学大学院教育学研究科准教授）

参加者：30 名

今なぜアクティブラーニングが必要とされているのか、アクティブラーニングとは何かに始まり、先端的取り組みや溝上先生ご自身の取り組み例が紹介された。各自が今まで取り組んでいた方法がアクティブラーニングであったことを確認する機会や、新しい教育方法の工夫について考える機会となった。

（２）「対話型授業の取り組みについて考える」

日　時：平成 25 年 10 月 10 日(木)　16：30～18：30

講　師:池田光穂氏(大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授)

参加者：7 名

学部全体の研修会のプレセッションとして、参加希望者を募って小グループによる研修会を開催した。

PBL(problem based learning) や SGL(small group learning)、SDL(self-directed learning)の目的や方法について紹介された後、グループ学習の展開方法、取り入れる際の留意点などについて説明された。その後、参加者で本学学生の特徴などを踏まえ、池田先生を交えてどのような導入が考えられるかなどについてディスカッションを行った。

普段は演習の進め方などについて具体的な話をする機会のない他領域の教員とディスカッションする機会となり、有意義な研修会となった。

３．その他

１）平成 25 年 4 月就任の教員 12 名を対象に、「人間論」の第 1 講の聴講を含めたプログラムで研修会を実施した。

２)新任教員研修セミナー(八王子セミナーハウス)に安本卓也講師が参加した。

教育内容に関する取り組みは、平成 26 年度に改正の申請を行う予定で進行しており、活動の成果を上げている。

教育方法に関する取り組みでは、多くの教員が臨床実習指導のために常に実習病院に出向いている看護学部では、学部全体での研修会の調整に困難を要している。小グループでの研修会において、普段は教育について具体的な話をする機会のない教員同士のディスカッションの機会となるなどの効果が認められたことを踏まえ、次年度は、少グループの研修会など研修会のあり方について検討が必要である。

Ⅱ　大学院ＦＤ委員会の活動

１　研究科 FD 活動報告

Ⅱ．１　平成２５年度　大学院ＦＤ活動報告

2013 年度椙山女学園大学大学院生活科学研究科 FD 活動報告

生活科学研究科 FD 委員長　加藤昌彦

生活科学研究科では、授業の内容及び教育方法の改善を図るための研修及び研究を組織的に実施するため、2012 年に FD 委員会を立ち上げた。生活科学研究科は、現在、食品栄養科学専攻と生活環境学専攻の２つの専攻科により構成されているため、FD 委員会の構成員は、両専攻科専攻世話人各１名、両専攻科より選出の委員各１名及び研究科長とした。

2014 年 3 月 31 日現在の構成員は、立ち上げ時から変わらない下記の５名である。

中村好志（研究科長）
内藤通孝（食品栄養学専攻世話人）
小野徹郎（生活環境学専攻世話人）
加藤昌彦（食品栄養学専攻選出委員）
高阪謙次（生活環境学専攻選出委員）

１．生活科学研究科での取り組み

いまだ、生活科学研究科では FD 活動として、具体的な活動はほとんど進められていない現状であるが、2013 年度には、下記の FD 活動の基盤とすべき「大学院教育の考え方」を大学院担当教員すべてが共有し、この考え方をベースに当研究科における FD 活動計画の議論を進めていくところまで辿り着いた。

～大学院教育の考え方～

大学院教育は、学部教育を受けて、より進化した内容を各専門分野の特性に応じて教授することが基本となる。さらに、大学院教育は、社会の中で学生がプロフェッショナルとして活躍できる力となるものでなくてはならない。

こうした大学院教育を達成するために、教員側としては共通した基礎教育をベースに異なった分野の研究状況を共有し、社会の中における自分たちの研究の現状を把握することが必要となる。同時に、教育内容が教員サイドの一方的な押し付けにならないように、学生側の意見を常時吸収できる体制を整えておく必要がある。

2013 年度、当研究科においては、この「大学院教育の考え方」を基本に、これからの FD 活動内容について検討してきた。現在までのところ、当研究科では以下のような FD 活動について、実現性および実効性について議論を進めているところであるが、具体的な行動計画にまでは至っていない。

1）　大学院担当教員間の意見交換

① 教員同士が、それぞれの専門領域における研究の現状について報告し、意見交換を行う場を設ける。

② 現在、学生に指導している研究テーマを公開し、研究指導全般における指導上の問題点などについて意見交換を行う場を設ける。

2）　大学院担当教員による他大学の大学院教育の現状の聴講及び報告会

① 他大学の大学院教育を聴講し、報告会を兼ねた意見交換を行う場を設ける。

3）　大学院担当教員と学生との懇談会

① 現状は、大学院の定員が少ないため個人が特定されやすい授業アンケートは行わず、学生が大学院担当教員に自由に意見を述べることができる懇談の場を設ける。

2014 年度には、上記１）～３）のうちの一つでも二つでも具体的に実践に移すように努める。

平成 25 年度人間関係学研究科 FD 活動概要

本人間関係学研究科では修士論文に係る学生指導に直接関わる組織として臨床心理学領域、社会学領域、教育学領域の3つの組織編成をおこなっている。そこで平成25年度の人間関係学研究科における FD 活動を、研究科全般に渡る活動と各領域別活動に分けて以下に報告する。

人間関係学研究科全般

人間関係学部および人間関係学研究科では、学部研究科の研究教育パフォーマンスを向上させ、かつ社会貢献を促進する方途として地域との連携を構想してきた。平成25年度にはそのための機構組織として「地域連携ユニット」を立ち上げ、活動準備を行った。具体的活動としては、平成26年2月24日に第1回地域連携研究会を開催し、愛知県の学校(小中高および大学)と地域との数多くの連携において、中心的なコーディネートを担っている NPO 法人アスクネットの設立者・代表理事・事務局長の 3 名を講師として招いた。アスクネットのこれまでの実践例をふまえて、大学と地域がどのようかたちで連携が可能なのか、また具体的に日進市においてどのような展開が可能なのかを提案してもらうとともに、参加者と意見交換をおこなった。

人間関係学専攻臨床心理学領域

＜研究教育活動＞

・心理学実験の TA（前後期）：学部 2 年生を対象とした心理学実験の TA として、大学院生 10 名(M1)が 1 年間にわたり実験実習をサポートし、心理学研究法の実践的サポート、統計解析、レポート作成の相談にあたった。

・修士論文中間発表会（7 月 26 日）：3 グループに分かれ、1 月に修士論文を提出する予定であった 9 名の大学院生（M2）が発表した。これは毎年実施し、原則として全教員、大学院生(M1,2)が参加している。大学院生は指導教員による指導を超えて、他の教員や大学院生からさまざまな助言指導を得ることにより、より広い観点から研究にアプローチする力が涵養される。

・臨床心理相談室紀要『椙山臨床心理研究』の発行：教員 1 名が研究論文を執筆し、大学院生(M2)9 名が事例研究を執筆した（3 月 7 日発行）。大学院生の事例研究については、原則として外部の臨床心理士や精神科医からコメントをいただき、事例の理解や自身の臨床実践上の課題などを振り返ることにより、その後の臨床実践や研究に示唆を得る好機となっている。

・卒論発表会(2 月 1 日)：学部 4 年生全員が卒業論文の成果を発表する卒論発表会において、大学院生(M1) 11 名が会場の司会（座長）として運営に携わった。

＜臨床実践＞

・椙山女学園中学校・高等学校におけるスクールボランティア（生徒に対する相談援助活動）：大学院生(M1,2)が自発的に参加し、スクールカウンセリングを体得する機会となっている。

・臨床心理相談室ケース報告会（3月8日）：臨床心理相談室では参加可能な全相談員・実習員（非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・大学院生）が一同に会し、年1回スタッフ会議を行っている。大学院生・修了生には、組織における臨床相談上の実践的な課題などを検討する好機となり、非常勤相談員には相談室運営上の課題などの共有の場となっている。

・臨床心理士資格試験の面接への心構えについてのオリエンテーション（11月8日）：教員1名により、臨床心理士資格試験の一次試験に合格した大学院修了生6名に対して全体オリエンテーションを行った。また、一次試験に合格した全員に対して全教員が分担して、面接に対する個別指導を行った。

・日進市教育委員会との連携事業

発達障害保護者相談会：日進市内の小中学生の保護者を対象として子どもの発達障害に関する相談会を開催した（9月5日，9月6日）。教員6名が保護者23名の相談を受けた。

小中学校への巡回指導：教員7名が市内の11小中学校に前後期の2回出向いて、巡回指導を行った（平成25年7月～平成26年2月）。

人間関係学専攻社会学領域

＜研究教育活動＞

・院生の自主的研究活動のためと教員有志の集団的研究指導のための組織として社会学研究会を設立している。組織の運営は院生が担うものとし、教員有志からの寄付金によって運営されている。領域代表が顧問に就任し、研究会活動をサポートしている。活動実績としては毎年、数回の在籍院生による研究発表会をおこない、現職教員有志や修了生も参加して研究アドバイスを行っている。平成25年度は3回（4/20、7/27、12/14）の研究発表会が行われた。

・毎年、領域全体で学生の修論作成の進捗状況を確認し指導するための場として領域教員全員が参加する修士論文中間発表会を行っている。25年度は10月5日に発表会を行った。

人間関係学専攻教育学領域

＜研究教育活動＞

・毎年、領域全体で学生の修論作成の進捗状況を確認し指導するための場として領域教員全員が参加する修士論文中間発表会を行っている。25年度は5月18日と11月30日の2回、発表会を行った。

Ⅲ　大学教育の質の向上に向けて

1　シリーズ「私の授業論」

私の授業論

生活科学部　間瀬　民生

本学に着任して9年になる。35年間、企業戦士として過ごしてきたが、当時も部下に少なからず女性がいて、特に女性の大学進学率が低かったころは高卒の女性も多く、正に学生と同年代である。同じ年代の女性ながら両者の間で最も異なる点は、こちらを注視し、言動を理解し、より効果的な行動をしようとする積極性が見られるか否かにある（後述する授業を例にして）。労働により対価を得る彼女達にとり、リーダーが示す社会・事業環境や企業・部門の方針の理解とそれに基づく行動は不可欠であり、組織の成果が自分の利益に繋がることを理解しているからである。一方、大学での授業の成果は試験などの成績を通じ、個々の学生の内に積み上げられるが、彼女達はそれがどのような価値に繋がるか具体性に乏しい為、社会人の積極性に及ばないのであろう。それを学生達に充分伝えられてない現在、未だ良い関係にあるとは言えず、反省と改悟の日々でもある。

以下は、授業論と言うより私の授業の紹介であるが・・・。

１．授業を始めるに当たり

食品と化学分野を主に担当している。その内、1年次前期の「食品分析学」に関して実情を記述する。本教科は後期から始まる「食品学実験」の準備教科であり、それ以外の化学に関連した入門的教科でもあることから、学生に対してだけでなく後の関連した教科を担当される先生方に対しても責任のある教科と捉えている。

この授業は技術習得型授業であることから、以下のようなハンデを背負っていることを先ず弁明しておきたい。

１．高校の授業と違い大学での90分の長時間受講の始まりであること。

２．受講生130名ほどの多人数の講義形式の授業であること。

３．およそ80%の学生は「化学」が好きではないこと。

４．講義による化学実験手法の理解は、学生にとり実感として捉え難いものであること。

等が挙げられ、それらに対応した工夫を凝らしている。

２．授業時間対策

他人の話を90分間熱心に聴くには相当の体力・気力を必要とするもので、ましてや1年次の学生に於いてをやである。そこで落語で言う「枕」の如く、時事問題の中から食品や化学に関連した簡単な話を数分して、こちらを注視させることから開始する。学生の時事問題・社会情勢に対する関心は極めて低く、おそらく新聞やその他のメディアを通じてさえも毎日接することが無い為か、興味を示してくれる。

授業半ばには、休憩を入れる。最初と同じく学生が興味を持ちそうな話題を、映像を使い、時にクイズ形式で５分ほど話す。クイズ形式で紹介する場合は、特に学生は関心を示す。

３．大人数講義対策

大人数授業では後部位置学生の成績が低い傾向にあり、逆に彼女らは授業評価に対し厳しい評価を下すと報告されている。授業を聞くより友人との人間関係が優先する為である。指定席とすることで聞き取れる私語は抑えられるが、授業に集中している為とは思えない。私語に対して「うるさい」的な言葉は発したことは無く、「面白い話題なら皆に話してやって」と言うか、だまって座席表を見るだけで静かになる。こちらの動きには注意してくれているようである。

時々授業の評価方法について紹介するが、その中に、授業への集中度が 20%を占めることも話すことにしている。「評価」に関してはかなり敏感である。

授業資料は毎回配布しているが、授業の開始時の配布ではなく、必要になった時点で配布する。それは、学生が体を動かすことで気分転換を図れる配慮の為である。しかし、大人数授業にあっても、双方向性を持った参加型授業への転換の必要性は強く感じている。

４．「化学は嫌い」対策

本学科は理系か文系かと問われれば、微妙ながら理系であろうか。この空気を察してか、授業開始直後は多くの学生が「高校時代、化学を勉強してきませんでした」とか「化学は苦手ですから」と、予防線（？）を張りに来る。「大丈夫、これから好きになれば」と答えるのが毎年の恒例である。天才的な資質を必要とするものを除けば、或ることが出来るか否かは主に「興味の有無」に掛かっている。彼女たちの高速でのスマホ操作は、私から見れば天才的な資質であり、それは「興味と必要性、仲間意識と繰り返し」がなせる技であろう。従って、「興味を持たせる」ことと「繰り返し学ぶ」ことに最も注意を払っている。時々演習により理解度を測っているが、ほぼ同じ問題に答えられない学生も少なからずいて、もう一工夫の必要性を感じている。

５．実感としての化学の授業対策

実験授業の準備教科である本授業で、言葉や板書きで理解させられる部分は少ないと認識している。実験器具や機器、操作法、化学変化など、いくら言葉を積み重ねても理解出来ないのは無理はないと思う。そこで「百聞は一見に如かず」で、出来る限り視覚に訴えるようにしている。しかし実験室でもない講義室でこれを行うのは当然限界があり、映像と簡単な実験でのみ化学の面白さを伝えようと努めることになる。授業方法は、最初に前回の復習、当日の「板書き口述」による解説後、ほぼ同じ内容を「映像と実験」で再確認しているが、この繰り返しは好評を得ている。レベル対象は上位から 3 分の 2 辺りに置いているが、中には化学に興味があり、知識もある程度持ち合わせている学生もいて、彼女達には不満かも知れない。

最も理解できないのは、入学試験の化学のレベルに比べれば本授業の内容の理解は容易であり、またそのように努めているつもりでいるが、何故かそうではない点である。

以上のようにここ何年か、同様の手法で進めているが、授業アンケートを見れば年度毎に大きな差があり、早い時期にその年の学生の特徴を判断する必要がありそうである。

私の授業論

国際コミュニケーション学部　水島和則

アクティブ・ラーニングのウエイトを高めるという近年の授業改善目標にとって、頭が痛いのが大人数の履修生を抱えた、主に講義形式の授業である。ここでは、百名を越える人数の講義をほぼ十年、学期内に三つ抱えてきた経験をもとに、アクティブ・ラーニングの推進を大人数受講の講義科目にも組み込めるのか、というテーマに絞って考えてみたい。とはいえ、自分のやってきたことや現時点のアイディアをいざ列挙しようとすると、「参考にならない」と一蹴されそうなものばかりである。たとえば、私は授業時間後に授業時間以上の時間をかけて、150人であっても学生に書かせた作文をチェックするが、これも楽しみでやっているだけで、他人から強制されれば決してやらないだろう。また、「そんな時間があればご自分の研究に使ったら」と皮肉られれば反論の言葉もない。偏った意見、極論にみえる箇所は思考実験の材料と受け止めて、笑い飛ばしながら読んでいただければ幸いである。

さて、「アクティブ・ラーニング」がたんなる掛け声に終わらないためには、具体的にどんなスキルを学生たちに「主体的に」身につけてもらうべきなのかをあらかじめ明確化しておかなければならない。ここでは情報収集・仕分け能力、情報処理スピードの向上、論証型ストーリーの構築力の三つに分けて、それを強化するアイディアをまとめてみた。

１　情報の収集・選別・仕分けを自らおこなうスキル

高校までは（大学でも授業の性質によっては）教科書を渡されて、その範囲から試験問題が出題され、その得点によって成績が評価される。しかし、われわれは現在、過去 50 年間に生み出された情報の総量が過去 5000 年に生み出された情報量を上回る、「情報爆発」の時代を生きている。このような情報の洪水のなかから、必要な情報を選び取る能力を身につける訓練は急務であろう。このために有効と思われるのは、Bibliography 作成、あるいはもっと高望みするなら Literature Review 自体を課題化することである。最終課題は、「授業を受講して自分の興味をもった論文や本（読んでなくてもよい）を列挙して文献リストを作成する」といったものでもいいのではないか。少なくとも、教師の側が用意したリストを配布する一方向の授業では、学生の情報収集能力は育たない。

また、調べ物をして書くレポートを課す場合、なるべく授業の早い時期に実施するのが有効である。期末課題では、学生にフィードバックできる評価は成績だけになり、どのようなレポートが評価されたのかを詳しく説明することができない。逆に早い時期にレポートを提出させれば、学生たちの情報収集・選別の甘さを厳しく指摘し、たとえばネット上に溢れた情報がいかに粗悪なものか、信頼できないものかを考えさせることもできる。つまり授業自体を、提出されたレポートの講評というかたちで進められるのである。

２　大量のインプットによる視野の拡大ならびに自分の「情報処理スピード」の自覚

海外の多くの大学では、とうてい読み切れない分量を読む課題が出されるので、学生は読む

スピードを自分がどこまで上げられるかを意識せざるをえない、といわれる。「一分間に何語読める？」という質問をしても多くの学生は即答するようになる。対照的に日本の大学では、一定の書物を時間制限内に読む訓練、あるいは読むスピードを競う訓練が自覚的にはおこなわれていない。高校までの国語が「鑑賞」という名の精読訓練ばかりを重視していることも大きい。

これまで、たとえば必読図書を指定した場合、受講人数分の本が図書館にはないので、学生に図書の購入を強いることが多読のネックになっていた。しかし、一冊の本くらいの内容がネット上にあったり、テキストデータが大人数の授業でも配布可能となった今では（たとえば S＊map によって）、こうした障害は取り除かれつつある。私の知人の大学教師は、「論文 100 本ノック」を実施している。毎週 5～10 本の論文を紹介し、学生がその中から 2 本を選んで読んでくるのだそうだ。このやり方が優れているのは、読む範囲をフレーム化しているが、講義などをはるかに越えた分量の情報を指示している点である。もっとも、これはゼミの話なので 100 本を読むには二年間を想定している。たとえば論文を読んでもっとも重要だと思ったフレーズを選んでくるとか、最重要概念を選んで解説を簡潔に書く、といった課題によってチェックをおこなえば、多人数に大量のテキストを読ませる訓練を実施することも不可能ではない。

３　「論証型」ストーリーの文章を自分で組み立てられるスキルの習得

現在、グーグルでの検索やウィキペディアなどの普及、もっと本質的には本を読まない学生が増えていることが影響して、多くの学生たちは複雑で紆余曲折した論証を辿ったり、組み立てたりする能力が身についていない。自動販売機にコインを入れると缶ジュースが出てくるように、キーワードを入れると「正解」が得られるという感覚の学生が増えているように思う。

「論証型」ストーリーの文章を組み立てるうえでとくに重要なのは「問い」の作成力である。ところが、もともと筆記試験では、「問題」はもっぱら教師が作成して、生徒は正解探しをするだけなので、自分で問題を探し出し、問いを立てる能力、また「問題」の良し悪しを値踏みするという、知的活動でおそらく最も重要な能力は育成されない。

ここで強調したいことのひとつは、しばしばアクティブ・ラーニングの代表的活動とみられている、パワーポイントを用いたプレゼンをやらせても、論証型ストーリーを構築する力は身につかないということである。パワーポイントでは、スライド内の箇条書き内容相互の関連、スライド間の論理的関連が不明確でも何とかサマになってしまうからだ。結局のところ、論理力を養うには文章を書かせるしかない。問いを立てる力を養うには、授業感想カードなどで授業内容に対する質問を出させて、次回の授業で優れた質問を紹介するなどの方法が有効である。

反論を恐れずにいえば、なるべく多くの時間を、学生がアウトプットを作成する作業時間にあてるとするなら、90 分の授業のなかで教師が話す時間は少なくなってもいい。講義内容を準備するのに要する時間の一部分も、学生のアウトプットに目を通す時間に回してよい。かりに、以上説明してきたようなやり方を実行すると学生の過重負担になると考えるならば、授業時間を早く切り上げることを検討してもいいかもしれない。情報の選別と仕分けを教える以上、間違っても「時間つぶしのために話す」ことがあってはならないのだ。

私の授業論

人間関係学部　佐川佳之

はじめに

私は2012年に本学に着任し、今年度で3年目になる。着任するまで2年ほど非常勤講師で細々と高等教育に関わってきたものの、教員としての経験が浅く、まだ十分に自分のスタイルを築くに至っていない。この2年間は同僚の先生方のアドバイスを通じて自らの実践を反省しながら、また真摯に勉学に取り組む学生との対話を通じて授業を進めてきた。これまで何とかやってこられたのは、私個人の力量というより、そうした周囲の助けによるところが大きい。それゆえ、「授業論」と言えるほどの文章を書くことは難しいが、こうした執筆の機会にこの2年間を少し振り返ってみたい。とくに着任してはじめて担当することになった卒論指導をめぐる雑感を述べていく。

卒論指導へのとまどい

私の専門分野は教育学（とくに教育社会学分野）であり、とくに不登校、いじめ、非行といった教育に関わる社会問題とその支援に関する研究を行っている。人間関係学部では「青少年論」「非行問題」といった授業を担当しているが、こうした授業でも社会問題を考えるための理論や事例を取り上げている。ただここでは基本的な教育学や教育社会学の理論を紹介するだけでなく、その問題を生きる当事者の経験や困難をいかにとらえられるかという問題を考えることも重視している。そうした授業の性格からか、私の卒業論文の授業には、教育に関わる社会問題や若者文化に関心をもつ学生が参加してくる。

着任当初、最も戸惑ったのがこの卒業論文の指導であった。卒論でも先行研究を踏まえた上で学問的な新しい知見を提示することが必要だとの意見をよく耳にするが、実際、これを研究の世界に充分に通じていない学部生が達成するのは至難の業である。私自身もそうであったが、大学院生でさえ先行研究を整理し、新しい知見を提示するというところで苦労している。論文の理念的な方向性と学生の現実的な力とをどう折り合いつけ、指導していくのか。卒論を教育実践としてどのように位置づけていけばよいのか。学生に何を学んでもらいたいか。はじめて卒論指導に関わるにあたって早々に、問題に直面した。

自分自身の卒論執筆を振り返る

この問題に対して、今の自分の力の中でできることとはなにか。とりあえず私自身がどのような卒論指導を受け、そこで何を得たのかについて、自分の原点を振り返ってみることにした。

先述のように、私の専門分野は教育学であるが、実は学部時代には日本民俗学に関心をもち、修士課程に進学後は社会人類学の研究室に所属していた（その後、紆余曲折を経て教育学分野に移行した）。旅への憧れもあったし、旅での出会いを通じて体感的に物事をみる視点が単純に

興味深かったからである。学部時代の指導の先生は英文学を専門としつつも、民俗学や文化論にも深い造詣をもつ研究者であった。そのゼミでは先生が学生に対してフィールドで体感することを重視したため、メンバーの多くが国内外でフィールドワークを行うような雰囲気ができており、その調査報告は知的刺激を与えてくれるものであった。私自身も農村に伝承される民俗芸能を卒論のテーマに選び、山形県のある農村でのフィールドワークを実施することにした。

現地を訪れ、そこでの人々との出会いや不思議な出来事との遭遇はとても楽しかった。祭りの日には、人々とともに神に祈りを捧げ、夜を徹して酒食と会話に興じる中で、現地のさまざまな文化や地域固有の問題、そこに暮らす人々の生き様を体感的に知ることができた。もちろん、このフィールドワークは民俗学者や文化人類学者の仕事の「ごっこ遊び」すぎず、執筆した卒論は大学院入試の面接で多くの批判を受けるなど、学問的な成果に結びつくようなものではなかった。だが、たとえ学問的な価値はなかったとしても、旅を通じた人との出会いの中で大学の授業では得られない知識を学ぶことに喜びを感じた作業であったと言える。

結局、憧れていた文化人類学者になることはできなかった。しかし出会いから物事を観察し、理解するおもしろさは今でも忘れられない。現在の研究対象は自身が住む社会の出来事であるが、ここでは研究として知りたい事実の確認というより、「古老」に会い、その知恵を聞きにいくような感覚でフィールドワークを行っている。正直なところ、研究的な意義に関わる事実を知ること以上に、そこでさまざまな形で語られる人々の生き様を発見することになりよりの充実感をおぼえている。

卒論をめぐる出会いと学び

自身の経験を振り返ると、卒論には学問的な価値とは異なる価値もあるように思われる。卒論を通じて、新しい人間関係をつくり、授業では知ることのできない知識を発見する中で学生個人にとっての価値ある学びが得られるのではないか。自身の経験のみに頼って教育に関わることに禁欲的でなければならないことを自覚しつつも、卒論の学生にはできる限り現場を訪れ、その場を生きる人との関わりから課題を考えることをすすめてみた。

どうなるか不安であったが、多くの卒論生が現場に関わり、最終的に力のこもった卒論を提出してくれた。たとえば、ある学生は、ある問題を生きる人々の出会いの中で、対象を理解するだけでなく、自分自身がもつ問題に向き合うことにもつながったと語る。またそうした出会いの中で得られた学びに対して、調査対象者に成果をフィードバックしたいと述べ、卒論の完成度を高めようとする姿勢も見られた。ある学生が「限界を感じた」と語ったように、提出された卒論は荒削りなものであったが、その一方で、人との関わりを通じてこそ得られた学生それぞれの気づきや学びが確かにあったと言える。

もちろん私自身これで充分だとは全く考えてはいないし、反省点をあげればきりがないが、こうした学生の姿を見ることができたのは大きな収穫であった。今後、この経験をもとに、より充実した卒論指導の授業を追求していきたい。

私の授業論

文化情報学部　向　直人

本学には 2011 年度に着任し、「情報科学」に関連する授業（「人工知能」、「データベースシステム」など）を中心に担当している。前任校では工学部に在籍し、理工系技術者の養成を目的とした教育を行なってきた。本学では一転して文系の色彩の強い文化情報学部に在籍することになった。文化情報学部は、私の専門である「情報科学」から、能楽に代表される「伝統芸能」まで、幅広い学問領域を網羅している。本学部の学生は、看護学部や教育学部といった目標が明確な学部とは異なり、これといった目標を持たずに入学してくるケースが多い。本学部のカリキュラムを通して、多彩な教員が提供する知識・技術から、個々の学生は自身に適した分野を発見し、学びを深め社会に旅立つまでの準備を整えていく。このプロセスにおいて、教員が果たすべき重要な役割の１つは、「学問的な知識・情報」と「実社会を生き抜くための技術」とのギャップを埋めることではないかと考える。着任後の３年間において、「授業中に経験したこと」、また、「授業で心掛けていること」を下記にまとめ私の授業論としたい。

情報過多の時代の学びとは

インターネットが普及することにより、誰もが容易に情報を発信・取得することが出来るようになった。たとえ分からないキーワードがあったとしても、インターネット・ブラウザの検索フォームに入力すれば、いとも簡単にキーワードに関する膨大な情報を得ることができる（例えば Google で“Google”と検索すると約 15,120,000,000 件のサイトが 0.26 秒でヒットする）。しかし、このようにして得られた知識・情報は、果たして“学んだ”といえるのだろうか。学生に何かしらの調査を課すと、インターネットで検索した結果をそのまま提出するケースが散見される。確かに答えは正しい。だがこれは“学び”ではない。ただ“検索”しただけだ。本当の“学び”とは、得た知識・情報を消化し、様々な事柄に当てはめて“使える”状態にすることだと考える。特に情報科学（より一般的には工学）の分野において、この傾向は著しい。

情報・知識から技術へ

インターネットから得た知識・情報は“学び”ではないと述べたが決して無駄ではない。最も大事なことは、知識・情報から“使える”状態にするまでの橋渡しをすることだ。例えば、「人工知能」において解説している「探索アルゴリズム」は、そのもの自体は定式化された問題を解くための手順であり、一見ではその有用性を理解できない。たとえ、「探索アルゴリズム」が身近な「路線検索」や「カー・ナビゲーション・システム」に応用されていることを伝えても、実感を伴って理解されることはない。そこで、私の講義では、アルゴリズムの解説の後に、コンピュータ上でアルゴリズムをプログラミングすることを課している。技術的な理由により学生自身のプログラミングが困難な場合は、図 1、2 に示すような、アルゴリズムの実用面の理解を促すためのプログラム（アプリケーション）を事前に作成し、授業中に学生に触れてもらうようにしている。図１は、グラフの最大値を求める探索アルゴリズム（最急勾配方）の振る舞いを可視化したプログラムのスクリーンショットである。探索点がグラフの山を登っていくプロセスを直感的に理解することができる。図２は、コンピュータがゲーム（じゃんけん）に勝つための戦略を獲得するまでのプロセスを可視化したプログラムのスクリーンショットである。学生が

じゃんけんの手（グー、チョキー、パー）を選択することによって、コンピュータが学生の傾向を学習していくプロセスが段階的に理解できる（チェスや将棋などに応用することも可能）。学生はこれらのアプリケーションを操作し体感することで、得た“知識・情報”を“使える”ようになるまで昇華することができる。

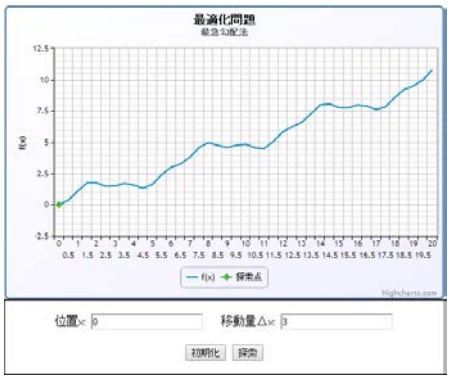


図１　探索アルゴリズム

図２　学習アルゴリズム

さらなる高みへ

前述したように、本学部の学生は多岐に渡る分野から自身に適したものを選び、さらに実践的な知識・技術を身に付けていく。私のゼミに配属された学生には、「情報科学」への興味・関心のみに留まることのないよう、より応用的な高いレベルへの“気付き”を与える事を心掛けている。それはビジネスにおける製品開発のプロセスに近い。即ち、ターゲットとなるユーザを定め、ユーザの望むものをヒアリングし、ユーザが満足する製品を試行錯誤しながら生み出す。講義での“学び”は基本的に自分自身が理解し修得すれば良い。しかし、ビジネスにおける中心は自分自身ではなくユーザ（顧客）にある。ユーザを満足させることが如何に難しいか学生は身を持って体験することになる。これは、教員が教えられるものではなく、学生自身が“気付く”しか方法はない。今後、本学部の学生から、社会を驚かせるような製品やサービスが生み出されることを期待したい。

私の授業論

現代マネジメント学部・和久　豊

椙山に赴任した頃は「楽しく知的に 90 分」をキャッチコピーにして授業をしていた。このことはどこかで書いた覚えがある。以来、時は流れて世は平成も 26 年を迎えた。高校生の半数が大学に進学する時代、「どげんかせんと」と宮崎弁で考えてみるが妙案があるわけではない。

担当は語学だから、一発逆転の指導法などありえない。地味にコツコツ毎日 30 分でも１時間でも続けるしか方法はない。俗にいう「語学に王道なし」である。しかし、しかしである、世間には石川遼君でおなじみの「スピードラーニング」だの、セイン・カミュの「エブリデイ・イングリッシュ」だのという「聞き流すだけで英語が上達」「辞書もノートも不要」という類のキャッチコピーが溢れかえっている。もっとも、経験してみないと評価も批判もできないから、車の中で聞いてはみるが「これで４技能が身につくとは思えない」が率直な感想である。

反射的に　Hi, Mike. How are you?
I’m fine, thanks. And you?

と言える“オウム人間”養成でいいというのなら話は別だが。

日本という国は不思議な国ではある。町の書店には英語関連の本、ＣＤ、ＤＶＤが山積みである。街中には会話学校がゴマンとある。カルチャーセンターでも語学は花盛り。ラジオ、テレビにも語学番組があふれている。にも拘わらず世界でも有数の語学下手の国民。それでも国際化を叫ぶ。その結果、グローバル化という呪文に縛られて、国民は、猫も杓子も英語学習にまい進させられる。大学生は就活に有利にと TOEIC のスコアをあげようと四苦八苦。社会人の“お父さん”も、出世の術として TOEIC のお勉強。結果は、残念ながら、ほとんどは消化不良と相場は決まっている。

こういう環境でのわが授業論を吠えようと思う。

まず、大学での「語学教育」はどうあるべきか？　平成３年のいわゆる「大綱化」前のような教養としての語学教育（つまるところ、文学作品やエッセイの訳読）は論外として、ターゲットをどこに置くのか？　基本的には、必要な分野で英語を操れる能力を身につけることになるのだろう。言フハ易シ、サレド行フハ難シ。

本来、中学校・高等学校で基本的な事柄はマスターしているはずだが、まあお寒い限りである。ありていに言って、現行学習指導要領（いわゆる「ゆとり世代）向け）で身についたことは、せいぜい、生徒の耳が少し良くなったことくらい。

目標は将来必要となった時に困らないよう「４技能をバランスよく修得」することにある。入学してくる学生の平均像は、聞き取り以外の面はおぼつかない。この事情を鑑み、わが授業論は強いて申せば「ほめ殺し作戦」になる。

わが授業の比率は、

Listening ＝３割、Reading ＝４割、Writing ＝２割、雑学 ＝１割となろうか。

一見 Reading の割合いが多いように思えるが、これは「裏番組」が全てネイティブの授業で Speaking, Listening はそちらで補えるので、あえて増やしている。

わが「ほめ殺し作戦」は次のようなものである。

リスニング多用のテキストを使用し、学生の得意分野をしっかり伸ばして達成感を抱かせる。つまり、いい気分にさせる。その文脈で、Reading Skills や Writing をみがく練習をさせる。ひと昔前の「訳読方式」ではない。主に Skimming と Scanning である。主として必要な情報を素早く読み取る能力を養う方法である。（上級クラスでは一切の条件をつけずに 10 分程度の Extensive Reading を付け加える。）

その為には、教材はできるだけ authentic materials を心掛ける。テキスト以外で、Reading skills を身に付けさせるため、ウェブサイトから最新の情報、定番の情報を紹介する。例えば、BBC News からの話題の情報。

Stem cell ‘major discovery’ claimed

By James Gallagher　Health and science reporter, BBC News

Scientists in Japan showed stem cells can now be made quickly just by dipping blood cells into acid. Stem cells can transform into any tissue and are already being trialled for healing the eye, heart and brain. The latest development, published in the journal *Nature*, could make the technology cheaper, faster and safer.

（付記：この記事は疑問が出る前の１月末のものである。）

たったこれだけの英文情報で、小保方晴子さんが、どういう方法で何を成功させ、将来何に応用できるのか、が理解できる。基本となる用語は、stem cell, dip, blood cell, acid, transform くらいである。日本の新聞に掲載された、研究とはおよそ無関係の「割烹着」姿とか「研修室の装飾や色」とは無縁の文章である。ここで、日本の新聞記事と比較させれば彼我の思考回路の差を理解するきっかけともなる。私のいう「雑学」とは、この文化の底流にある発想を理解させる、大学生のための“考える異文化理解”である。

わが授業論は、この延長戦上にあるとっても過言ではない。「難しいこと」を「易しく」学ぶ過程で、自ら能動的に行動できる態度を養成する。「こりゃおもろそうだ」と思わせるインセンティブ重視のためのほめ殺し作戦。

人間は興味を持てば自ら動くようになる。その仕掛けをどうするかがわが授業論の一部である。そのためには、現代のツールはあまねく利用することにしている。学生お得意のスマホ、使わないテはない。iPad、その場で画像付の補助教材となる。さらに「オジイチャンの家にある！」と言われようがカセットテープも使う。１文をリピートさせるのに、ＣＤなんかよりはるかに使い勝手がいい。

つまるところ、わが授業論は「現状で利用できるものは総動員しあの手この手を弄して、学生のインセンティブを高める」という当たり前の模索になる。（2103 字）

大学における主体的な学習

―A3用紙という空間を通じて―

教育学部　服部次郎

はじめに

前任校で保育実習（施設）を８年間担当する中で、本実習（福祉施設における実際の実習）をいかに意義あるものにするかを長年検討してきた。その過程で、事前・事後の学習活動が極めて重要であることを実感した。とはいうものの、どのような学習を事前・事後にすることが実習に参加する学生にとって有効であるのかについては、必ずしも明快な答えが自分にあったわけではい。そのような中で、まず着目したことは、学生が将来何を目指して学んでいるのか、それを把握した上で、学生のためになる学習課題や学習方法は何であるかということであった。前任校では、卒業生のほとんどが保育者としての道を選んでいたことから、「保育者としての資質を高める」ためには、どのような課題を、どのような方法により学生に取り組んでもらうのが適切かを考えた。その結果、将来保育者として現場に立ったとき、学生自身が必ず役立つであろうと思えるような課題であれば、学生の学習意欲が高まり、学習課題にも、より主体的に取り組むことができるであろうと予測した。

適切な学習課題・方法（枠組み）を用意することは、教員にとっても重要な役割のひとつであると考えるが、それをいかに意味あるものにしていくかは、教員よりも、学習する学生自身の工夫によるところが大きいといえる。教員の役割はあくまで学生が主体的に工夫できるような枠組みを提供することにあり、その内容については学生に任されることが望ましいと考える。学生の工夫次第では、学生自身の中に芽生えつつある「潜在的資質」がもっとも自然な形で、しかも効果的に表現され、学生もそのような自分の資質に驚く場面が見られるのである。

「A3用紙」という空間

このような考え方に基づいて、保育実習の事前・事後指導の時間に主体的学習に役立つ道具としてある枠組みを取り入れた。枠組みの特徴は、「Ａ３用紙」という空間である。心理学を専攻した自分には、あることが思い浮かんだ。人はひとつの空間が与えられ自由に使ってよいといわれると、その人らしさをその空間に表現してくれることが多い。そのような発想に基づき授業では課題学習のため学生にＡ３用紙を与える事が多かった。ある時、教育学部の学生で、他大学に友人のいる学生が、「友人が先生のことをＡ３の先生」と言っていたと教えてくれたのには、正直驚かされたと同時に、何らかの意味で学生の意識に残っている証拠であると感じた。

さて保育実習指導の授業では、この用紙を１枚、学生に配布し、表側には実習をさせていただく施設について自主的に調べたことを書き記すよう指示した。その際、配慮すべきことは、他の人がその内容を読みたいと思うように工夫することであると伝えた。特に、保育者を目指すものであれば、他の人とは、子どもの親である事が多いため、親が読んでみたいと思うように表現すること、と条件をつけた。一方、裏側には、実習終了後の事後指導時間にて完成させる課題を記述するように指示した。書く内容は、①実習をさせていただいた施設に事前訪問した時の留意事項、②実習において学んだこと、③将来の仕事で活かせると思ったこと、④後輩の学生に伝えたいこと、などとした。その結果、実際にこの課題に取り組んだ学生からは、一定の評価を得ることができた。理由は、事前に自分が実習をさせてもらう施設について調べたことで、実習に向けた心構えができること、さらに将来、保育者になったときに保護者へのお便りなどを作る時などにも役に立つことなどがあげられていた。

また、課題を作成する際には、パソコンではなく手書きで作成するように指示してあるため、Ａ３用紙には一人ひとりの学生の持ち味が自然に表現されており、それを手にする教員にもいろいろな事が伝わってくる。そのため、この課題は学生の指導等においても役に立ち、特に学生とコミュニケーションをとる際にも役立っている。

A3用紙による「施設調べ」の効果

さてこのような枠組みを保育実習で長年活用してくる中で、椙山女学園大学の教育学部で仕事をさせていただく機会を得た。最初に出会った魅力的な科目が、１年生で行われている「ふれあい実習Ｉ」というものであった。これは、大学に附属の幼稚園、小学校、中学校、高等学校があるからこそ活かせる特徴あるカリキュラムともいえると感じた。この科目を担当させていただけるという幸運も得て、早速これまで実践してきた学習方法を活用させてもらうこととした。この結果については、毎年学部紀要に投稿し、その中で枠組みの改善にも努めてきた。

「施設調べ」が役に立った程度について尋ねると、自分の担当する学生 20 名中、14 名が「とても役に立った」、5 名が「ある程度役に立った」、1 名が「どちらともいえない」（この１名も役に立つことは認めた上で、他の学生の課題への取り組みに疑問を持ち、こう回答したという）と回答したということで、全員が役に立ったとしている。

次に、役に立った内容を具体的に見てみると、ある学生は次のように述べている。「事前調べでは、実習するところがどういうところなのか、教育方針はどういうのかということを知って、自分のテーマや観察するポイントを作れるので観察の際、漠然としたものでなく、自分のテーマに沿い、深いところまで見えるので良いと思いました。事後では、事前調べにより、自分のテーマにあったポイントが見られたかや観察の際の反省、また次の観察実習の際、どういうところを比較してポイントをおくかと、次につなげられて、とても良いと思いました。また事後では、皆と討論をすることにより、自分の偏った考えで、このところはこういうふうなのだ、この年の子はこうなのだ、と決めつけずに、こういう子もいるといった広い視野で見ることができて、すごく役立ったと思います。みんなの考えた意見を取り混ぜて、深いところまで追求できるし、意見交換もできてすごく良かった。」これは一人の学生の感想ではあるが、まさに、自分が狙っていたことを言葉にしてくれているのである。

おわりに

このような成果を得る中で、今後も、この学習方法を継続的に活用して保育者の資質を高めると同時に、学生が主体的に取り組めるものとしたいと考えている。現在は、自分自身が担当している科目、すなわち１年次の「ふれあい実習Ｉ」、「社会福祉」、2 年次の「保育実習ＩＢ（施設）」、「社会的養護」、「児童家庭福祉」、「相談援助」、「ケースメソッドＩ」、３年次の「障害児保育」、「特別支援教育Ｉ・Ⅱ」などにも幅広く取り入れて、継続的にこの学習方法を活用している。最終的には、主体的に学ぶことのできるひとつの有効な方法であることを学生が実感し、将来、現場である保育所・幼稚園・小学校等においても活用してくれることを望むのである。

参考文献

柏崎秀子：教職課程における主体的な学びと言語力育成―ポートフォリオによる自己評価の変容―　実践女子大学文学部紀要第 54 集　ｐ35－44　2012 年

服部次郎：保育者・教師養成課程における初年次教育としての施設（学校）見学を充実させる事前学習の実践（２）―学生の主体的に学びの促進を目指した改訂版「施設調べ」の試み―　椙山女学園大学教育学部紀要　Vol.6 p283-307　2013 年

私の授業論―講義を映画のように

看護学部　　鳥居修平

初めに

私の授業は疾病・治療論などであり、看護学の基礎教育である。学生はいきなり病名や専門用語が出てきてそれを暗記し、病気の原因や発生のメカニズムを理解することが多い。目標は現場で臨機応変に判断・行動できる知識と考え方を身につけることである。また国家試験に対応する実力をつけることである。私の講義はパワーポイントを使って行っている。１００名を越す学生に対する座学なので講義の内容と方法に色々工夫をしてきた。また９０分という時間は、学生にとって集中を持続するには長すぎるため、いかに私語や居眠りを防ぐかということにも心を配ってきた。そんなことについて述べる。

心がけていること

講義に関していつも心がけていることは次の言葉である。

むつかしいことを　やさしく
やさしいことを　深く
深いことを　おもしろく　　（井上ひさし）

しかし実践することはなかなかむつかしい。さしあたってやさしく、おもしろくと以下の点に留意している。

１．知的好奇心

講義は「Q and A」のスタイルである。私は学生になぜ？どうして？その応用は？と問うことにしている。常に学生の視点からの適切なクエッションを考えている。

２．動機づけ

講義には動機づけが非常に重要であると考える。その点、看護学科は国家試験があるので、そこに結びつけることでモチベーションは上がる。またそれ以外でも本人や家族の健康と結び付けることで興味を引きつけることができる。そして医師として働いてきたので生きた現場情報を持っている。これをうまく使い学習意欲の維持に利用することができた。

３．視覚情報

印象づけるにはインパクトのあるビジュアルなスライドが一番であると考える。そのためには常にわかりやすく、美しい画像を探してはスキャンし保存している。また話題の転換にも美しい画像を挿入し、頭の切り替えを促している。そのためにはパワーポイントは非常に良い手段と考える。

講義の構成と進行

1.　導入

講義の導入には新聞に載っていた時事問題、今日の講義に関する伏線になるような面白

い話題をとり上げる。たとえば世界糖尿病デーであれば「今日は何の日か知ってますか？」と質問し、世界の肥満税、あるいは名古屋城がブルーにライトアップされた写真をみせます。そして講義のテーマの意義を説明し、講義に関連した国家試験問題を提示し、到達目標を示す。

2.　本題

資料として講義に必要なスライドを１頁に６スライド、両面印刷して３―４枚を用意して当日渡す。資料は前もってＳマップで渡せればよいが、直前まで手を入れているので現在のところ当日渡す。スライドにはキーワードと要点しか書かれておらず、ところどころ空欄を作って書き込むようにしている。したがって資料はあらためてノートを作らないと試験前には役立たないので、復習、ノート作りが大切だと口を酸っぱくして言っている。また講義は学生にとっては初めて聞くことが多いので、その重要度がわからないことが多い。したがって知識、理解についても常に　重要度を３段階に分けて明示するようにしている。すなわち、１．一応聞いておけばよい、２．理解する、３．人に説明できる、としている。講義中は室内を歩きながら対話授業を心がけている。答えやすい質問から復習を確認する質問、その人の理解度を知る質問まで用意する。スライド操作は遠隔操作で行う。最後に講義のまとめをしている。重要なことは繰り返す必要がある。「話したから伝わっている、理解している」と思わないようにしている。

3.　小テストと質問・要望

講義の終りに毎回記述式の小テストを行い、同時に質問と要望を書かせ、出席確認としている。講義中は質問がないか尋ねても、大きな講義室では手を挙げるものがいないが、紙に書かせるといろいろな質問が出てくる。これは学生の理解度を知る上でも参考になり、また講義の仕方、修正にも大変有用である。小テストは記述問題であり、次週に模範解答や不良解答を示し、質問に対する回答もしている。

4.　実物を見せる

少しでも現場の雰囲気を味わってもらうため、実物を見せ触って試してもらっている。創傷被覆材、手術に使用するはさみやメス、人工関節、眼内レンズなど大変興味をもって見ている。

環境作り

先ず私語を防ぐために試みてきたことは２つある。１つは、不本意であるが、座席を指定とする。大学生なので自由にしたいが、そうすると仲間で集まり私語が多くなる。指定とするなら少しでも意義のあるように、普通は名簿順とするところをあえて、ランダムにして、いろいろなひととの出会いをつくるようにしている。したがって１クールで２―３回変える。つぎに行っているのは、講義は室内を歩きながら行う。そしてスライドの進行は遠隔操作で行う。歩きながらであると対話型授業もしやすし、質問もしやすい。一方私語がなくなると眠る学生がでてくる。これの対策には配布の資料のところどころに空欄を設

け、記入させる。

講義スライドの作り方

さてパワーポイントによるスライドの作り方であるが、これにはかなり力を入れ、直前まで手を入れている。どんな画像を用いると効果的か、スライドの順番、アニメーションの順番をどうすると理解しやすいのかを繰り返し検討する。そのため資料は当日配布となってしまう。

１．絵、写真などの画像は非常にインパクトがあり、理解のためにはもちろん、導入、場面の展開、状況の理解に非常に役立つ。しかし利用したいと思う図にはしばしばたくさんの情報が盛り込まれ、そのままでは見る学生にとっては目移りがし、混乱するので消す作業も必要となる。いい絵があればスキャンし保存する。

２．アニメーションも非常に重視している。表を提示し、これを上から読み上げて行っては、学生の頭にスムーズには入っていかないだろう。対話型授業を進めながらアニメーションで展開していくことにより理解しやすくなると思う。１つのスライドには話す内容のキーワードがいくつか書いてある。しかしその提示する順番は、大項目、小項目という順番、原因から結果、結果から原因、メカニズムの流れとさまざまである。

３．１回の講義で使用するスライドは５０－６０枚ぐらいである。多いと思われるかもれないが、１つのスライドのに書かれる文字は最大１０行ぐらいである。さらにコーヒーブレイクのスライドを入れる。

４．講義のスライドは自然に文字スライドが多くなってしまう傾向にある。したがって最後に全体を見渡して適切な画像を挿入して、心の準備ができるように、退屈しないように、気分が引き締まるように、達成感が感じられるように配置する。たとえば関連の画像、医療現場の画像、風景の画像などを配置し、枕　伏線、ヤマ場、意外性をつくり、映画の編集をしているような感じで楽しんでいる。それゆえ私はパワーポイントを利用して「講義は紙芝居のように」、もう少しかっこうよくいえば「講義は映画のように」と考えて楽しみながら、ストーリーをつくるように作製している。しかし色調とか文字のデザインにはあまりのこだわらない。あまりこだわると内容が霞んでしまう。

課題

今後は予習、小テスト、ノートや質問などの評価、反転授業、オープンノートなど検討していきたい

Ⅳ　大学院教育の質の向上に向けて

1　シリーズ「私の授業論」

私の授業論（大学院）

生活科学研究科　食品栄養科学専攻　　加藤昌彦

１・はじめに

大学院における教育とは何か？一言で言えば、学問と研究を極めることである。そのため、大学院での教育は学部教育を基本に、さらに発展した内容を各専門分野の特性に応じて修得できるものでなければならない。すなわち、大学院を修了した学生が社会に出て、それぞれの分野のプロフェッショナルとなることができるような教育内容が大学院教育には組み込まれている必要がある。

このことを私の専門分野である臨床栄養学に当てはめると、大学院を修了した暁には、臨床現場（病院や介護施設など）において、患者あるいは高齢者の栄養ケアを実践するための知識と技能がともに修得できており、同時に、そうした栄養ケア活動の内容を学会発表あるいは論文化することによって広く世に知らしめ、臨床現場、教育現場など臨床栄養に関連する分野において、将来の臨床栄養学を先導するリーダーとしての役割を担うことができるひとりの人間を育てる、ということになる。さて、そのためにはどうすればよいのか、これは私にとっては相当に大きなテーマである。

２・大学院生は自分で考え、自分で計画、自分で実行

大学院教育が学部教育と最も大きく異なるところは、学習行動の主体が“学生自身”にある、いわば能動的教育が中心となっていることである。このように書くと、学部教育においても学習行動の主体は学生自身だとお叱りを受けそうであるが、あくまでも比率の問題である。学部生は、教員から一方的に知識を受け取る受動的教育の割合が相対的に大きくなり、学生自身が自ら考えて学習する範囲が限定される場合も少なくない。一方、大学院生ともなれば、ほとんどの学習行動は学生自身が考え、自ら計画し実行する。教員は、学習行動の方向性を誤らないように学生に必要不可欠な助言を最小限与えることになる。

２－①・講義における学生主体の教育とは

講義テーマは、その日その日のシラバスに則り、私の方から一方的に教授する内容が少なくない。最近までに我が国の臨床栄養を取り巻く環境は急激に変化してきたし、臨床栄養は現在も大きく、しかも急速に変化しつつある現在進行形である。すなわち、つい 60 年ほど前、戦後まもない時期の栄養学は栄養失調からの脱却が最大の目的であったが、その 30 年後には、今度はメタボリック症候群といった、むしろ過剰栄養の予防が栄養学の最大のテーマとなり、そして今日では高齢者や病人に少なからぬ栄養失調者が見られる一方、社会で活躍中の自称“健常壮年者”の多くが、不適切な栄養摂取による疾患を抱えようとしている。大学院生でも、ここまで急激な臨床栄養の変化についていくことは容易ではない。こうした現状は十分に教授しておく必要がある。そのうえで、個々の学生に疾病と栄

養の観点からテーマを与え、それぞれのテーマにおける臨床栄養学上の課題を学生自らが、調べ見つけ出し考察させる。さらに、プレゼンテーション能力育成のために、自らが調べあげた内容については、必ず授業のなかで発表させるようにしている。

２－②・特別研究における学生主体の教育とは

大学院生には修士論文あるいは博士論文を書くことが求められる。実際、この場面に遭遇して、学生は学習行動の主体が自分自身であることを、より一層自覚することになる。学生は、「自ら研究テーマを探し出し、テーマに従って自分で調査・研究し、そこから導き出された結果について考察し、さらに文章化して公表」しなければならない。私のところでは、博士過程の学生は博士号授与の内規上、研究成果の学会誌上での公表は必須であるが、修士過程の学生においても研究成果は原則として関連学会誌に公表するよう指導している。これは、自らの研究成果が決して少数の身内の独りよがりに終わらず、公正な立場で社会に評価してもらう絶好の機会にほかならないからである。そうすることで学生は、これから向かい合う現実社会における学問の厳しさに僅かではあるが接することができる。

さて、研究テーマを決めるために、まずは可能な限り多くの関連論文を読むように指導する。同時に、普段の生活で何気なく目の前にある、いわゆる「当たり前」とされていることを当たり前として受け入れるのではなく、常に疑いと問題意識を持って取り組む姿勢が必要であることを繰り返し指導している。

私の研究室の特徴として、研究は、基本的に病院や介護施設といった臨床現場において進めるようにしている。これは、学生が社会に出る前の社会経験、あるいは人生経験として、その後の人生に大きく影響する。臨床現場には、大学内では出会うことのない医師、看護師、薬剤師、放射線技師あるいは介護職者など多くの職種との出会いが待っている。生きた勉強とは、人を知ることである。ことに他職種は、学生といえども管理栄養士として自らの考えを明確に示すことができなければ動いてはくれない。自分の研究は何のために、どのように進めるのか、それが患者さんや高齢者にとってどんなメリットをもたらすのか、これらすべてを明確に示さなければ研究協力を得ることは難しい。まさに我が子を谷につき落とす母獅子の思いで、学生を臨床現場に送り出しているが、この試練こそ豊かな人間力形成に役立つと信じている。人間力を養うことは、将来、臨床栄養のプロフェッショナルになるための必要条件である。

３・おわりに

先述のごとく、臨床栄養学を取り巻く環境は激動している。大学院は、学問と研究を極めるところである。しかも、学問と研究は、大学院を終了すれば終わりを告げるわけではない。むしろ、やっとスタート地点に立つのである。社会に出れば、研究のみならず生活全てを自分で考え、自分で計画し、自分で実行しなければならない。責任を負うのも全て自分自身である。これは、私が大学院の授業を通じ繰り返し伝えていることである。

私の授業論――大学院で臨床心理士の養成に携わって――

人間関係学研究科　　李　敏子

私が授業を担当している大学院の臨床心理学領域は、臨床心理士養成のための第 1 種指定校であり、カリキュラムも臨床心理士を養成するために組まれている。学生には、講義だけでなく、精神科クリニック・病院を含む 2 カ所の学外実習と、付設の臨床心理相談室でカウンセリングやプレイセラピーを担当する学内実習が必須となっている。また、週 1 回のケースカンファレンスには大学院生全員が参加し、毎回 1～2 名が事例を報告して検討を行い、教員を含めて多くの人からアドバイスを受けられる体制をとっている。大学院生が事例を担当するさいには、教員のスーパーヴィジョンを受けることが必要であるため、個別のスーパーヴィジョンも授業科目として教員が担当している。また、教員も臨床心理相談室でいくつものケースを担当している。

このような実践家の養成を念頭において、私は心理療法特講 I・II の講義を行っている。この講義では、心理療法を行う際の基本的な態度の重要性をおさえた上で、発達障害児や不登校児などさまざまな事例への実際的援助について学ぶことを目的としている。心理療法の独自性として、援助者との信頼関係を基本にしてプロセスが進行することがあげられる。すなわち、関係性が築かれなければ援助過程じたいが進んでいかないのであり、その関係性を築く上で専門的知識だけでなく援助者の人間性が重要になる。このことは他の援助職にも言えることであろうが、援助者には専門性と人間性の両方が必要とされるのである。また、治療効果に関する多くの実証研究から明らかになっていることは、援助者の学派は治療効果にあまり関係がなく、もっとも重要なのは援助者の共感的理解やクライエントと情緒的絆を築く能力などの「態度」であるということである。この態度には、人としての倫理観、経験に基づく理解・判断力などが大きく関係している。

従って、どんなに高度な専門知識や技法を身につけたとしても、人間性に基づく基本的な態度が間違っていれば、援助の効果は期待できないことになる。例としてスクールカウンセラーについて考えてみよう。学校でスクールカウンセラーとして勤めるとき、知識だけもっている人よりも、たとえ知識や経験は未熟であっても、生徒から親しみやすく話しやすい印象をもたれる人の方が役に立てるだろう。その上で、話されたことに対して聴くだけでなく的確なアドバイスができるために専門的知識と経験が大切になる。このように、専門的知識は臨床心理士としての基本的態度があって初めて効果を発揮するものである。生徒が寄りつかない相談室では、援助そのものが始まらない。

また、生徒一人一人に個性があり家庭状況がある。学校の状況や教師の特徴も学校によって異なる。そのような現場で、臨機応変に生徒との面接だけでなく、保護者との面接や教師との連携も行わねばならない。このときに全体状況を見て動くことが重要であり、そのつどの的確な判断が求められる。また、他職種の人と連携するためには、コミュニケーション能力と社会性も必要である。基本的知識を習得することはもちろん重要であるが、

理論をただ暗記するだけでは、応用がきかず柔軟な対応を妨げることになりがちである。学校などでは臨床心理士は一人しかいないことが多く、自分一人で判断しなければならないことが多い。心理的援助の原理原則を知っていることは必要であるが、個別の状況でそれをそのまま適用するかどうかは、全体状況を見て瞬時に判断するしかない。そのさい、病理やアセスメントに関する知識は必要であるが、人としての人生経験や常識で判断する部分も多い。

このような観点から、私が授業で心がけていることは、自分の頭（心）で「主体的に考える」姿勢を身につけることである。そのため、先に答えを与えるのではなく、事例報告などを読んで、学生にその場で考えてもらい、意見を発表して議論するという形態をとっている。これが学生にはけっこう緊張を強いられることのようであり、「心臓がドキドキして、ピアノの発表会よりも緊張した」という感想を書いた学生がいた。

修了生に会って話すと、「学生のときには、先生の言っていることがよくわからなかったが、臨床心理士の資格をとり現場に出てみて、先生の言っていたことの意味がよくわかった。現場で考えるときに、授業で教わったことがとても役に立った」と言われることがあった。現場に出た時に役立つ内容を教えるのでなければ、臨床心理士養成の教育・指導として適切ではないだろう。そしてその内容とは、知識の詰め込みではなく、援助者としての態度や姿勢に関することである。すなわち、クライエントを個人として尊重する姿勢をもつこと、最初のアセスメントによる見立ては仮説であり、その後の関係の深まりとともに得られる新たな情報を加味して見立てを柔軟に吟味・修正すること、クライエントの内面だけでなく日常生活など全体状況を見る広い視点を養うことである。クライエントのだれもが日常生活の中で苦痛を感じているのであるから、プレイルームや面接室の中で表現されたことだけで判断するという陥穽にはまってはいけないのである。

修了生が現場に出ると、初心者であっても容赦なくいろんなケースに出会い対応に悩むことになる。そのため、修了後も引き続きスーパーヴィジョンを依頼されれば、できる限り引き受けることにしている。修了生とはこのように長く関わることが多く、同じ臨床心理士であり、学会や研修会で会う同業の仲間でもある。修了生は本学の学生相談室や臨床心理相談室の相談員としても活躍してくれている。

また、臨床心理士として、実践だけでなく研究も重要である。そのため修了生を臨床家として育てるだけでなく、研究者としても指導してきた。本学の臨床心理学領域には修士課程しかないため、修了後も修論指導の延長で個別に研究論文の指導を行ってきた。その結果、修了生の何名かが学会誌に投稿論文を掲載することができた。

大学院の授業は専門家としての基礎を築く第一歩としてもちろん大切であるが、同じ専門家として長い目で育てることも重要ではないかと思う。このような視点をもちながら、広い視野をもって主体的に判断できる臨床家を育てられるように、これからも講義をしていきたいと思う。

Ⅴ　「授業についてのアンケート調査」

Ⅴ．「授業アンケート調査」

平成25年度前期「授業アンケート調査」の実施について

全学FD委員長　　北岡　　崇

１．平成25年度前期授業アンケート実施状況

平成 24(2012)年度は「授業アンケート調査」は行なわなかったが、平成 25（2013）年度に全学的な「授業アンケート調査」を再開した。この調査は前期授業を対象に、各専任教員 2 科目、各非常勤教員 1 科目を原則に、実施したものである。平成 23（2011）年度までの「授業アンケート調査」とは異なり、今回は講義、演習、語学、実験・実習の科目区分にかかわりなくアンケートの調査項目を一元化しての実施であった。

実施対象予定科目数は全学部を通して 779 科目、その 91.3%にあたる 711 科目についてアンケート調査がなされた。91.3%の実施率（マークシート返却率）は、平成 22 年度前期の 90.8%と平成 23 年度前期の 91.5%の間の数値であった。学部別に見れば、看護学部の特に専任教員担当科目の実施率が 75.0%でありその低さが目立つ。この理由については表 1 への注記（※）を参照されたい。（表１）

●本実施期間：平成 25 年 6 月 24 日（月）～6 月 29 日（土）
●予 備 期 間：平成 25 年 6 月 17 日（月）～6 月 22 日（土）
　　平成 25 年 7 月　1 日（月）～7 月　6 日（土）

●表１－平成 25 年度前期授業アンケートの学部別実施率

学　　部		専任教員	非常勤	合　　計
生活科学部	実施予定科目数	91	85	176
	実施科目数	83	74	157
	実施率	91.2%	87.1%	89.2%
国際ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学部	実施予定科目数	53	82	135
	実施科目数	48	76	124
	実施率	90.6%	92.7%	91.9%
人間関係学部	実施予定科目数	64	18	82
	実施科目数	56	17	73
	実施率	87.5%	94.4%	89.0%

文化情報学部	実施予定科目数	69	56	125
	実施科目数	68	55	123
	実施率	98.6%	98.2%	98.4%
現代ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ学部	実施予定科目数	68	29	97
	実施科目数	63	25	88
	実施率	92.6%	86.2%	90.7%
教育学部	実施予定科目数	61	43	104
	実施科目数	57	43	100
	実施率	93.4%	100.0%	96.2%
看護学部	実施予定科目数	56	4	60
	実施科目数	42	4	46
	実施率	75.0%	100.0%	76.7%
合　　計	実施予定科目数	462	317	**779**
	実施科目数	417	294	**711**
	実施率	90.3%	92.7%	**91.3%**

※平成２３年度前期授業アンケートの実施率は全学部を通して 91.5　%であった。

※看護学部は、当初 7.5 回で終了する科目 3 科目が実施予定科目 60 科目に入っていたが、これら 3 科目はアンケート調査を実施できなかった。また、「ファーストイヤーゼミ」や「原書講読」など受講者数が 4 名の授業で、担当者が個別に集計を行った 5 科目の場合は実施科目数にカウントしていない。これら二点のため実施率が低くなっている。

2 .「授業についてのアンケート調査」結果を踏まえた授業評価（リフレクション・ペーパー）について

平成 25 年度「リフレクション・ペーパー」提出率とは、同年度のアンケート実施科目数中の「リフレクション・ペーパー」提出科目数の割合を示す数値のことである。この数値がもっとも低かった文化情報学部においても 77.2%という数値に達しており、最も高かった看護学部の場合は 93.5%であった。全学部を通しての提出率は 83.3%という高い数値を示している。今回の提出率の高さは、「リフレクション・ペーパー」の提出を強く求める提出再依頼の成果である。すなわち、再依頼への回答分が今までになく多かったからである。

しかし、提出再依頼へのこうした反応は、本学の教員の間に「リフレクション・ペーパー」提出をFD活動の一環として捉える認識が浸透してきている証拠と捉えることができるだろう。「リフレクション・ペーパー」提出率に限った話ではなく、今後も全学FD活動を介し、リフレクションの重要性への認識、すなわち単にアンケート結果を見るだけでなく各教員がその結果をどのように受け止めその結果に対しどのように対応していくかを考えることの重要性への認識をさらに深く教員間に浸透させていく必要がある。（表１）

今年度も、「リフレクション・ペーパー」と同時に、授業アンケート実施に関する教員からの意見書を提出していただいた。提出された意見書の枚数は 127 枚であった。意見書の提出を再依頼した平成22年度の128枚には及ばなかったが、今回のアンケートに関するさまざま意見、多くの有益な意見が寄せられている。今後の全学FD活動の参考としなければならない。（表２）

●表１－「リフレクション・ペーパー」の学部別提出率（平成２５年１０月１５日現在）

学部	対象科目数	アンケート実施科目数	ﾘﾌﾚｸｼｮﾝ･ﾍﾟｰﾊﾟｰ提出科目数	ﾘﾌﾚｸｼｮﾝ･ﾍﾟｰﾊﾟｰ提出率
生活科学部	１７６	１５７	１４２	90.4　%
国際ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学部	１３５	１２４	１０１	81.5　%
人間関係学部	８２	７３	６０	82.2　%
文化情報学部	１２５	１２３	９５	77.2　%
現代ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ学部	９７	８８	７１	80.7　%
教育学部	１０４	１００	８０	80.0　%
看護学部	６０	４６	４３（５）	93.5　%
全学部	７７９	**７１１**	**５９２**	**83.3　%**

※（　）内の数字は、担当者が個別にアンケート集計したうえで「リフレクション・ペーパー」を提出した科目数。ただし、この５科目はアンケート実施科目数にはカウントしていない。

※ウエストゲイトから派遣される非常勤講師が担当する英語の科目の場合、「授業アンケート調査」は実施するが、集計結果の配付時期以前に授業が終了し契約終了となるため、「リフレクション・ペーパー」は提出されない。この種の科目は、文化情報学部に２０科目、教育学部に１２科目、看護学部に２科目ある。文化情報学部（教育学部も）の提出率が他学部に比べ若干低めの数値を示しているのは、主としてこの種の英語の科目数が多いためである。

ウエストゲイト派遣講師が担当する英語の科目を除いた、「リフレクション・ペーパー」提出率は、全学部を通して87.4 %であった。

●表２－「授業についてのアンケート調査」実施に関する意見書提出状況について

提出枚数（複数枚提出の場合あり）

年　度	総提出枚数
Ｈ２５前期	**１２７枚**
Ｈ２３前期	１２０枚
Ｈ２２前期	１２８枚
Ｈ２１後期	８２枚
Ｈ２０前期	８７枚

※再提出依頼に対する回答分を含む。

平成25年度前期「授業アンケート調査」の分析結果

本アンケート調査は、生活科学部、国際コミュニケーション学部、人間関係学部、文化情報学部、現代マネジメント学部、教育学部、看護学部の 7 学部の 4 年次生までを対象にしたものである。

１．学生の満足度の分析

１．１．授業に対する学生の総合満足度と回答者数の関係

図１－１－１　全学部

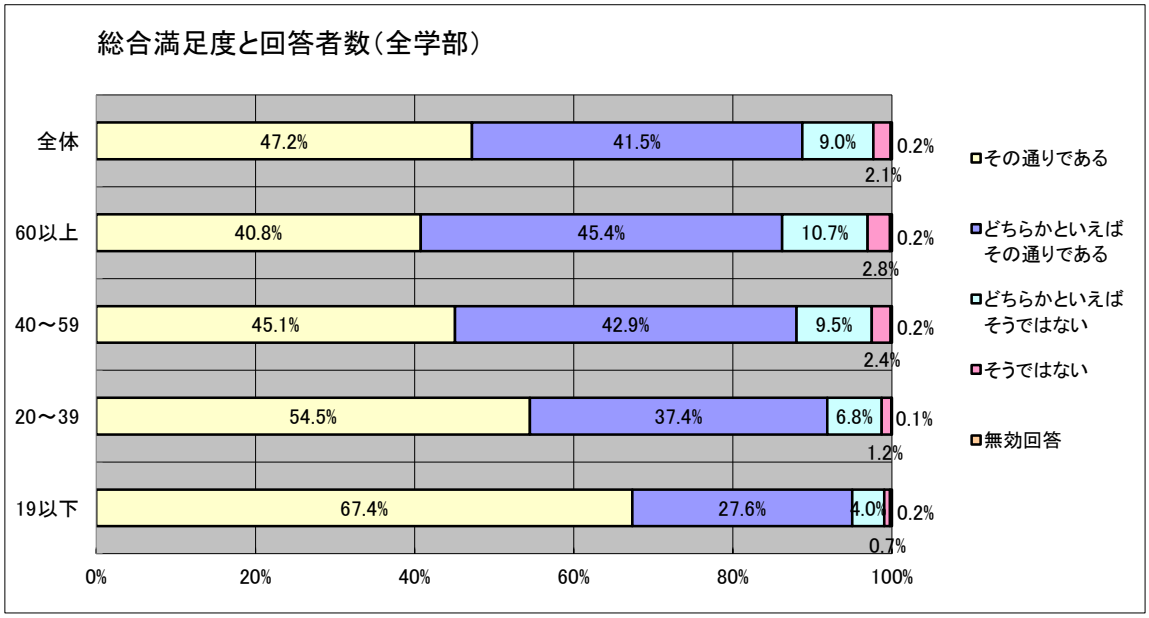


図１－１－１は、平成 25 年度前期実施の授業アンケートにおける総合満足度を全学部を通して集計した結果を、全学的に、また回答者数の階層別にまとめたものである。本図は「総合的にみて、この授業に満足であった」という質問項目に対する回答と、授業クラスの回答者数（概ね授業クラスサイズに相当する）とをクロス集計で分析したものである。全体としては、「その通りである」47.2%、「どちらかといえばその通りである」41.5%を合わせると 88.7%の学生が「満足」と答えており、本学全体の学生満足度は、高い水準を維持していると言える。この数年間、学生満足度は、平成 23 年度 85.5%、平成 22 年度 85.1%、平成 21 年度 87.7%、平成 20 年度 83.0%であり、これらの数値と比べると、本年度の満足度はこの数年間で最高の値であった。クラスサイズ別の満足度では、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」を合わせた「満足」の割合はクラスサイズが大きくなるにつれて低下する傾向にあるものの、回答者数 60 以上のクラスにおいても 86.2%の満足度

を示しており、本学においてはクラスサイズに関わらず質の良い授業が展開されていると判断できる。回答者数 60 以上のクラスでの授業に対する満足度が、平成 23 年度は 81.5%、平成 22 年度は 81.1%、平成 21 年度は 86.0%、平成 20 年度は 77.8%であったことを考えると、このクラスサイズにおいても本年度の満足度はこの数年間で最高の値であった。全体の傾向としては、クラスサイズの大きい授業においても、担当教員が授業改善に健闘している状況を読み取ることができる。

以下の図１－１－２から図１－１－８は、学部別に全体の満足度と回答者数の階層別満足度を示したものである。各学部の教育内容や授業形態の特色ゆえであろうか、学部ごとに、様々な特徴を見ることができる。各学部ともいずれの階層のクラスサイズにおいても、83%以上の満足度を確保しており、本学教員の授業改善努力の成果の一端をここにみることができる。今後は、特に大クラスの場合、授業に対する学生の反応をより具体的に掴むために受講者数とアンケート回答者数の差（概ね授業欠席者数に相当する）などにも注目し、授業改善努力の検証を進めてゆく必要があるだろう。

図１－１－２　生活科学部

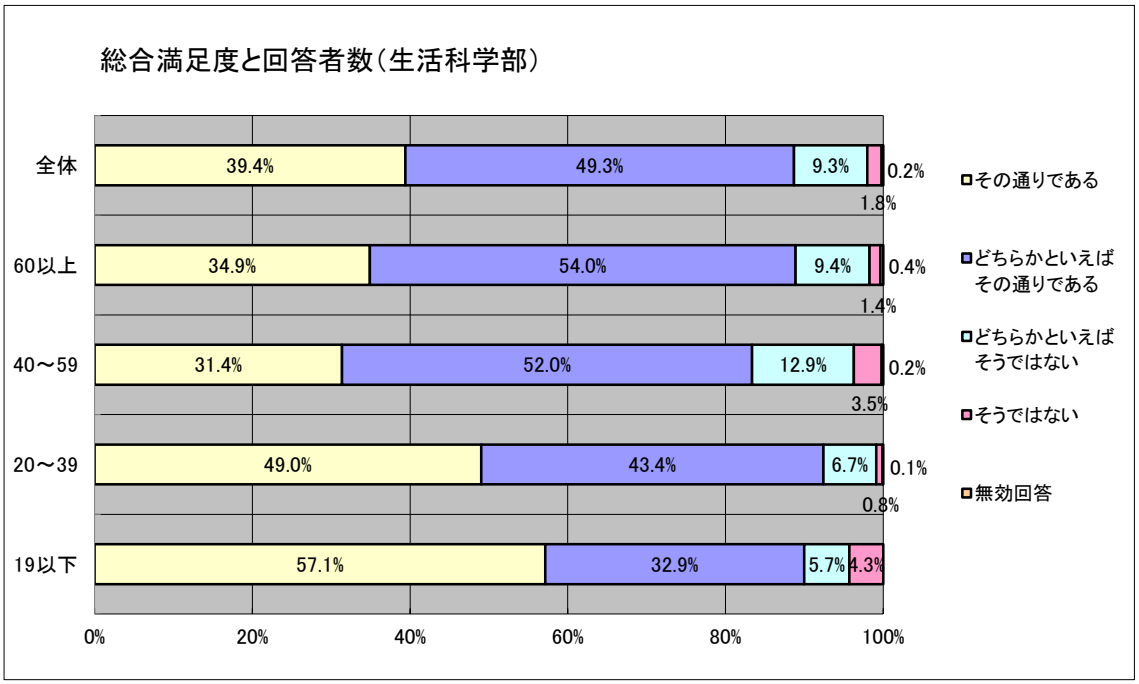


図１－１－３　国際コミュニケーション学部

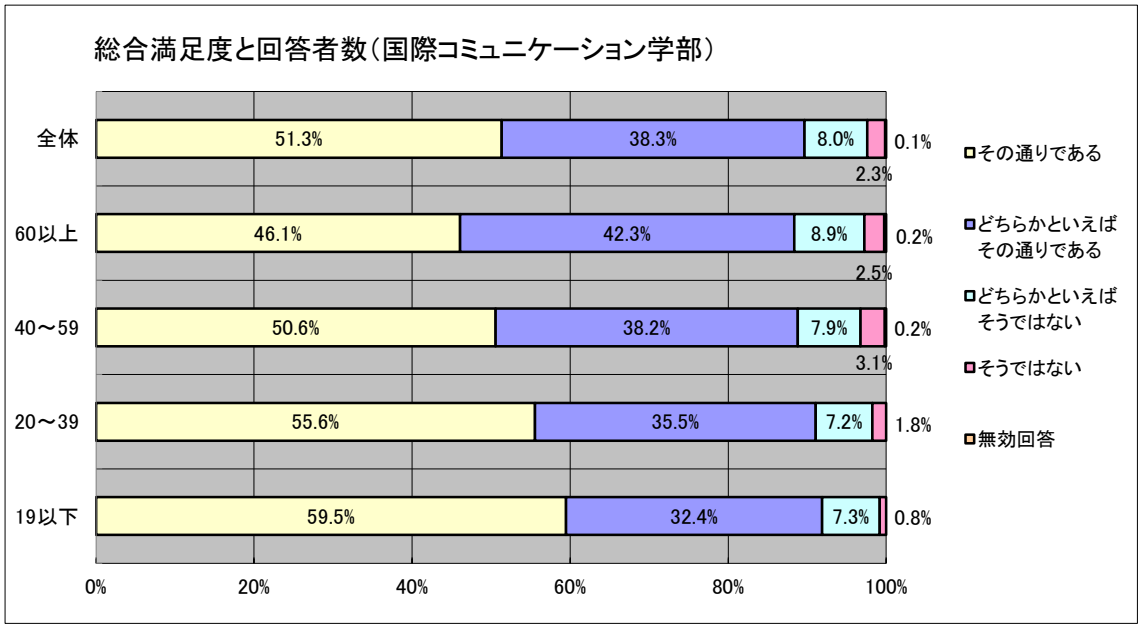


図１－１－４　人間関係学部

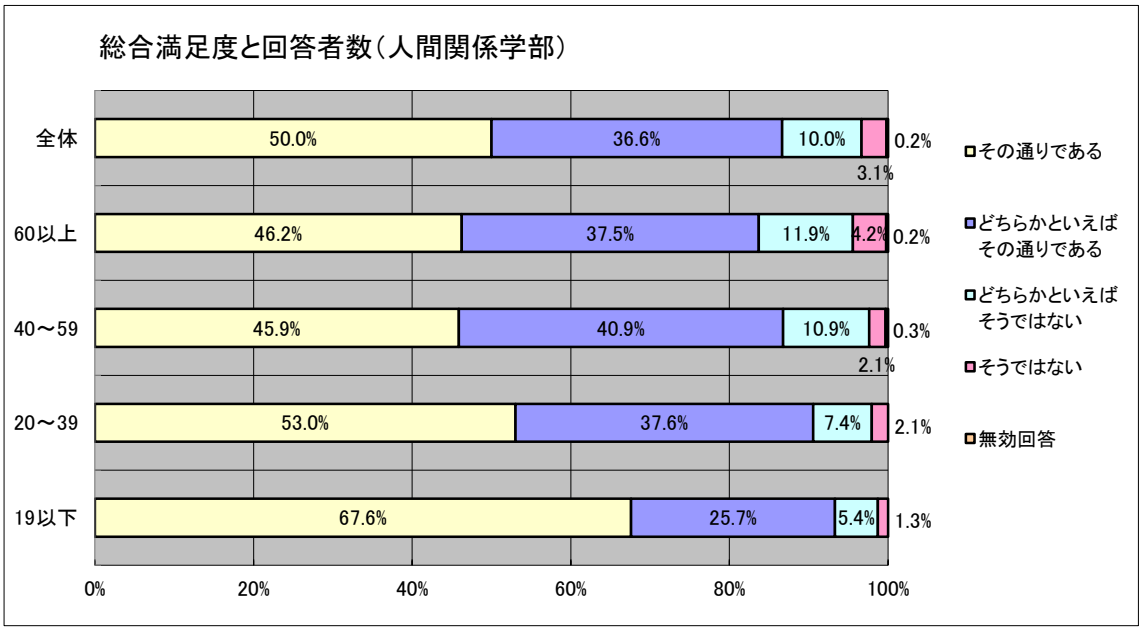


図１－１－５　文化情報学部

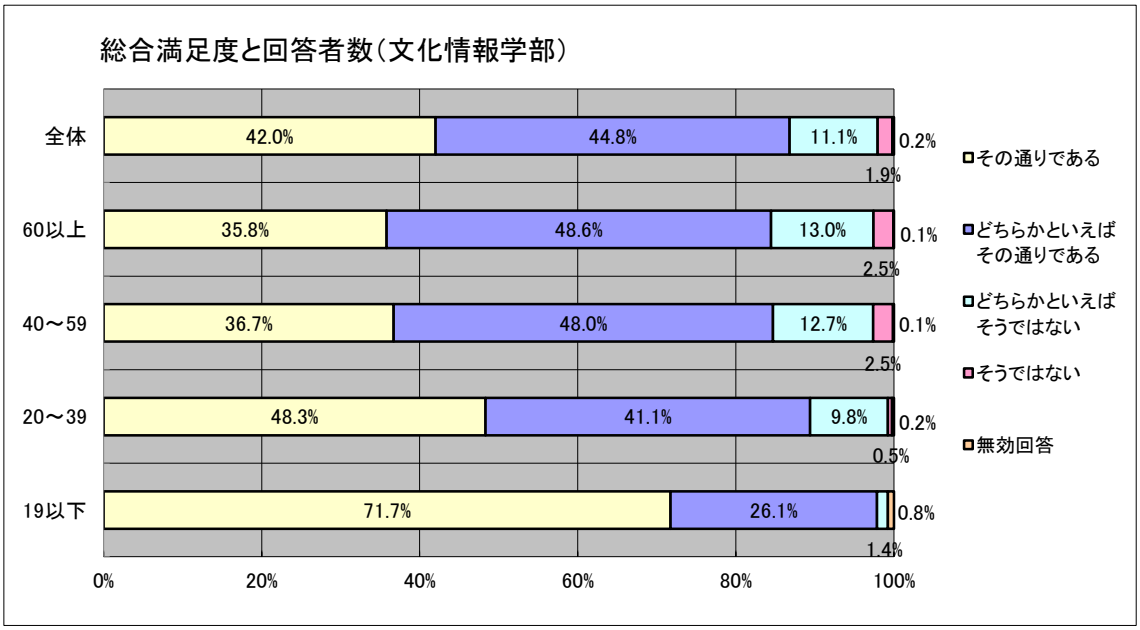


図１－１－６　現代マネジメント学部

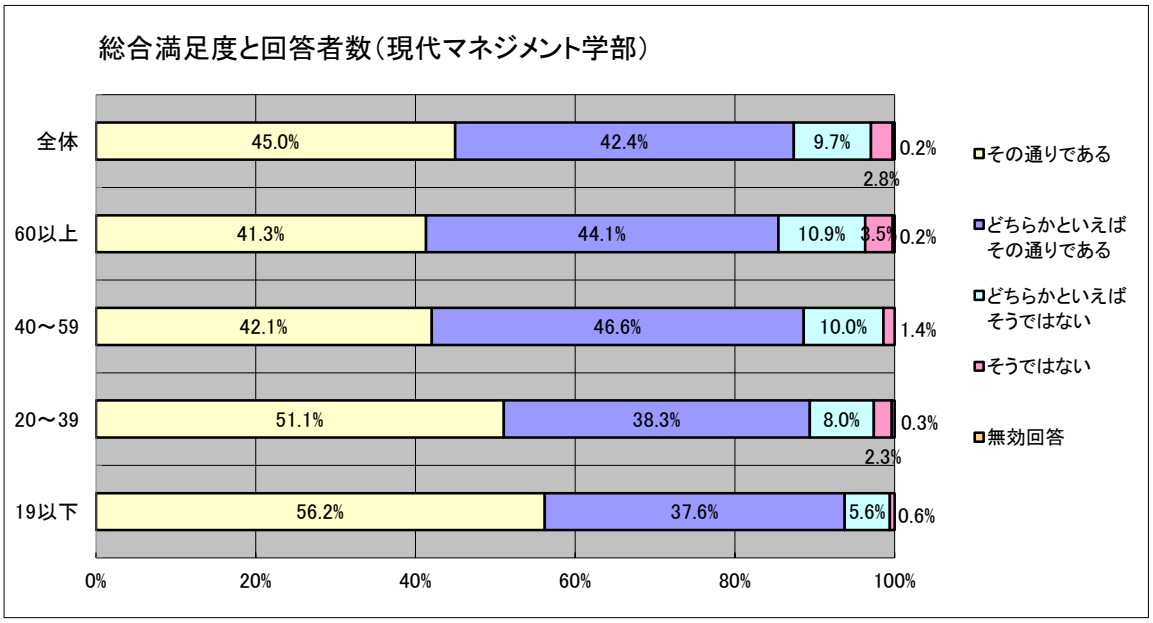


図１－１－７　教育学部

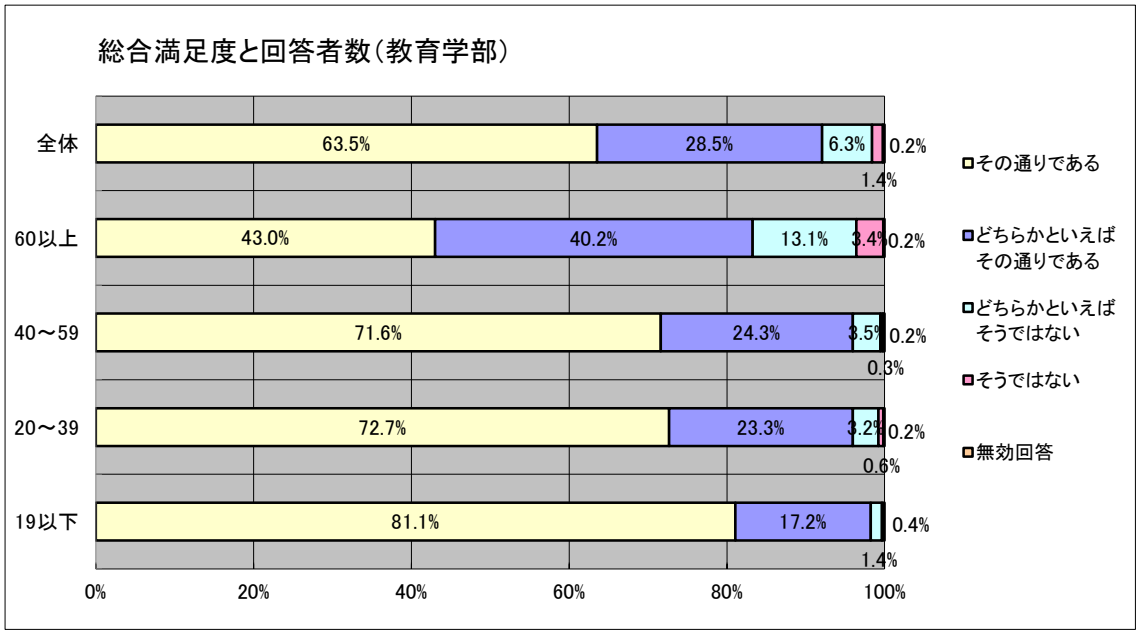
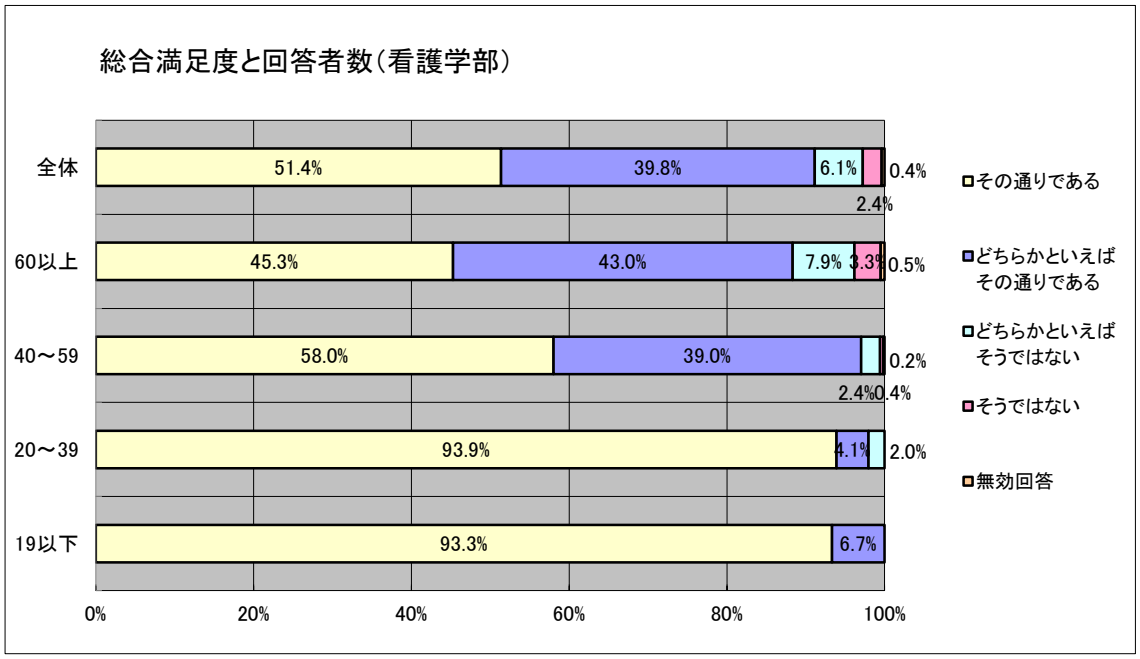
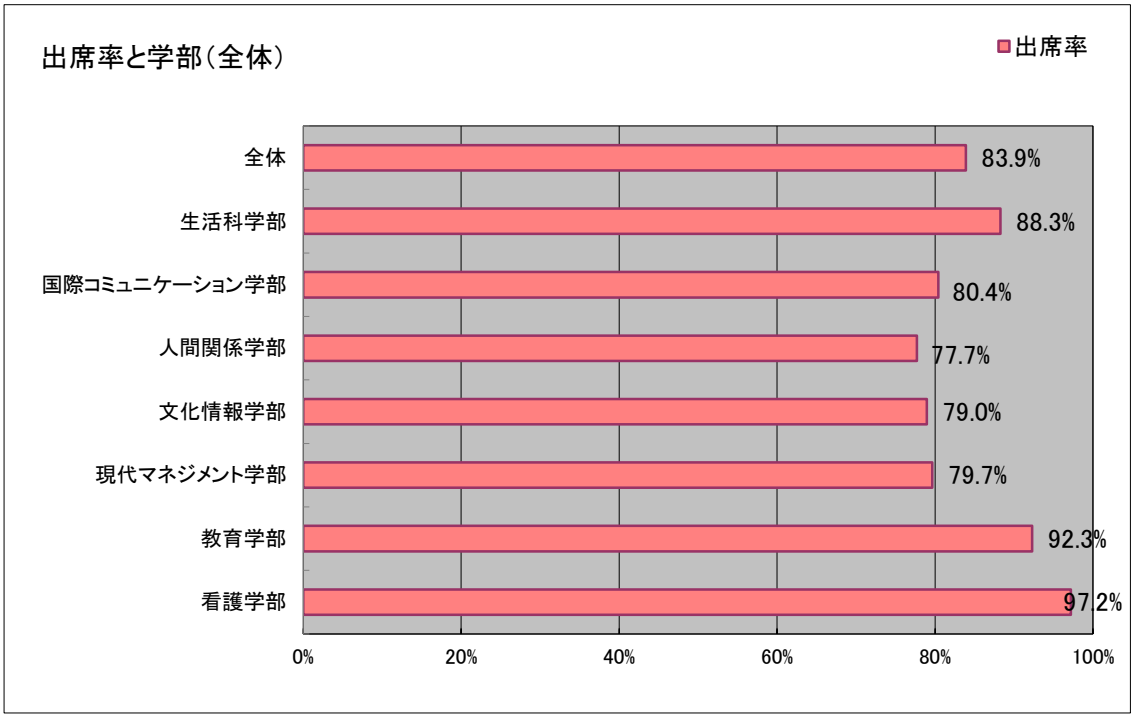


図１－１－８　看護学部



１．２．学生の出席率

図１－２－１　大学全体ならびに各学部の学生の出席率



本学では、平成 23 年度までは年毎の「授業アンケート調査」の際に、講義、演習、語学、実験・実習という授業形態別の出席率を全学的にまた各学部に即して調査してきたが、平成 25 年度はすべての形態の授業について同一の項目に基づくアンケート調査を実施することにした。（授業形態別アンケート調査を必要と考える学部は、学部の自主的判断のもとにそれを実施することにした。）

大学全体でみると、出席率は 83.9%、学部別に見ると生活科学部 88.3%、国際コミュニケーション学部 80.4%、人間関係学部 77.7%、文化情報学部 79.0%、現代マネジメント学部 79.7%、教育学部 92.3%、看護学部 97.2%であった。7 学部中、大学全体の出席率 83.9%を越える出席率を示した学部は生活科学部、教育学部、看護学部の 3 学部で、これらの学部はいずれもその主たる教育目標を資格取得に置く学部である。その他の 4 学部もそれぞれその教育課程を通して何らかの資格を取得できるカリキュラム構成になってはいるが、これら４学部はいずれも、資格取得をその主たる教育目標としていない。こうした性格の相違が、出席率の相違として現れているのであろう。

学生の授業出席回数の管理は今後ますます厳格になっていくであろうが、この動向と並行して各学部とも、また全学的にも、受講者の出席率は上昇していくにちがいない。クラスサイズの大小に関わりなく履修者の大多数が出席する授業において、受講者の満足度の高い授業を行なうよう各教員は授業改善努力をさらに重ねてゆく必要があるだろう。

１．３.大学全体ならびに各学部の学生の総合満足度と各「アンケート設問」項目の相関関係

図１－３－１　学生の総合満足度と各「アンケート設問」項目の相関性

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9
生活科学部	**0.75**	0.63	0.64	0.70	0.62	0.59	**0.53**	**0.49**	0.58
国際コミュニケーション学部	**0.75**	0.70	0.68	**0.75**	0.67	0.65	**0.54**	**0.53**	0.60
人間関係学部	**0.78**	0.67	0.71	**0.76**	0.67	0.62	**0.53**	**0.47**	0.64
文化情報学部	**0.76**	0.69	0.67	**0.75**	0.67	0.67	**0.54**	**0.51**	0.61
現代マネジメント学部	**0.79**	0.72	0.70	**0.76**	0.70	0.67	0.63	**0.57**	0.63
教育学部	**0.78**	0.72	0.68	**0.76**	0.68	0.68	0.58	**0.50**	0.68
看護学部	**0.79**	0.68	0.68	**0.78**	0.72	0.73	**0.57**	0.58	0.65
大学全体	**0.77**	0.68	0.68	**0.75**	0.67	0.65	**0.56**	**0.52**	0.62

※総合満足度との相関性が特に高い0.75以上の数値は赤字ボールド体で、総合満足度との相関性が比較的低い0.57以下の数値は青字ボールド体で記す。

図１－３－１より明らかなように、授業に対する大学全体ならびに各学部の学生の総合満足度（設問項目10）と各々の「アンケート設問」項目の相関を見ると、高い相関を示すのは「この授業は理解しやすかった」（設問項目１）と「教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた」（設問項目４）であった。特に「この授業は理解しやすかった」の設問項目はすべての学部において、従って大学全体としても学生の総合満足度と最も高い相関（0.75～0.79）を示しており、総体的な傾向として、＜難解＞な授業を学生は歓迎してはいないことがわかる。学生の心に届かない授業は歓迎されないということである。他方、「教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた」（設問項目４）が「理解のしやすさ」に次ぐとはいえほとんど同じ高さの相関（0.70～0.78）を示しているのは、学生が教員の工夫の努力をふさわしく評価しているということであり、満足度のより高い授業を行いたいと思う教員にとって特に貴重な調査結果である。また、学生に高度な内容の授業を提供したいと考える教員にとっても、貴重な調査結果であると言えよう。

「授業の進度の適切さ」や「授業を受けてものの見方や考え方の広がり」を問う項目（設問項目２、３）も総合満足度との比較的高い相関を示しており、総合満足度を高めるうえでどのような工夫が効果的であるかを考えるヒントを、ここに見出すことができるかもしれな

い。いずれにせよ、教員が創意工夫を凝らし授業改善しようとする姿勢・態度が、授業に対する学生の総合満足度の上昇につながっている状況を読み取ることが大切である。

総合満足度との相関が9項目の中で比較的低かったのが、「授業の開始時刻や終了時刻の適切さ」を問う項目（設問項目８）と「私語など、不真面目な学生に対する教員の対応の適切さ」を問う項目（設問項目７）であった。これらの項目は授業の良さにとっての必要条件であるにとどまるのだから、このj調査結果は十分に納得できる。ちなみに、大学全体としては、総合満足度の相関性が9項目中最も低かったのは「授業の開始時刻や終了時刻の適切さ」の項目であり、相関値は0.52であった。

各学部ごとに若干、相関性の度合いに差があるが、これらの原因は、学部の特性であるのか、アンケート調査の対象となった科目の特性なのか等々について、各学部でさらに分析を進めていただきたい。

１.４ ．学生の出席率と総合満足度

大学全体を通して、学生の出席率と授業に対する総合満足度の関係をみてみよう。出席率の４つのゾーンを比較すれば明らかなように、出席率の高いゾーンの授業の方が、高い満足度を示す「その通りである」の回答率が高いとは限らない。出席率40％以上60％未満の授業の方が、出席率60%以上80％未満の授業よりも、「その通りである」の回答率も「どちらかといえばその通りである」の回答率もともに若干高めの数値を示している。（図１－４－１）

出席率の高さと満足度の高さとのこうした関係は、学部別（図1－４－２から図１－４－８）にみると、いっそう明らかに見て取ることができる。例えば、高い満足度を示す「その通りである」の比率と「どちらかといえばその通りである」の比率の合計が最も高いゾーンは、生活科学部、国際コミュニケーション学部、人間関係学部、現代マネジメント学部の4学部では40％以上60％未満のゾーン、文化情報学部では40％未満のゾーン、看護学部では60％以上80％未満のゾーンといった具合である。これら4学部のうち生活科学部、人間関係学部、現代マネジメント学部の3学部では、出席率40％以上60％未満のゾーンの授業における「その通りである」の回答率が、出席率のより高い授業における「その通りである」の回答率よりも高いという結果が出ており、国際コミュニケーション学部の場合も40％未満のゾーンの授業における「その通りである」の回答率が最も高いという結果が出ている。こうした現象は、一部分は、授業への出席管理が厳格でない授業の場合、強い関心と興味をもった学生のみが継続して出席することになるという傾向から説明できるであろう。

出席率80％以上というゾーンの科目が他のゾーンの科目に比して「その通りである」の回答率が高かったのは、文化情報学部と教育学部の2学部のみであった。しかし、これら２学部を含め、出席率の高さと授業への満足度とがきれいに相関している学部は皆無であった。履修者の出席率と総合満足度の相関性を調べるには、今回のアンケート調査実施科目

数は少なすぎたのかもしれない。各学部においては、今回の調査実施科目の特性、学部の特性などを勘案して、アンケート調査結果を学部教育の改善につなげるべくさらに分析を進めていただきたい。

図１－４－１　全学部

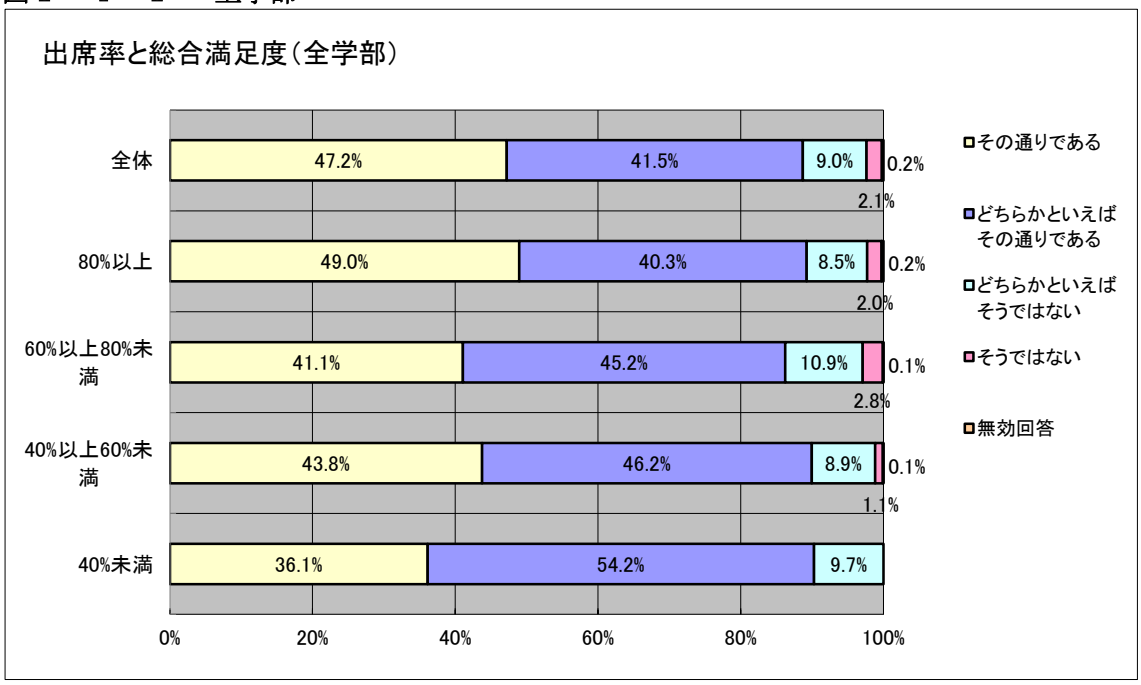


図１－４－２　生活科学部

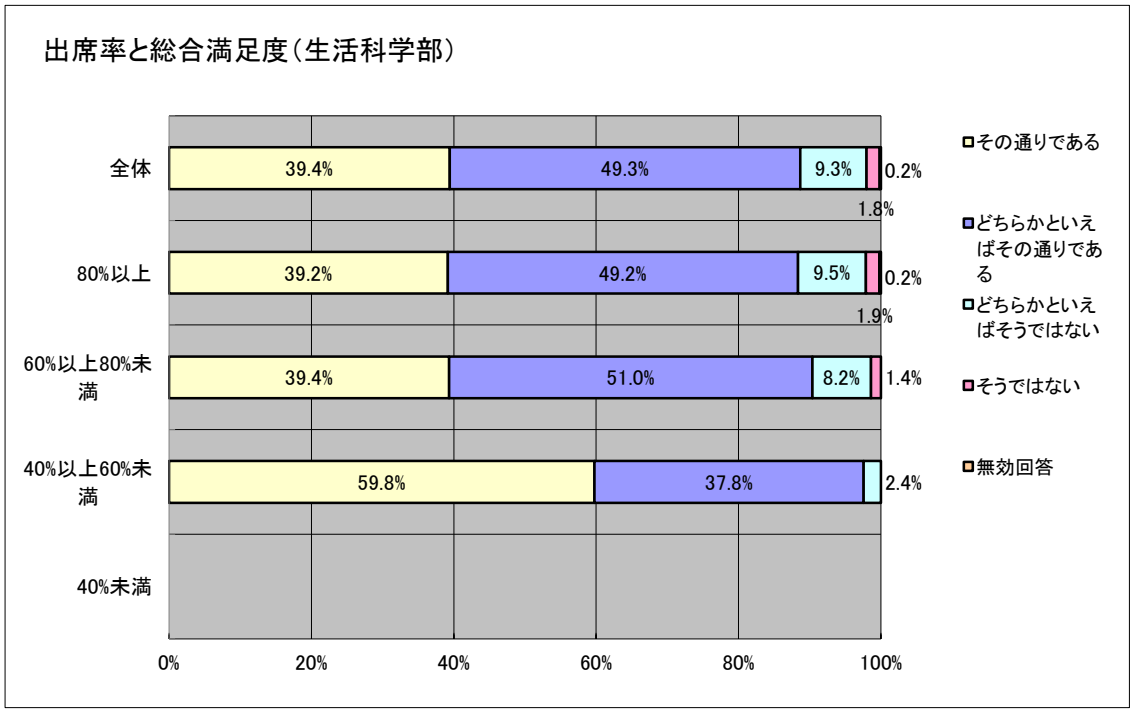


図１－４－３　国際コミュニケーション学部

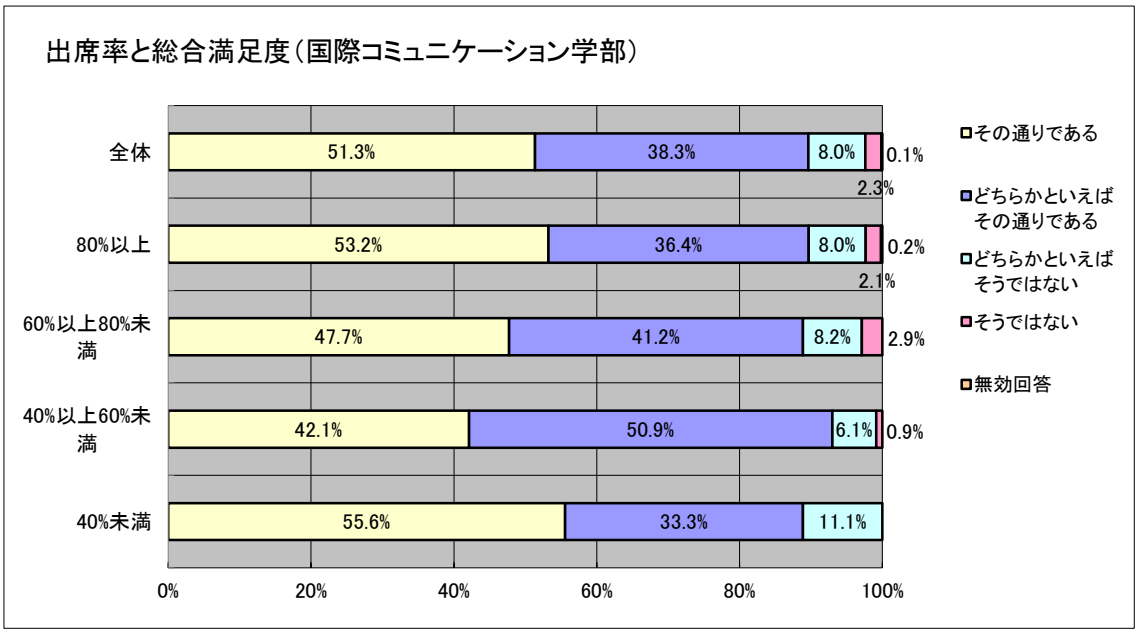


図１－４－４　人間関係学部

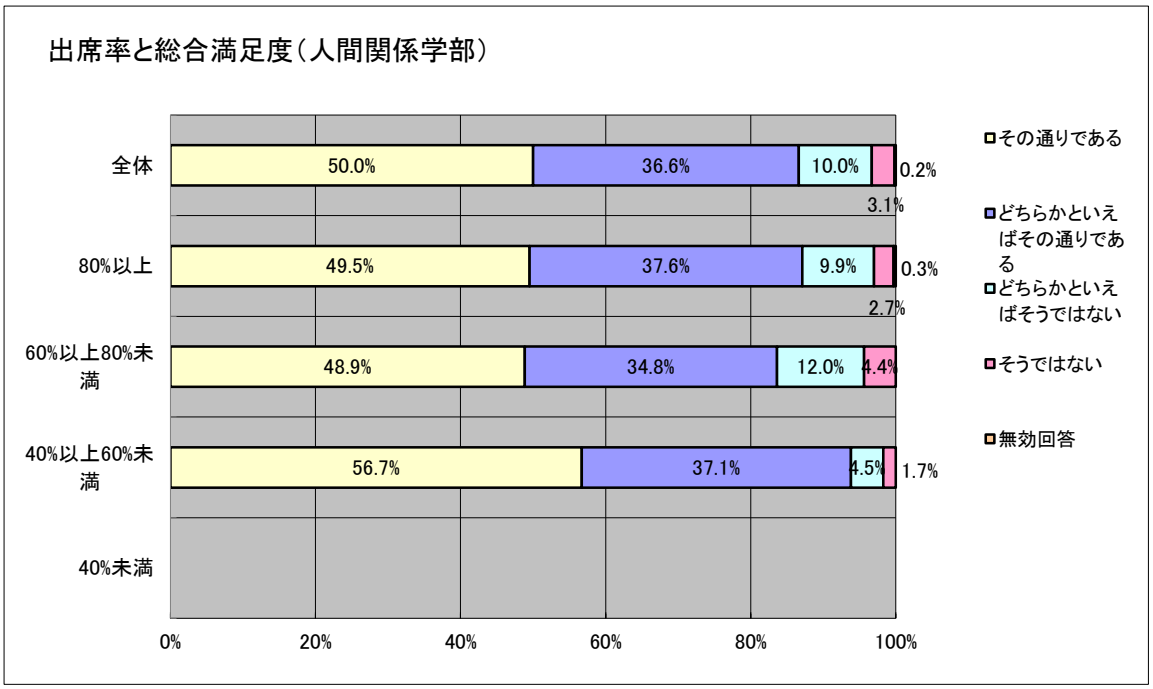


図１－４－５　文化情報学部

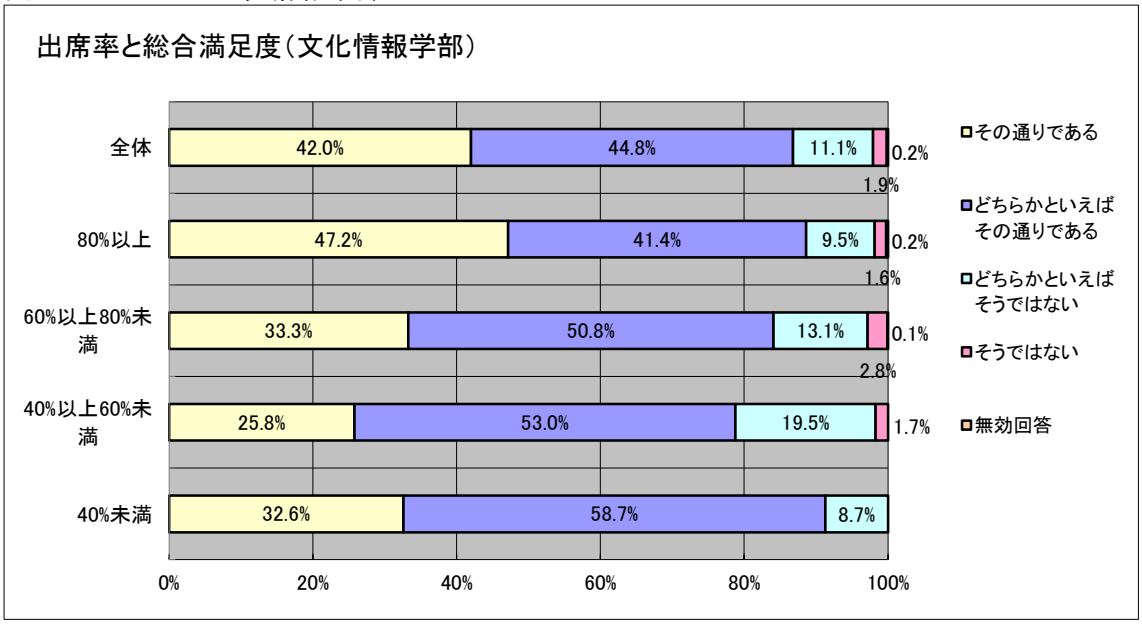


図１－４－６　現代マネジメント学部

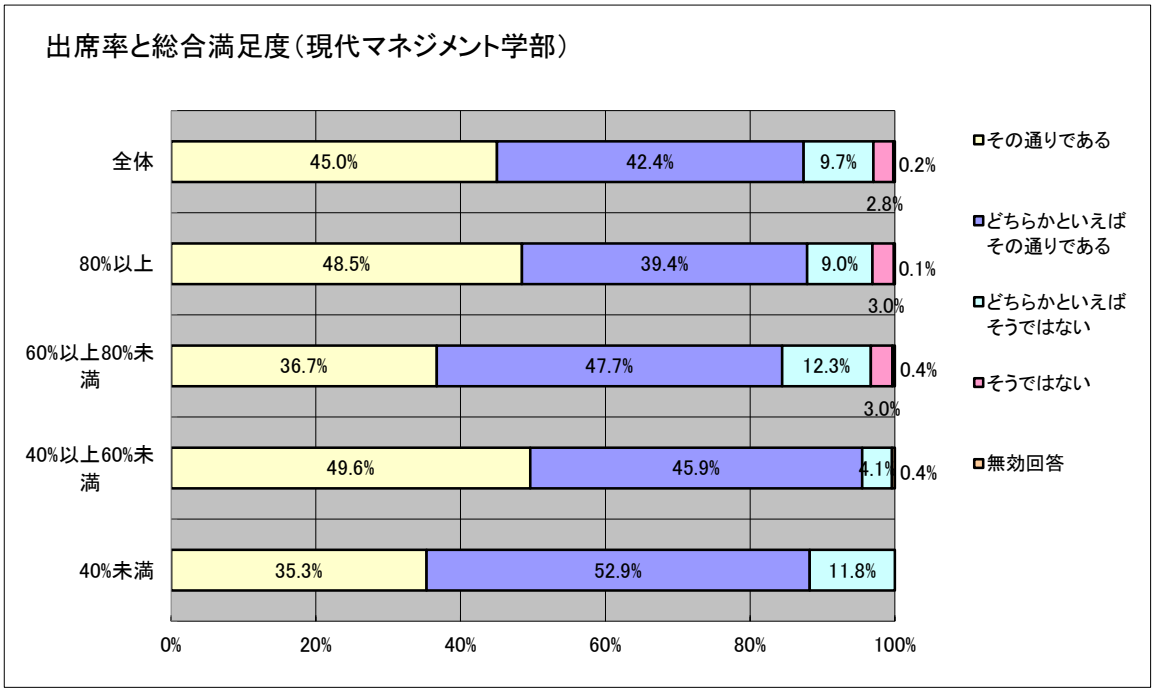


図１－４－７　教育学部

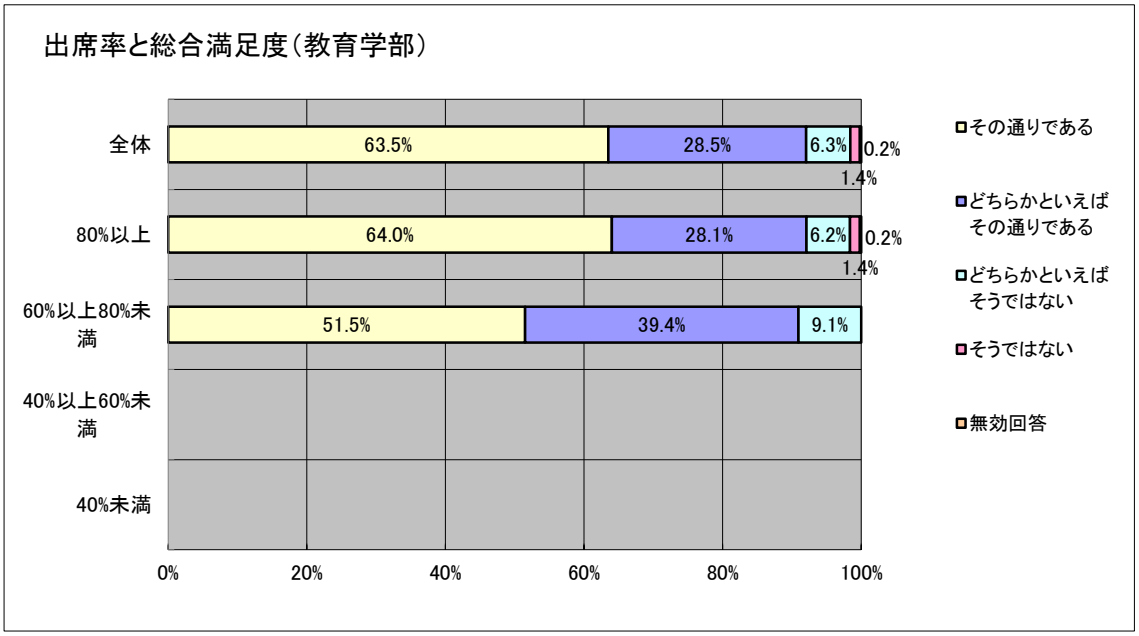
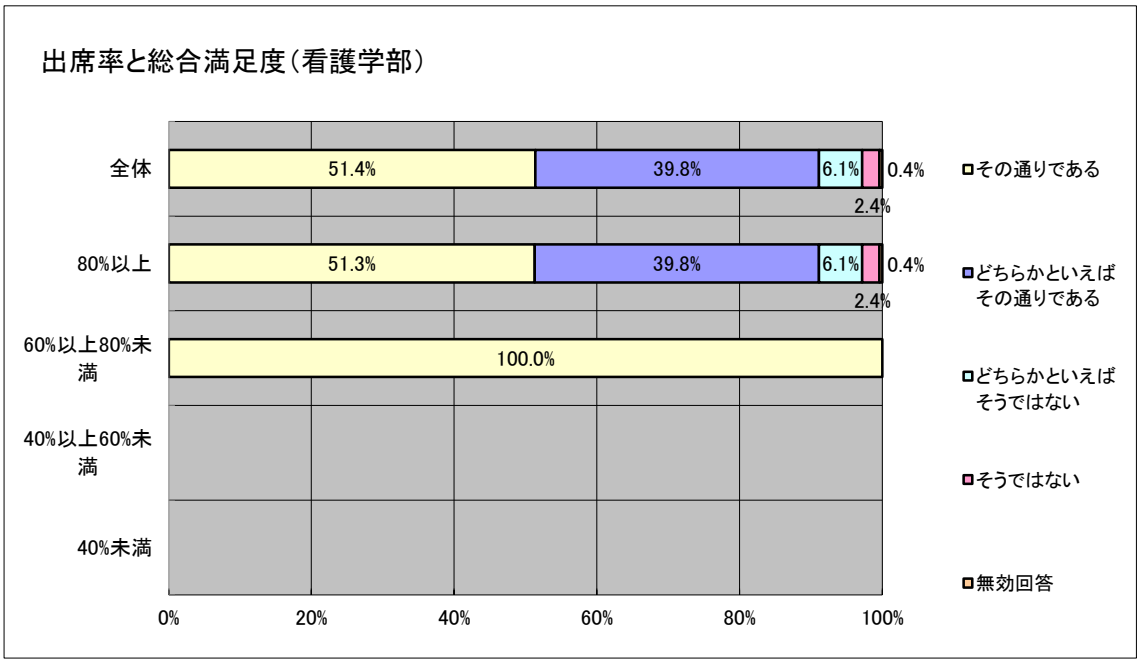


図１－４－８　看護学部



２．教員アンケートの分析

２．１．教員アンケートの分析：
教員の授業成功感（設問項目10）と設問項目3～9の相関関係

この分析結果は非常に興味深い状況を示している。教員の授業成功感（設問項目１０）が教員からみた受講者の理解度（設問項目８）と相関が高いことは予想通りであるが、学生による積極的発言があったこと（設問項目４）、私語がなかったこと（設問項目５）、教室サイズの適切さ（設問項目６）などの項目との相関が低いことは、予想を覆す分析結果である。この結果によれば、教員は教室サイズをあまり気にしておらず、また積極的な発言がないからといって、必ずしも授業成功感が低いわけではないということになる。私語についても、もちろん教員は無いことが理想だと考えるであろうが、私語があったからといって教員の授業成功感がないわけではないということである。教員の授業成功感（設問項目１０）との相関が高いのは、教員からみた受講者の熱心な取り組み（設問項目３）や、教員からみた受講者の理解度（設問項目８）や、教員が受講者の理解度に配慮した授業の工夫を行なうことができたという意識（設問項目９）である。

しかし、教員自身の授業成功感の実態を客観的に評価するためには、こうした分析結果のみでは不十分である。こうした分析結果を、さらに、授業に対する受講者の総合満足度に関するアンケート調査結果と比較して、教員の授業成功感と授業に対する受講者の総合満足度との差異の有無を明示できれば、授業担当教員の成功感なるもののうちに、成功したと思い込む単なる自己満足が潜んでいないかどうかが明らかになる。こうしてまた、当該授業担当教員は、授業改善にとって役立つ情報を得ることができる。（教員の授業成功感と授業に対する受講者の総合満足度の比較については、本報告書の「３．教員対象のアンケート調査結果と受講生対象のアンケート調査結果の比較」に掲げた図３－４を参照のこと。）

図 ２－１－１　教員の授業成功感と各設問項目３～９との相関関係

設問文	相関係数
3.　受講者は熱心に授業に取り組んでいた。	0.53
4.　学生による積極的な発言があった。	0.43
5.　このクラスでは、私語はほとんどなかった。	0.36
6.　このクラスの教室サイズは適切だった。	0.24
7.　授業はシラバスにそって計画通りにできた。	0.50
8.　受講者は授業の内容を理解できたと思う。	0.68
9.　受講者の理解度に配慮した工夫をした。	0.55

２．２．教員アンケートの分析：
設問項目３～１０の各々についての学部別のアンケート調査結果

教員アンケートの設問項目３～１０の各々について、学部別に集計した結果を図２－２－１から図２－２－８に示した。

教員からみた受講者の熱心な取り組み（図２－２－１）の学部別の比率を、授業に対する学部別の総合的満足度（図１－１－２から図１－１－８まで）の各々の図の一番上に記した棒グラフに示された「その通りである」の比率）と比較すると、生活科学部と文化情報学部の 2 学部の場合、生活科学部では、教員からみた受講者の熱心な取り組み 38.0%、受講者の満足度 39.4%、文化情報学部では、教員からみた受講者の熱心な取り組み 41.5%、受講者の満足度 42.0%となっているように、これら 2 学部ではともに教員からみた受講者の熱心な取り組みの比率が受講者満足度よりやや低い値を示しているものの、これら両者の値に強い相関性を認めることができる。

しかし他の 5 学部の場合は、国際コミュニケーション学部では、教員からみた受講者の熱心な取り組み 30.0%、受講者の満足度 51.3%、人間関係学部では、教員からみた受講者の熱心な取り組 42.3%、受講者の満足度 50.0%、現代マネジメント学部では、教員からみた受講者の熱心な取り組み 17.1%、受講者の満足度 45.0%、教育学部では、教員からみた受講者の熱心な取り組み 58.1%、受講者の満足度 63.5%、看護学部では、教員からみた受講者の熱心な取り組み 39.0%、受講者の満足度 51.4%となっているように、5 学部ともに、教員からみた受講者の熱心な取り組みの比率は受講者の満足度をかなり下回っている。特に国際コミュニケーション学部、現代マネジメント学部、看護学部では大幅に！！ つまり、教員からみて授業に熱心に取り組んだ受講者以外にも、授業に満足であると端的に回答する受講者が数多く存在するということである。FD 活動に携わる者として、この現象は、どのように理解すればいいのか。教員が授業に取り組む受講者の熱意を過小評価しているということか、受講者は熱意をもって取り組んではいない授業に満足しているということなのか、その他、様々な解読がありうる。あるいは、多くの教員が、授業を行なう際に自覚している自身の熱心さと内心ひそかに比較して、受講者の授業に対する取り組みには若干熱心さが不足している、もう少し熱心であってほしい、と判断しているのかもしれない。その場合、多くの教員は、受講者の興味・関心をより惹きつけるような授業改善の必要を自覚しているということであろうか。いずれにせよ、各学部、各教員、各科目のレヴェルに即した FD 活動にとって、反省すべき多くの問題点を内包する現象であると思う。

特に、教員からみた受講者の熱心な取り組みの比率が 7 学部中最も低い 17.1%を示している現代マネジメント学部の場合、学部を挙げての授業改善の努力が強く求められる。現代マネジメント学部は、教員自身の授業成功感を問う項目（設問項目１０）に対する「その通りである」の回答率 15.9%も、「受講者の理解度に配慮した工夫をした」（設問項目９）

に対する「その通りである」の回答率 20.7%もともに 7 学部中きわだって低い比率を示しており（図２－２－８、図２－２－７）、授業改善の余地が特に大きい。

各学部レヴェル及び各教員レヴェルで、今後とも引き続き受講者と教員の距離を測りながら、その距離を十分に配慮した上で授業に対する受講者の興味・関心を惹きつけるような創意・工夫を重ねていくことが重要である。

「学生による積極的な発言があった」（設問項目４）への回答への回答をみると、学部間の差はあるものの概して「その通りである」の回答率と「どちらかと言えばその通りである」の回答率の合計は 50%辺りの数値にとどまり、決して高い数値とは言えない。教育学部、看護学部の 2 学部はそれぞれ 82.9%、68.3%の数値を示しており、他の 5 学部とは授業風景が少し異なっているようである。講義科目の場合は（演習科目や外国語教育科目の場合とは異なり）学生に発言させることによってではなく、講義内容を工夫することによって授業への満足度を高めていくべきだという従来からの教育法に代わる新しい方法が試行されているのだろうか、アクティヴ・ラーニングの多岐のわたる手法が採用されているのであろうか、調査してみたい。（図２－２－２）

シラバス通りに授業を展開できたかを問う設問項目７と、教員からみた受講者の授業理解度を問う設問項目８への回答において、「その通りである」と「どちらかといえばその通りである」の比率の合計が非常に高いことは、概ね本学の教員が学生の理解度を考慮しつつ、シラバスに沿って授業を展開していることを示している。（図２－２－５、図２－２－６）ただし、教員からみた受講者の授業理解度を問う設問項目８への回答において端的に「その通りである」とする比率は、10%台が 2 学部、20%台が 3 学部、30%台前半が 2 学部と低い。この点は、FD 活動の進展に向けて、各学部レヴェル及び各教員レヴェルで改めて自己点検しなければならない。（図２－２－６）

教員による授業の工夫を問う設問項目９において「その通りである」と「どちらかといえばその通りである」の比率の合計が非常に高いことは、本学の教員にＦＤの意識が浸透していることを示している。（図２－２－６）

教員の授業成功感を問う「総合的にみて、この授業をうまく進めることができた」の設問項目１０への回答において「その通りである」の比率がすべての学部でやや低いのは、教員の理想が高いゆえであるとひとまずは判断できる。「どちらかといえばその通りである」を合わせた割合は非常に高い数値を示しており、本学においては概ね良質な授業が展開されていると判断できる。（図２－２－８）

先に掲げた図２－１－１に明らかなように、教員の授業達成感を問う設問項目１０は、教員からみた学生の授業理解度を問う設問項目８と最も高い相関性を示しており、従って、設問項目１０への「その通りである」の回答率も、設問項目８への「その通りである」の回答率同様、低い水準にとどまっている。この点もあわせて、FD 活動の伸展に向けて、各学部レヴェル及び各教員レヴェルで自己点検する必要がある。

図２－２－１　教員のみた受講者の授業への取り組み姿勢

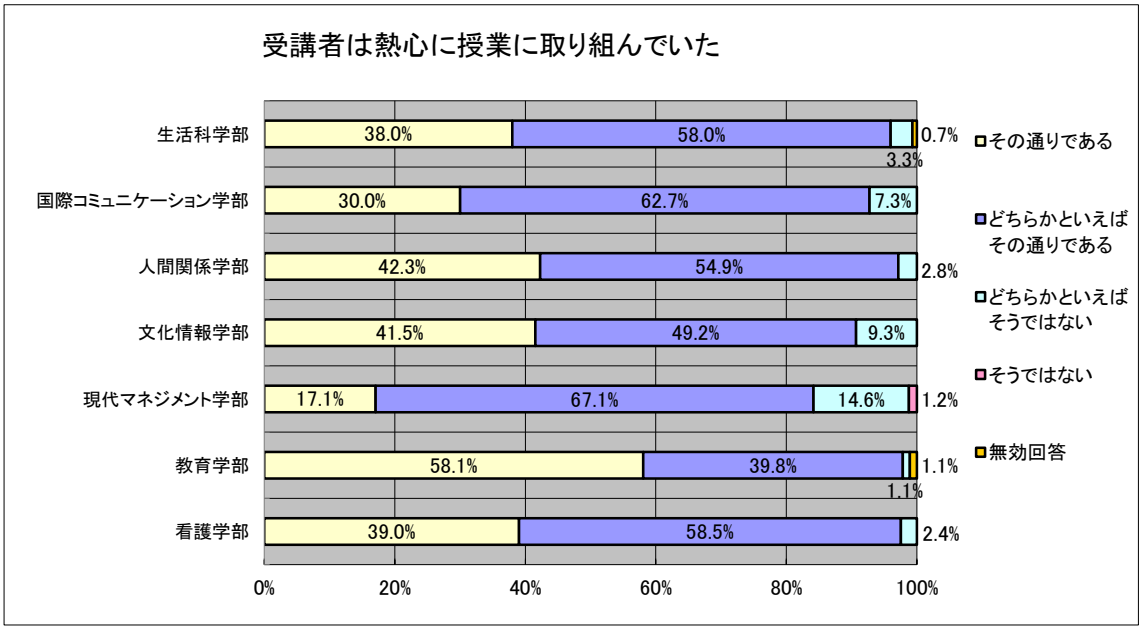


図２－２－２　学生による積極的な発言

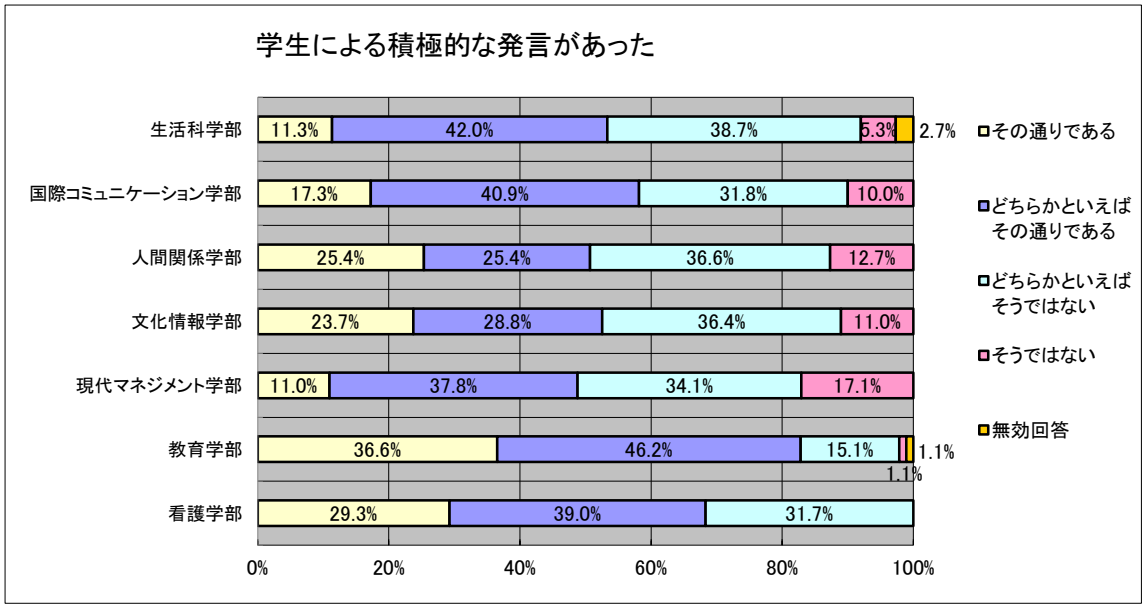


図２－２－３　学生の私語

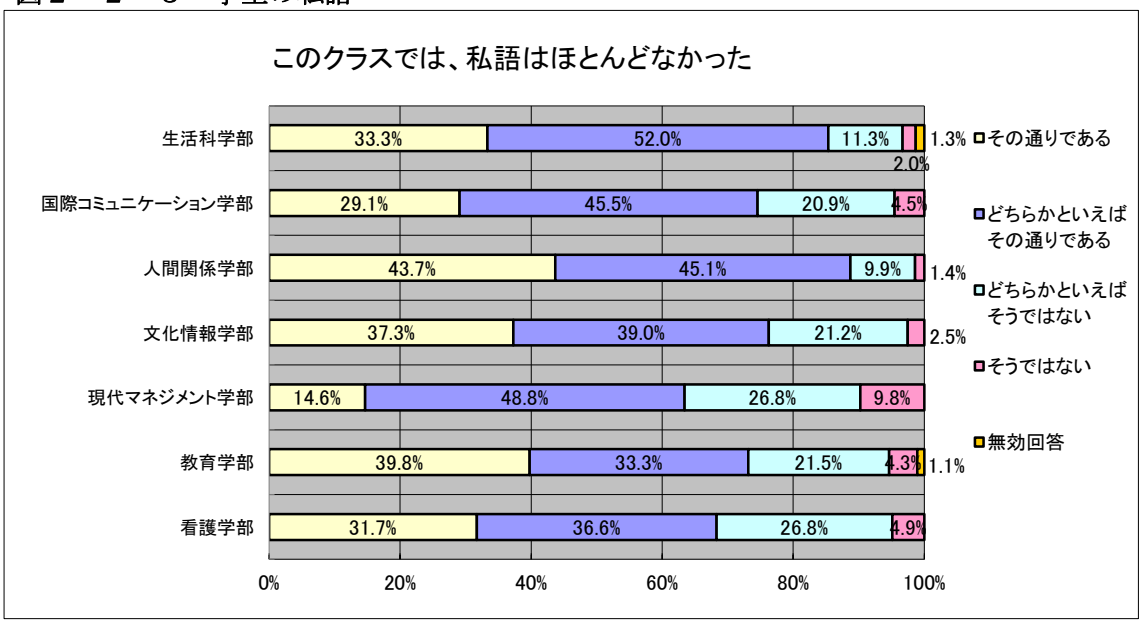


図２－２－４　講義室の大きさ

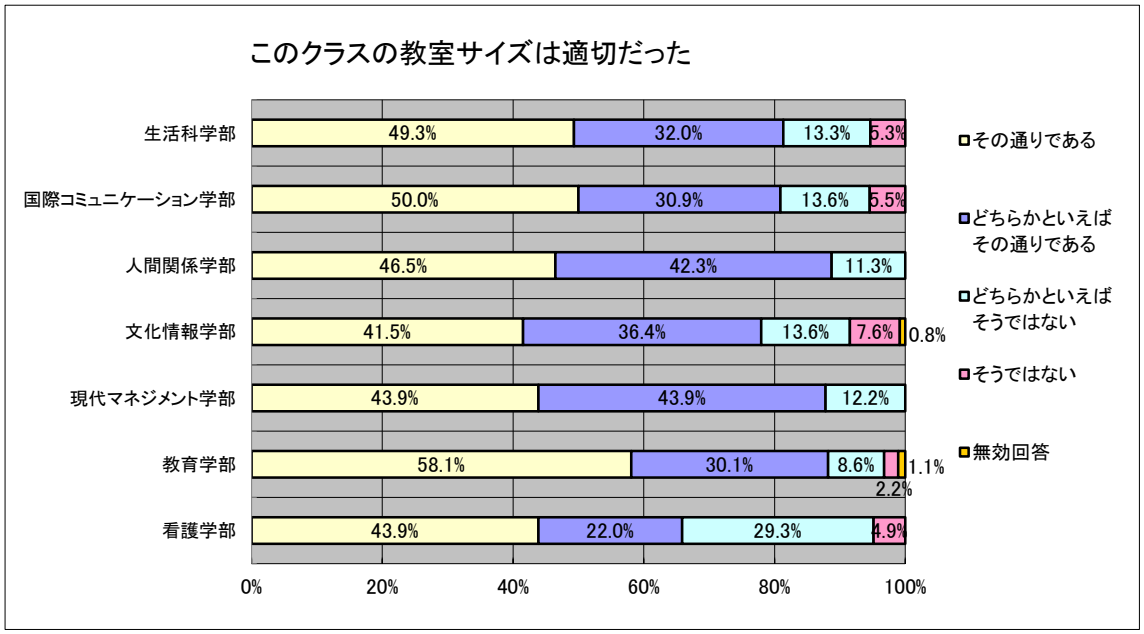


図２－２－５　授業をシラバス通りにできたか

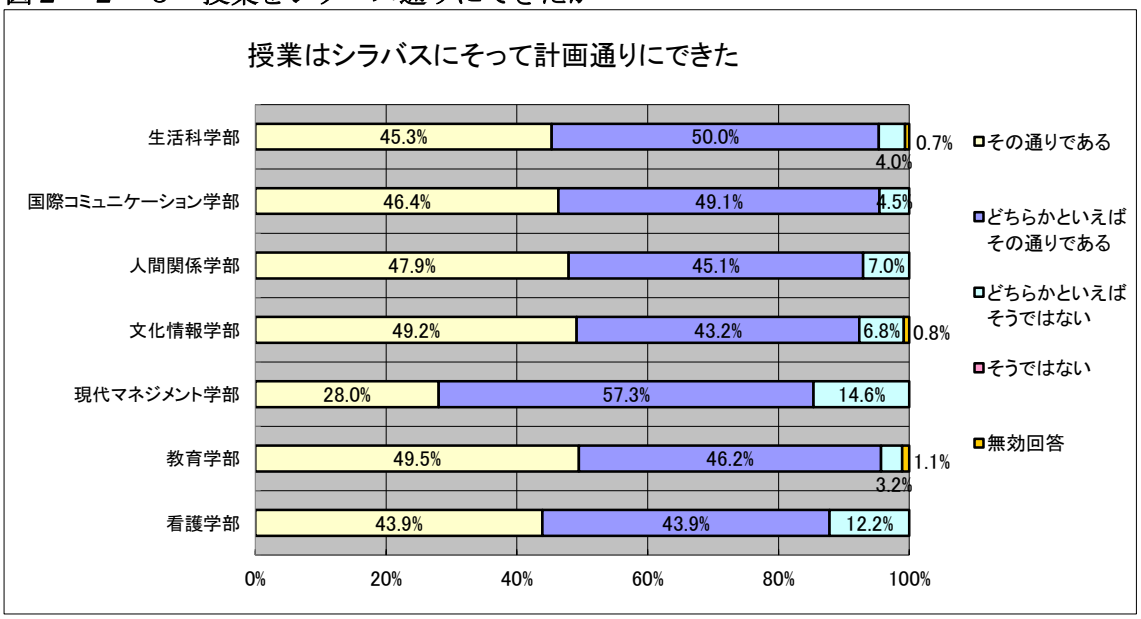


図２－２－６　教員からみた受講者の授業理解度

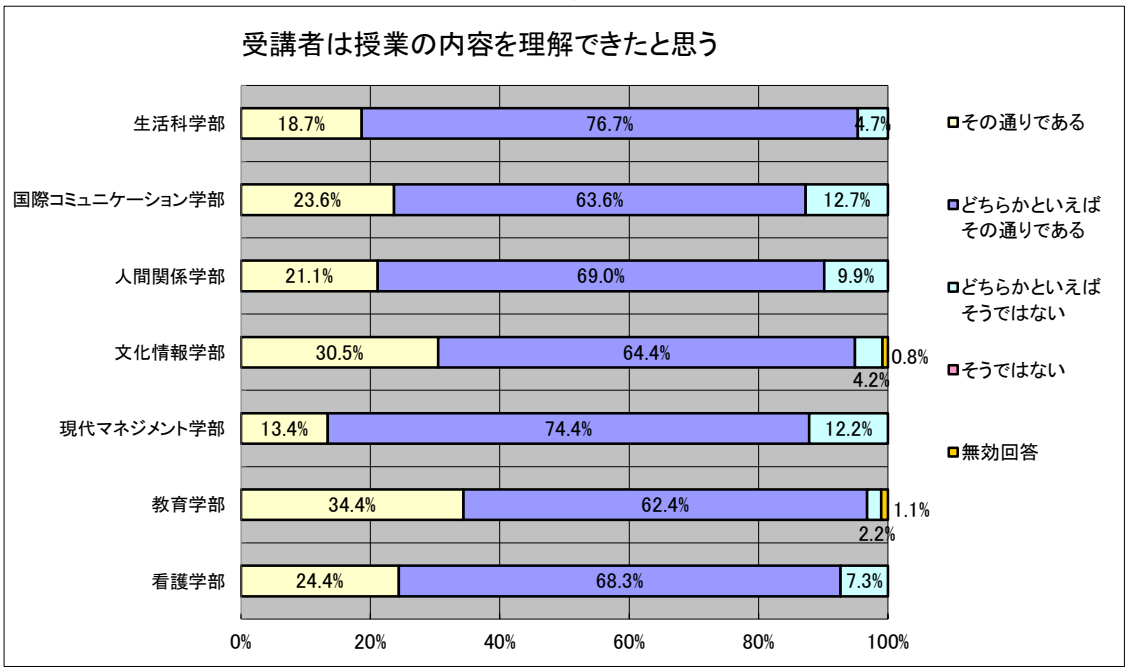


図２－２－７　教員による授業の工夫

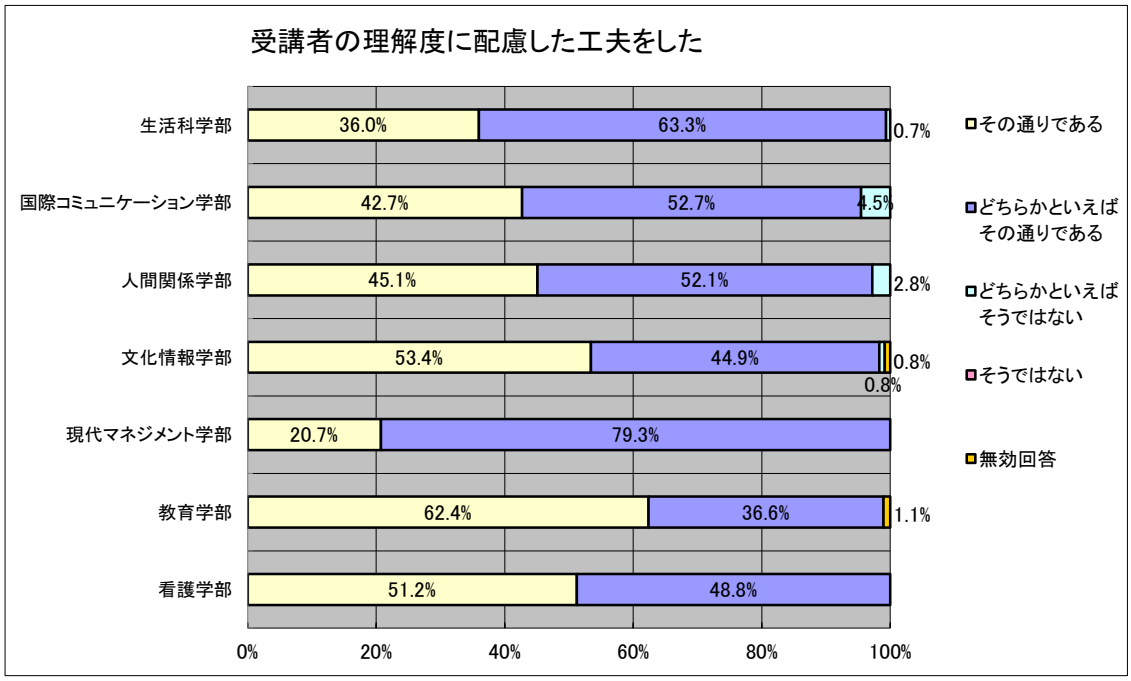
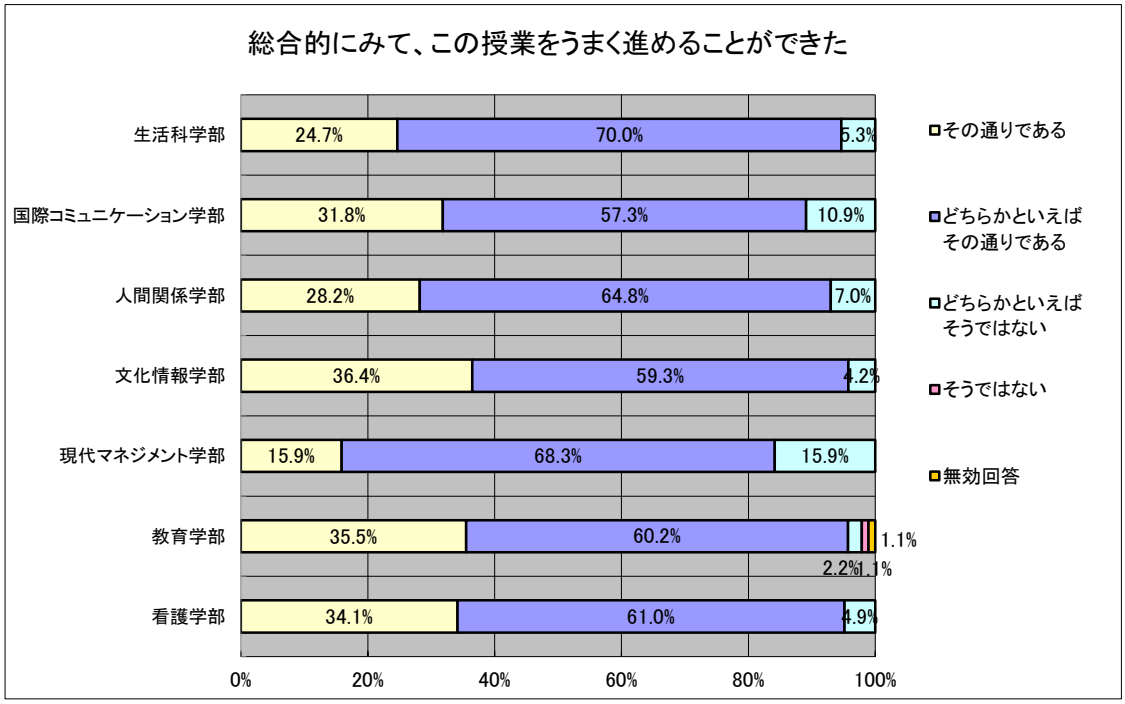


図２－２－８　教員の授業成功感



３．教員対象のアンケート調査結果と受講生対象のアンケート調査結果の比較

図３－１に示されているように、「総合的にみて、この授業はうまく進めることができた」の設問項目への回答をみると、本学の教員は授業を概ねうまく進められたと感じており、比較的高い授業成功感を抱いているものの、他方では「その通りである」の比率が低いことから、授業に対してかなり高い理想を抱いているという事情をひとまずは読み取ることができる。授業内容の理解度（図３－２）においても、総合評価（図３－４）においても、教員による「その通りである」の回答率よりも、受講者による「その通りである」の回答率のほうが高く、受講者は教員が考えている以上に授業を理解しやすく満足できるものとして捉えていることがわかる。この比較結果をみるかぎりは、本学の教員が自らの授業に対して真摯な姿勢を堅持していることと、教員の実感以上に学生が授業に満足していることが示されており、本学のＦＤ活動が好ましい傾向にあるとひとまずは判断できる。

しかし、教員による授業改善上の工夫を問う調査の結果（図３－３）にも注目すべきである。文化情報学部では、教員の意識としては十分な工夫をしたつもりの授業（「その通りである」の回答率に対応する数の授業）が、学生の目にはそのように映じていないことが分かる。教員の思う授業改善の工夫は実際の授業には反映していないのかもしれない。

さらに、図３－２以下の３つの図に共通して言えることであるが、いずれの比較結果をみても「どちらかといえばそうではない」の回答率と「そうではない」の回答率の合計は、３つの図に記された計 24 個の棒グラフのうち、図３－４に記載の国際コミュニケーション学部と現代マネジメント学部の棒グラフ 2 個以外の 22 個のすべてのグラフで、教員対象のアンケート調査結果の数値の方が受講生対象のアンケート調査結果の数値よりも低い。つまり、全学部を通して、授業を理解しやすいとは思わない受講者、教員による授業の工夫をそれとして認めていない受講者、授業に満足できない受講者が、それぞれ 11%から 15%ほど存在しているが、この点を教員は十分には自覚していないようである。

図３－１　総合的に授業はうまく進められたか

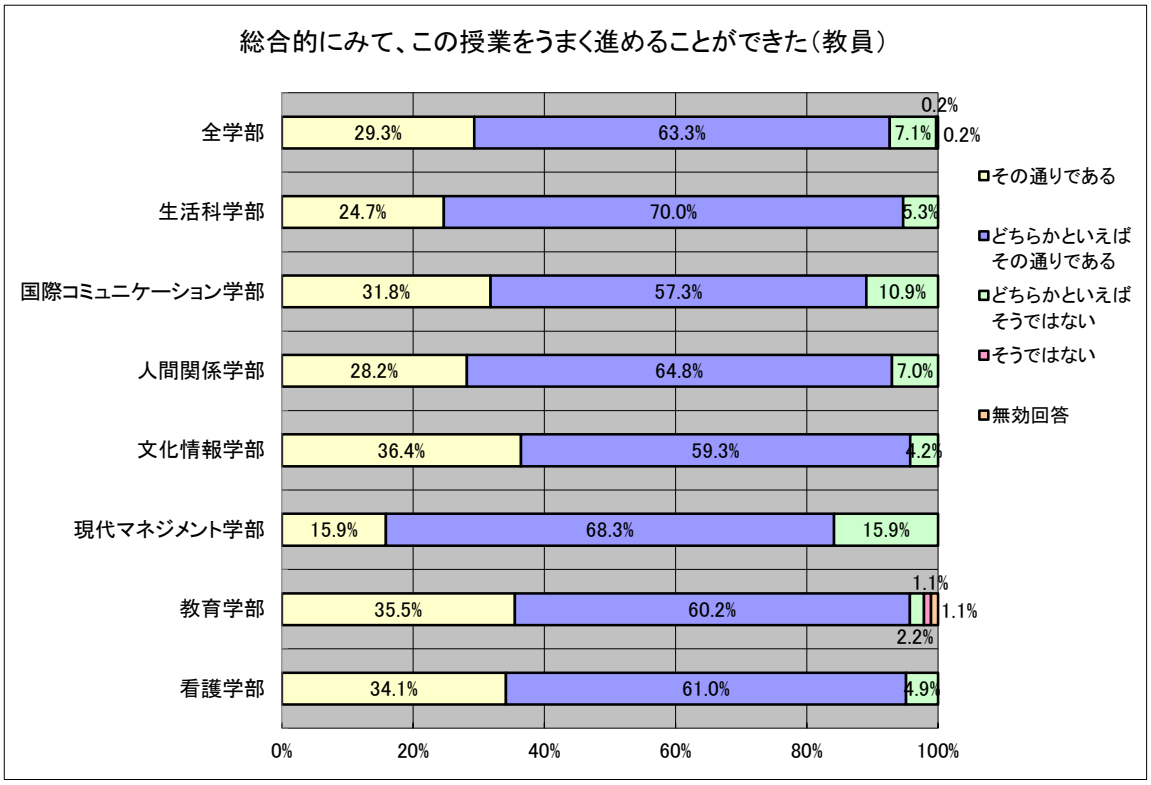


図３－２　受講者は授業の内容を理解できたか

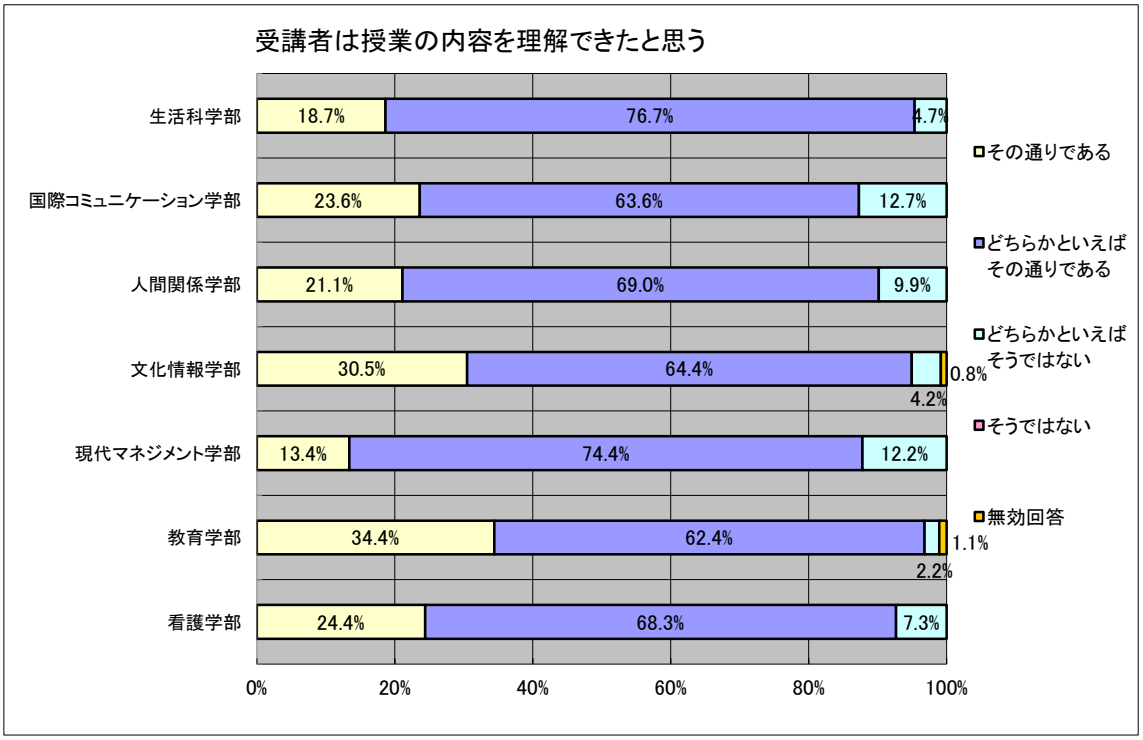


図３－３　教員は授業内容を受講者が理解できるように工夫していたか

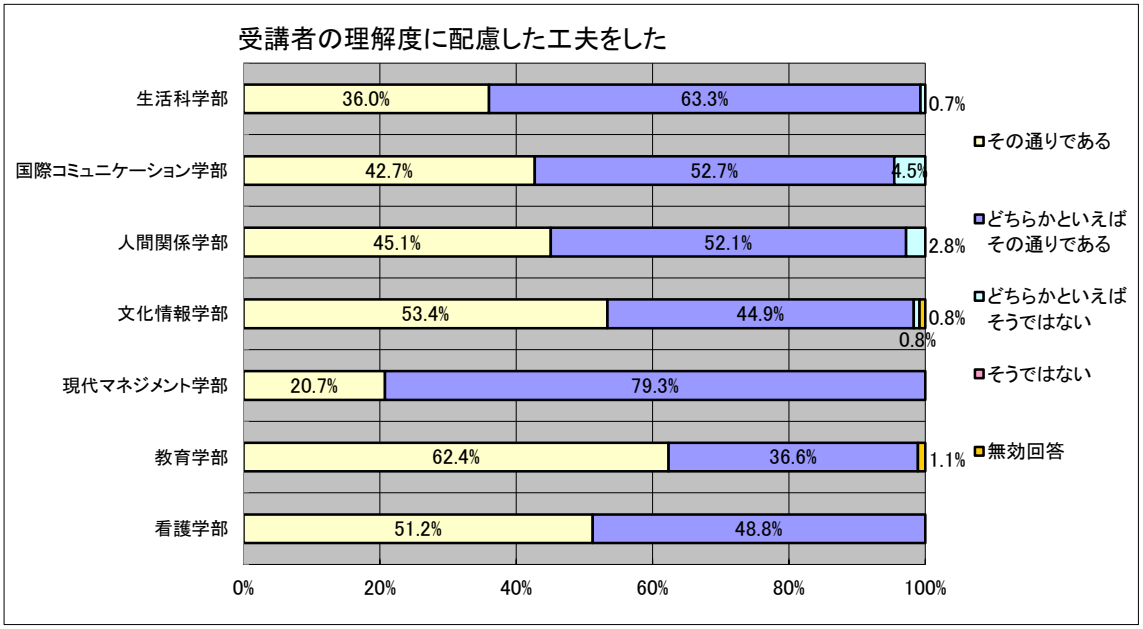
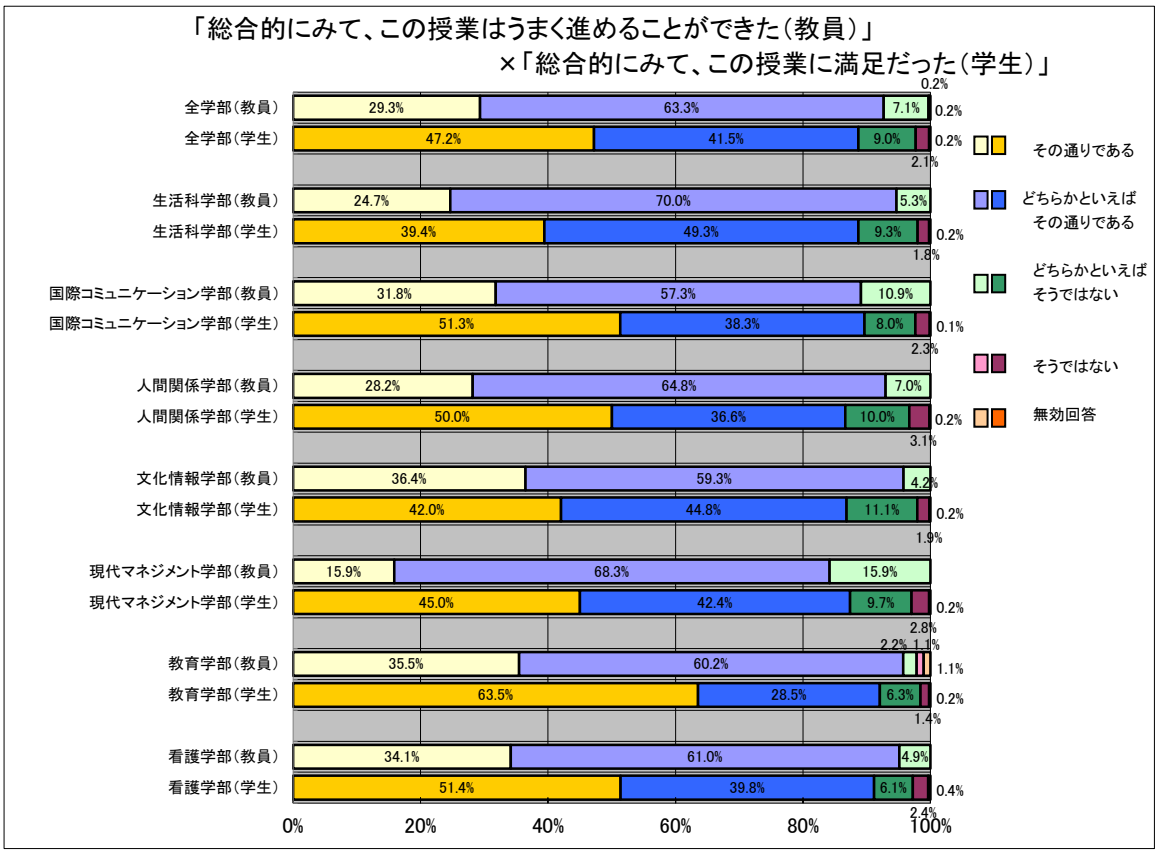
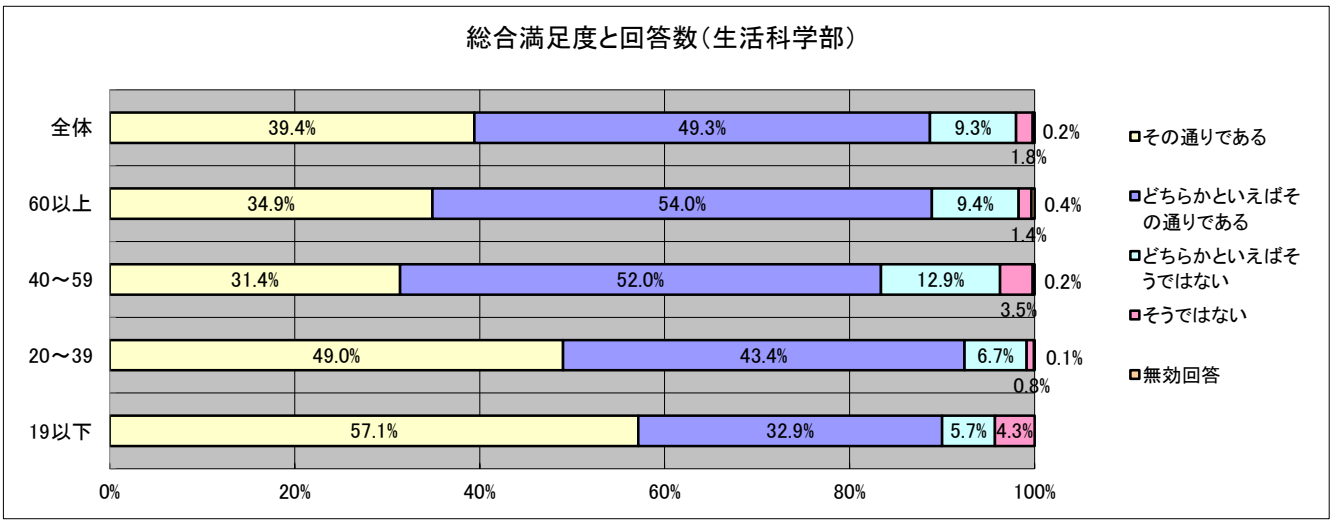
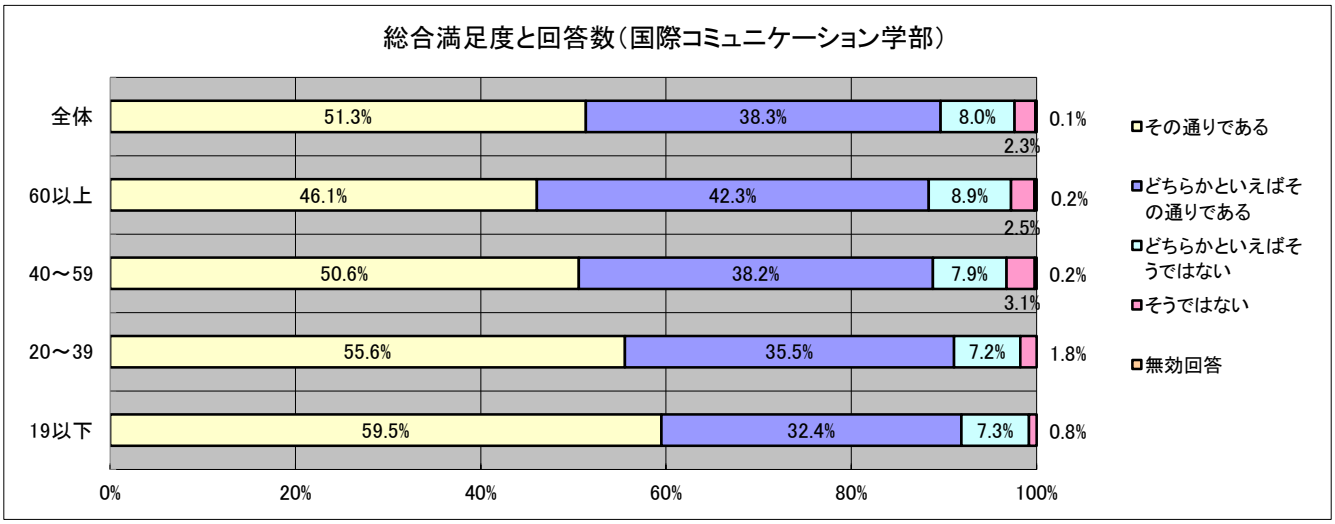


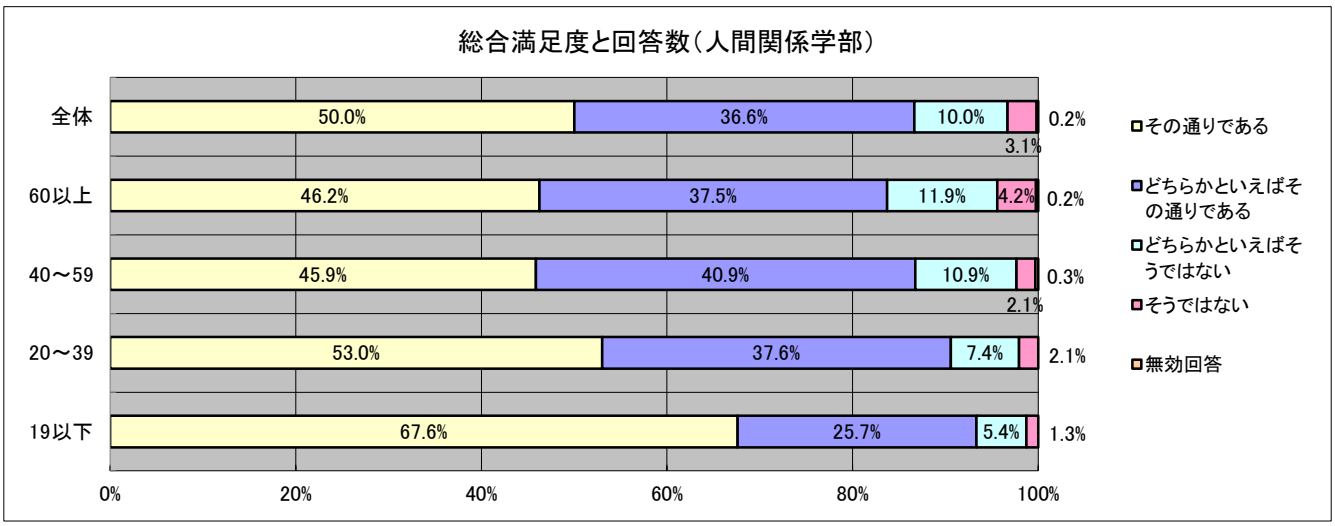
図３－４　授業の総合評価（教員の授業成功感／授業に対する受講者の総合的満足度）

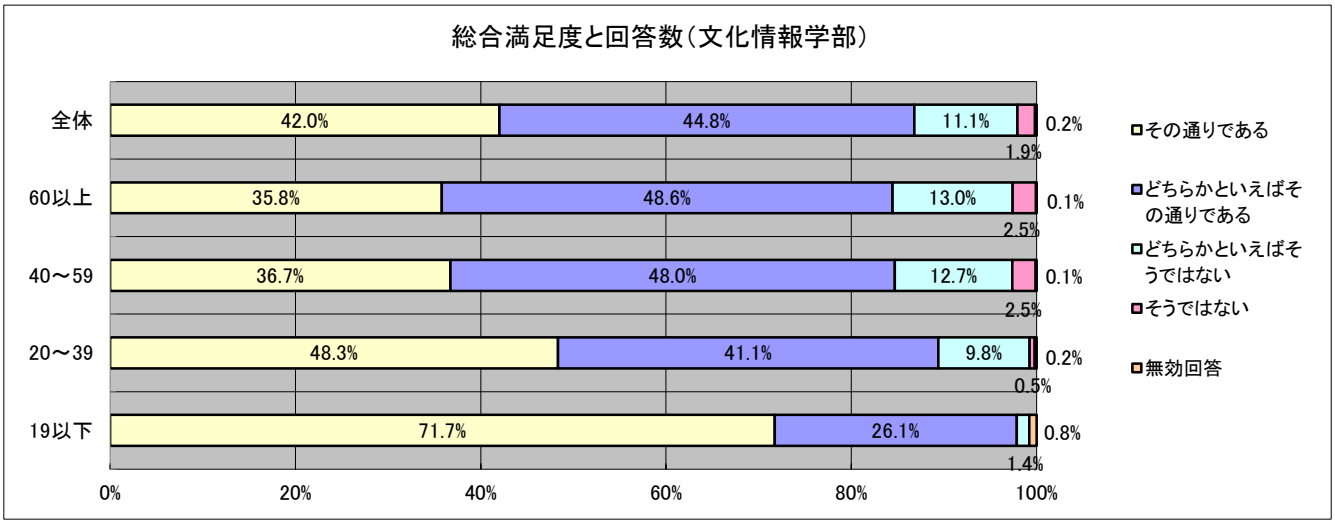


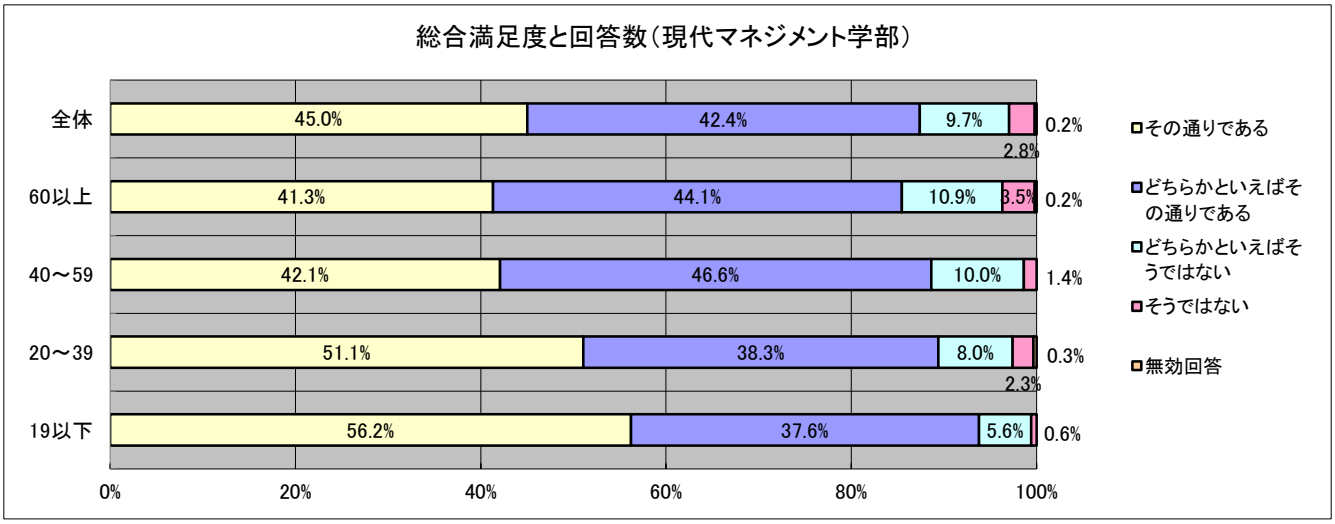
学　　部		専任教員	非常勤	合　計
生活科学部	実施予定科目数	91	85	176
	実施科目数	83	74	157
	実施率	91.2%	87.1%	89.2%
国際コミュニケーション学部	実施予定科目数	53	82	135
	実施科目数	48	76	124
	実施率	90.6%	92.7%	91.9%
人間関係学部	実施予定科目数	64	18	82
	実施科目数	56	17	73
	実施率	87.5%	94.4%	89.0%
文化情報学部	実施予定科目数	69	56	125
	実施科目数	68	55	123
	実施率	98.6%	98.2%	98.4%
現代マネジメント学部	実施予定科目数	68	29	97
	実施科目数	63	25	88
	実施率	92.6%	86.2%	90.7%
教育学部	実施予定科目数	61	43	104
	実施科目数	57	43	100
	実施率	93.4%	100.0%	96.2%
看護学部	実施予定科目数	56	4	60
	実施科目数	42	4	46
	実施率	75.0%	100.0%	76.7%
合　　計	実施予定科目数	462	317	779
	実施科目数	417	294	711
	実施率	90.3%	92.7%	91.3%

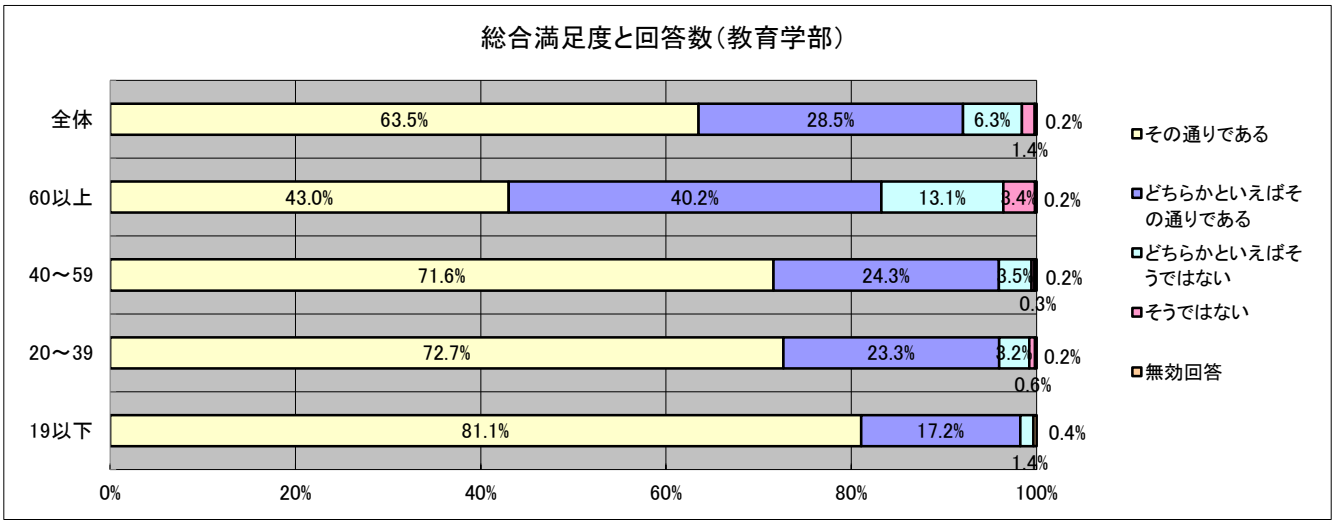

総合満足度と回答数（生活科学部）
全体
39.4%
49.3%
9.3%
0.2%
1.8%
60以上
34.9%
54.0%
9.4%
0.4%
1.4%
40～59
31.4%
52.0%
12.9%
0.2%
3.5%
20～39
49.0%
43.4%
6.7%
0.1%
0.8%
19以下
57.1%
32.9%
5.7%
4.3%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

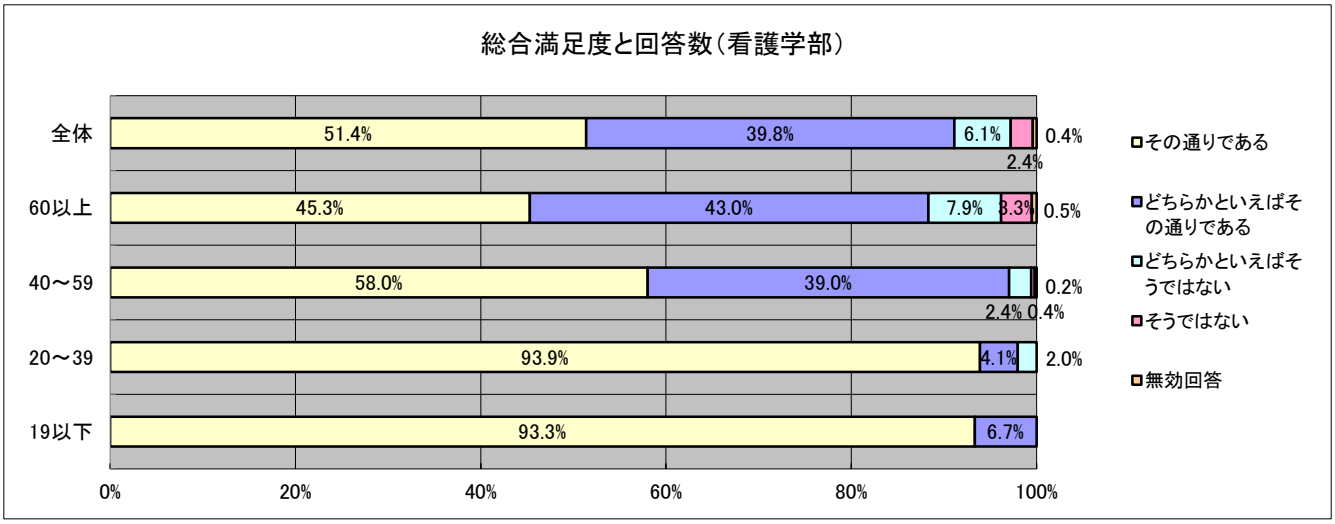

総合満足度と回答数（国際コミュニケーション学部）
全体
51.3%
38.3%
8.0%
0.1%
2.3%
60以上
46.1%
42.3%
8.9%
0.2%
2.5%
40～59
50.6%
38.2%
7.9%
0.2%
3.1%
20～39
55.6%
35.5%
7.2%
1.8%
19以下
59.5%
32.4%
7.3%
0.8%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

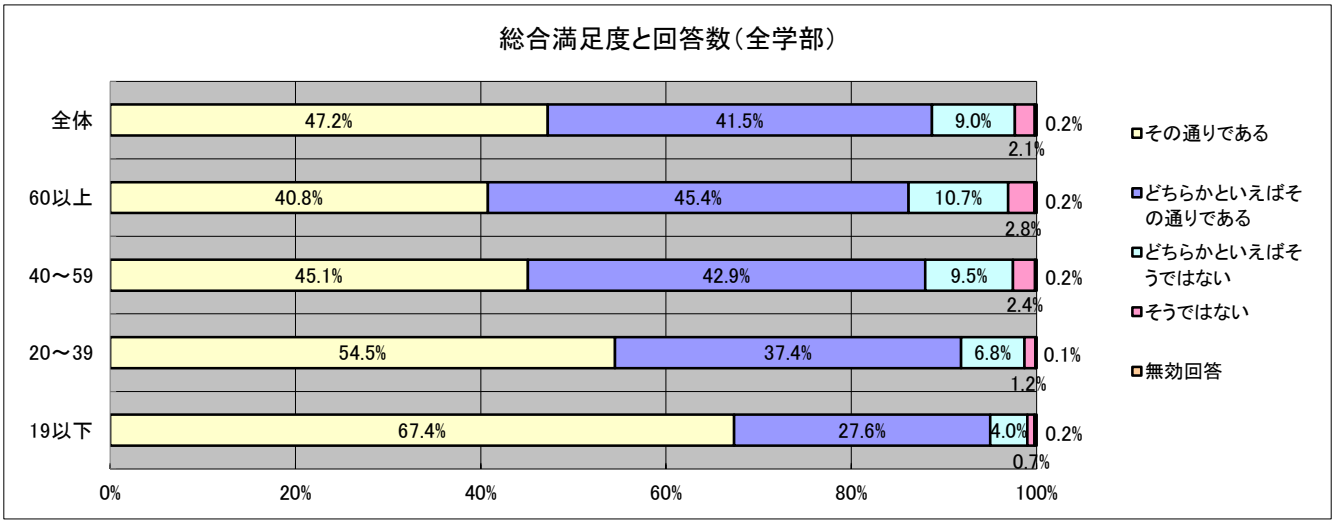

総合満足度と回答数（人間関係学部）
全体
50.0%
36.6%
10.0%
0.2%
3.1%
60以上
46.2%
37.5%
11.9%
4.2%
0.2%
40～59
45.9%
40.9%
10.9%
0.3%
2.1%
20～39
53.0%
37.6%
7.4%
2.1%
19以下
67.6%
25.7%
5.4%
1.3%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答


総合満足度と回答数（文化情報学部）
全体
60以上
40～59
20～39
19以下
42.0%
44.8%
11.1%
0.2%
1.9%
35.8%
48.6%
13.0%
0.1%
2.5%
36.7%
48.0%
12.7%
0.1%
2.5%
48.3%
41.1%
9.8%
0.2%
0.5%
71.7%
26.1%
0.8%
1.4%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答


総合満足度と回答数（現代マネジメント学部）
全体
60以上
40～59
20～39
19以下
45.0%
42.4%
9.7%
0.2%
2.8%
41.3%
44.1%
10.9%
3.5%
0.2%
42.1%
46.6%
10.0%
1.4%
51.1%
38.3%
8.0%
0.3%
2.3%
56.2%
37.6%
5.6%
0.6%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

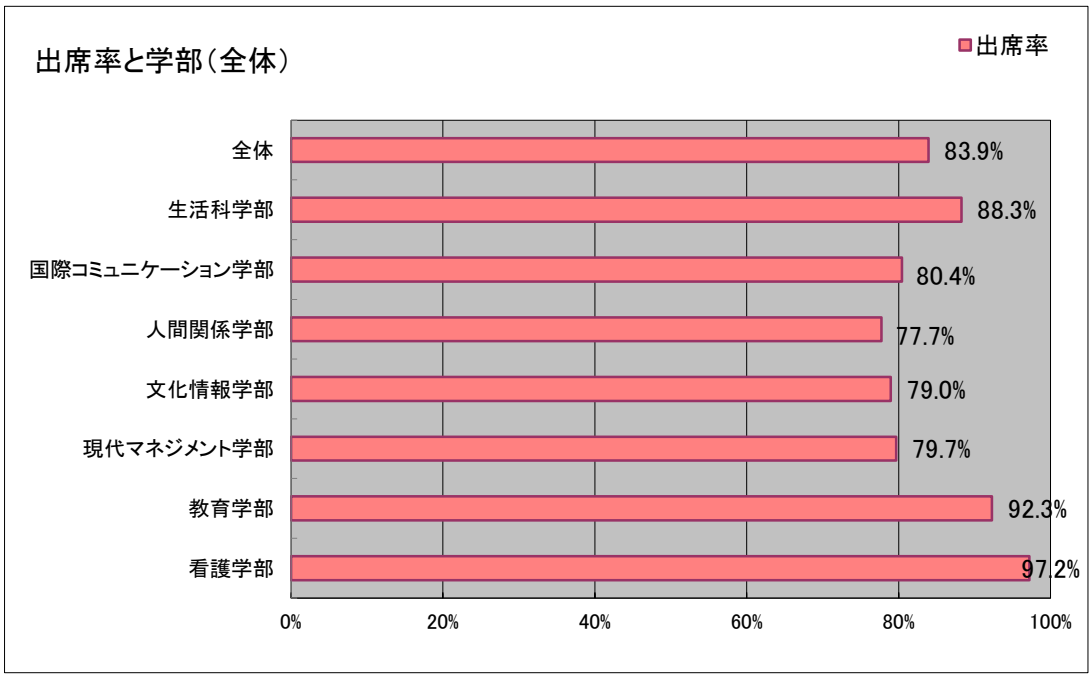

総合満足度と回答数（教育学部）
全体
60以上
40～59
20～39
19以下
63.5%
28.5%
6.3%
0.2%
1.4%
43.0%
40.2%
13.1%
3.4%
0.2%
71.6%
24.3%
3.5%
0.2%
0.3%
72.7%
23.3%
3.2%
0.2%
0.6%
81.1%
17.2%
0.4%
1.4%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

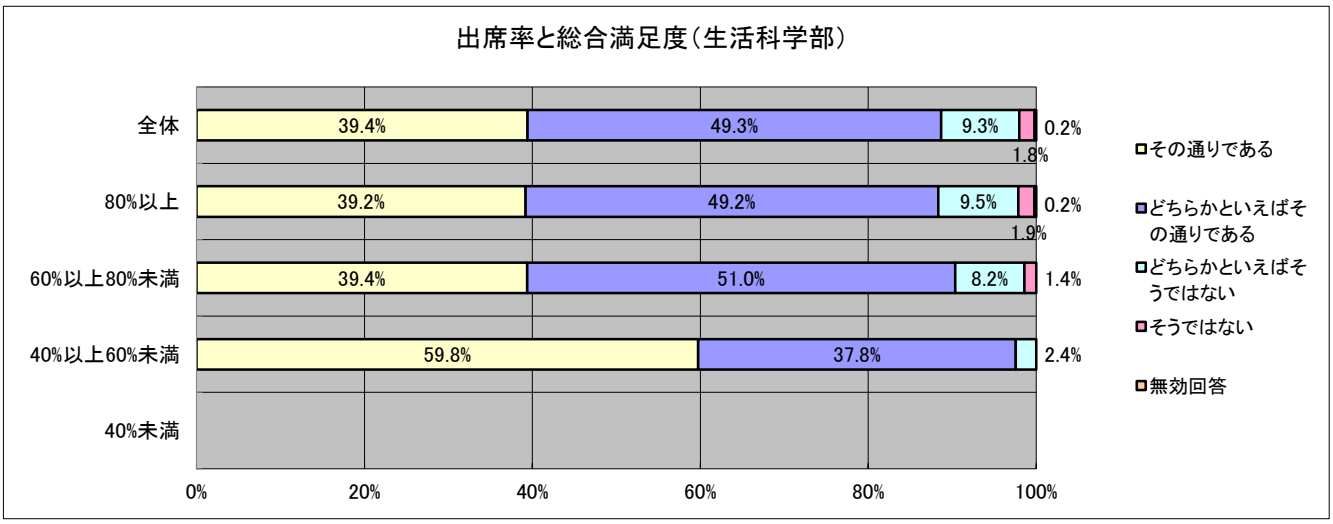

総合満足度と回答数（看護学部）
全体
60以上
40～59
20～39
19以下
51.4%
39.8%
6.1%
0.4%
2.4%
45.3%
43.0%
7.9%
3.3%
0.5%
58.0%
39.0%
0.2%
2.4%
0.4%
93.9%
4.1%
2.0%
93.3%
6.7%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

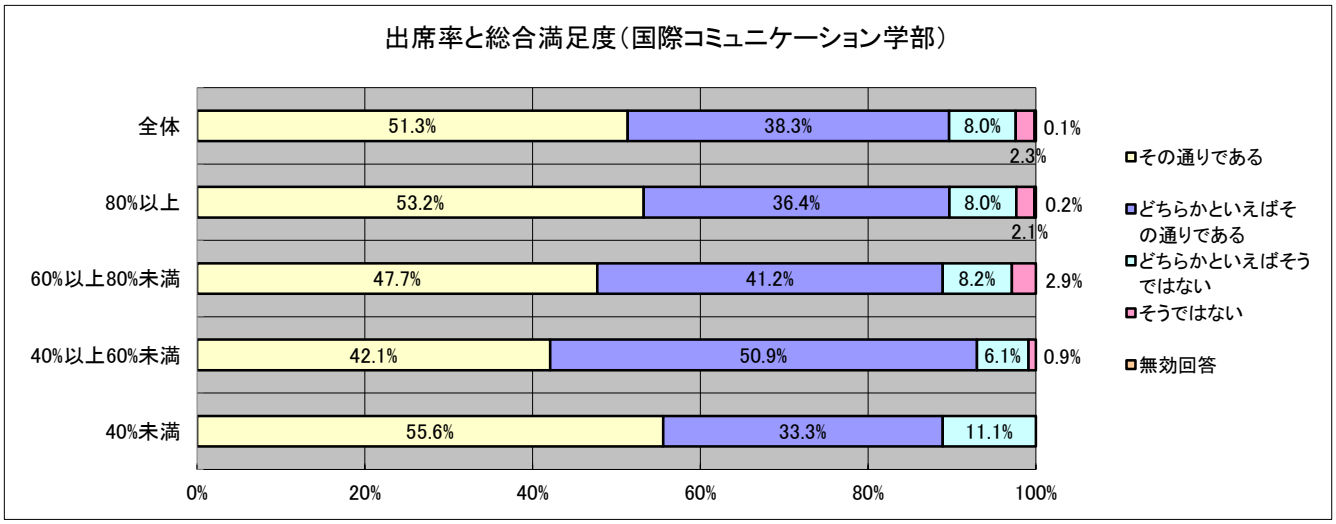

総合満足度と回答数（全学部）
全体
60以上
40～59
20～39
19以下
47.2%
41.5%
9.0%
0.2%
2.1%
40.8%
45.4%
10.7%
0.2%
2.8%
45.1%
42.9%
9.5%
0.2%
2.4%
54.5%
37.4%
6.8%
0.1%
1.2%
67.4%
27.6%
4.0%
0.2%
0.7%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

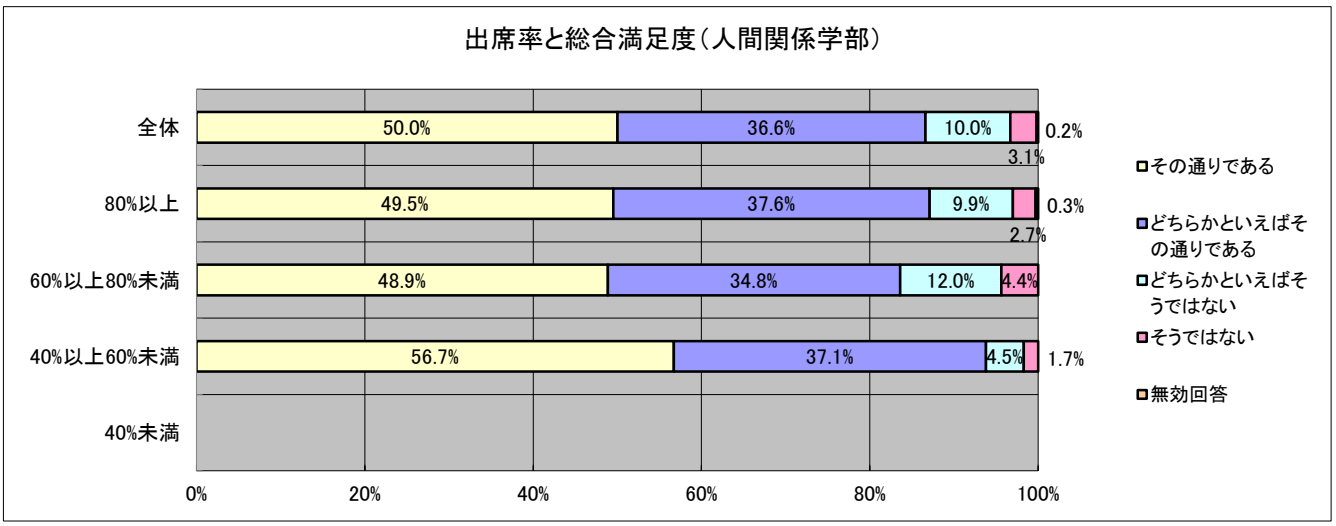
学部における総合満足度と各項目との相関関係（全学部）

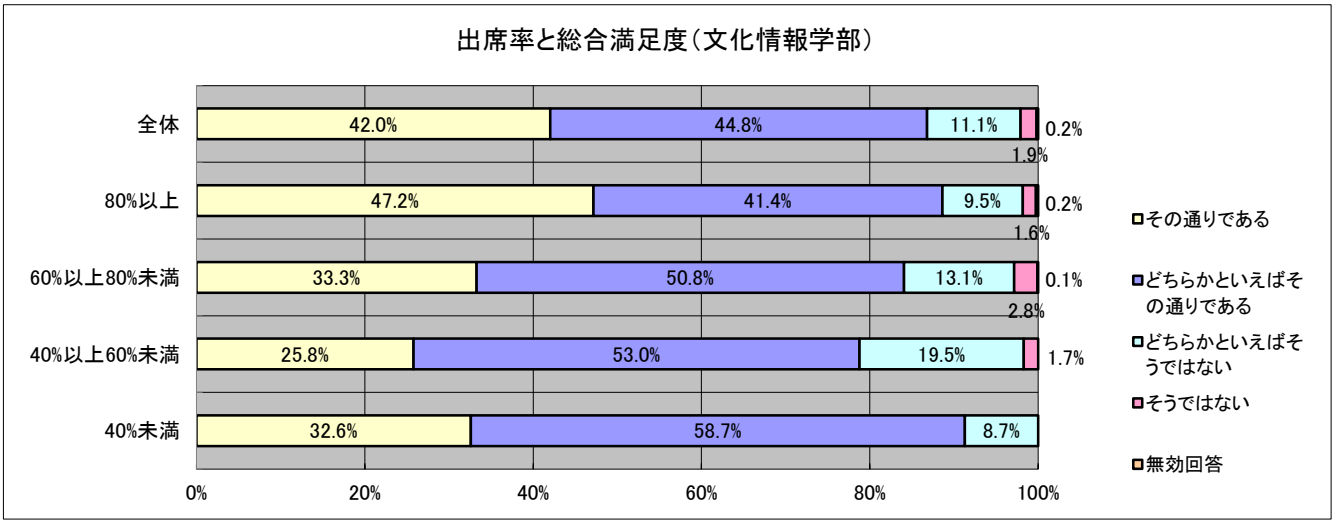
	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9
生活科学部	0.75	0.63	0.64	0.70	0.62	0.59	0.53	0.49	0.58
国際コミュニケーション学部	0.75	0.70	0.68	0.75	0.67	0.65	0.54	0.53	0.60
人間関係学部	0.78	0.67	0.71	0.76	0.67	0.62	0.53	0.47	0.64
文化情報学部	0.76	0.69	0.67	0.75	0.67	0.67	0.54	0.51	0.61
現代マネジメント学部	0.79	0.72	0.70	0.76	0.70	0.67	0.63	0.57	0.63
教育学部	0.78	0.72	0.68	0.76	0.68	0.68	0.58	0.50	0.68
看護学部	0.79	0.68	0.68	0.78	0.72	0.73	0.57	0.58	0.65
全体	0.77	0.68	0.68	0.75	0.67	0.65	0.56	0.52	0.62

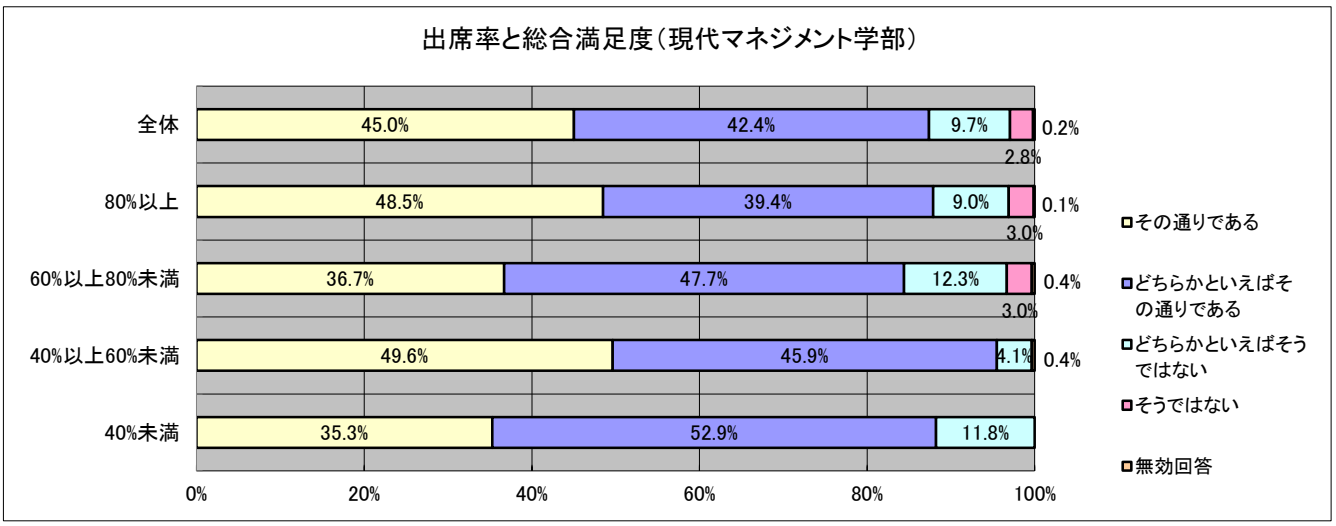


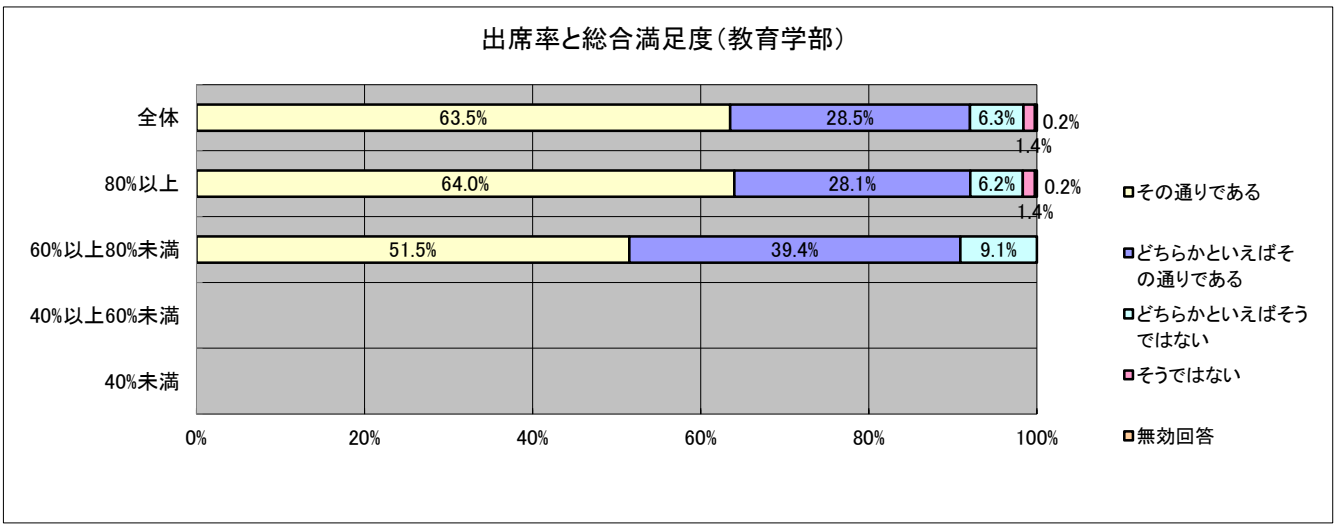

出席率と総合満足度（生活科学部）
全体
80%以上
60%以上80%未満
40%以上60%未満
40%未満
39.4%
49.3%
9.3%
0.2%
1.8%
39.2%
49.2%
9.5%
0.2%
1.9%
39.4%
51.0%
8.2%
1.4%
59.8%
37.8%
2.4%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

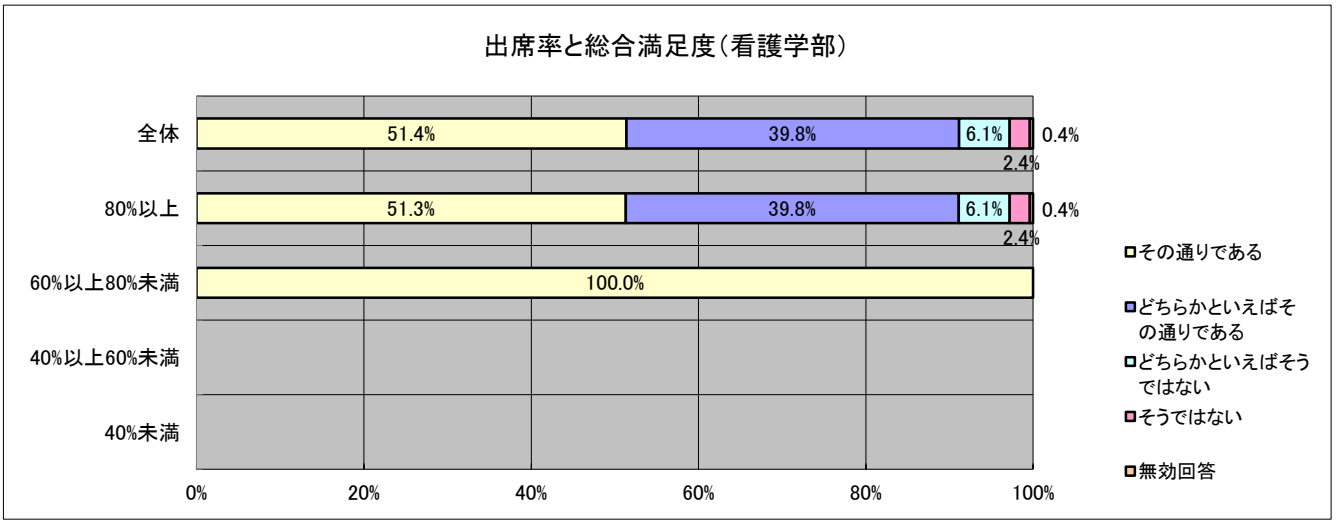

出席率と総合満足度（国際コミュニケーション学部）
全体
80%以上
60%以上80%未満
40%以上60%未満
40%未満
51.3%
38.3%
8.0%
0.1%
2.3%
53.2%
36.4%
8.0%
0.2%
2.1%
47.7%
41.2%
8.2%
2.9%
42.1%
50.9%
6.1%
0.9%
55.6%
33.3%
11.1%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

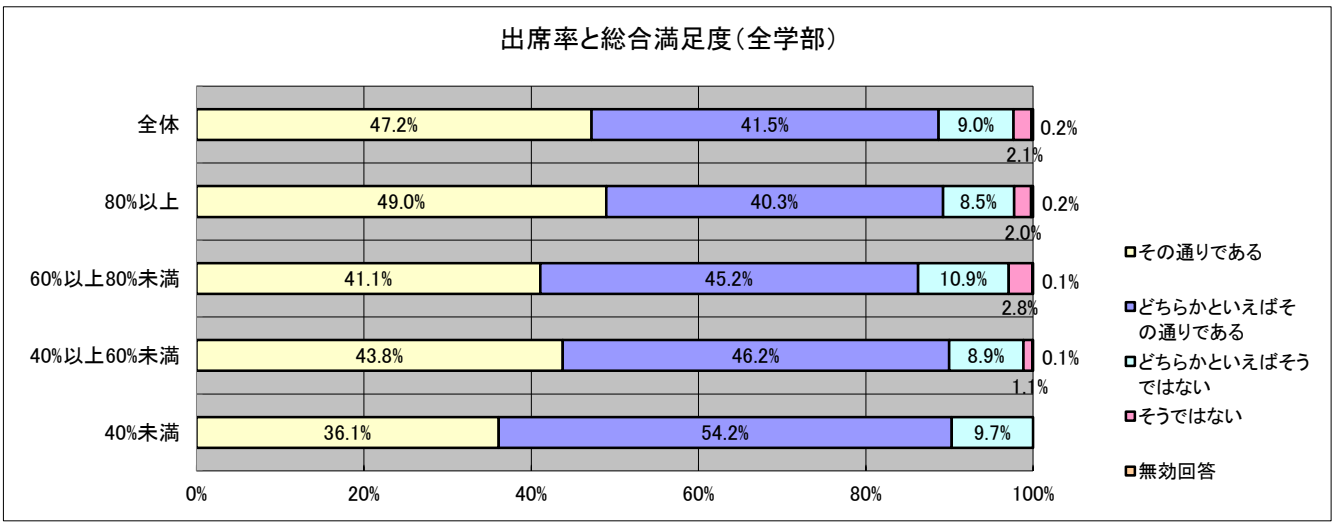

出席率と総合満足度（人間関係学部）
全体
80%以上
60%以上80%未満
40%以上60%未満
40%未満
50.0%
36.6%
10.0%
0.2%
3.1%
49.5%
37.6%
9.9%
0.3%
2.7%
48.9%
34.8%
12.0%
4.4%
56.7%
37.1%
4.5%
1.7%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

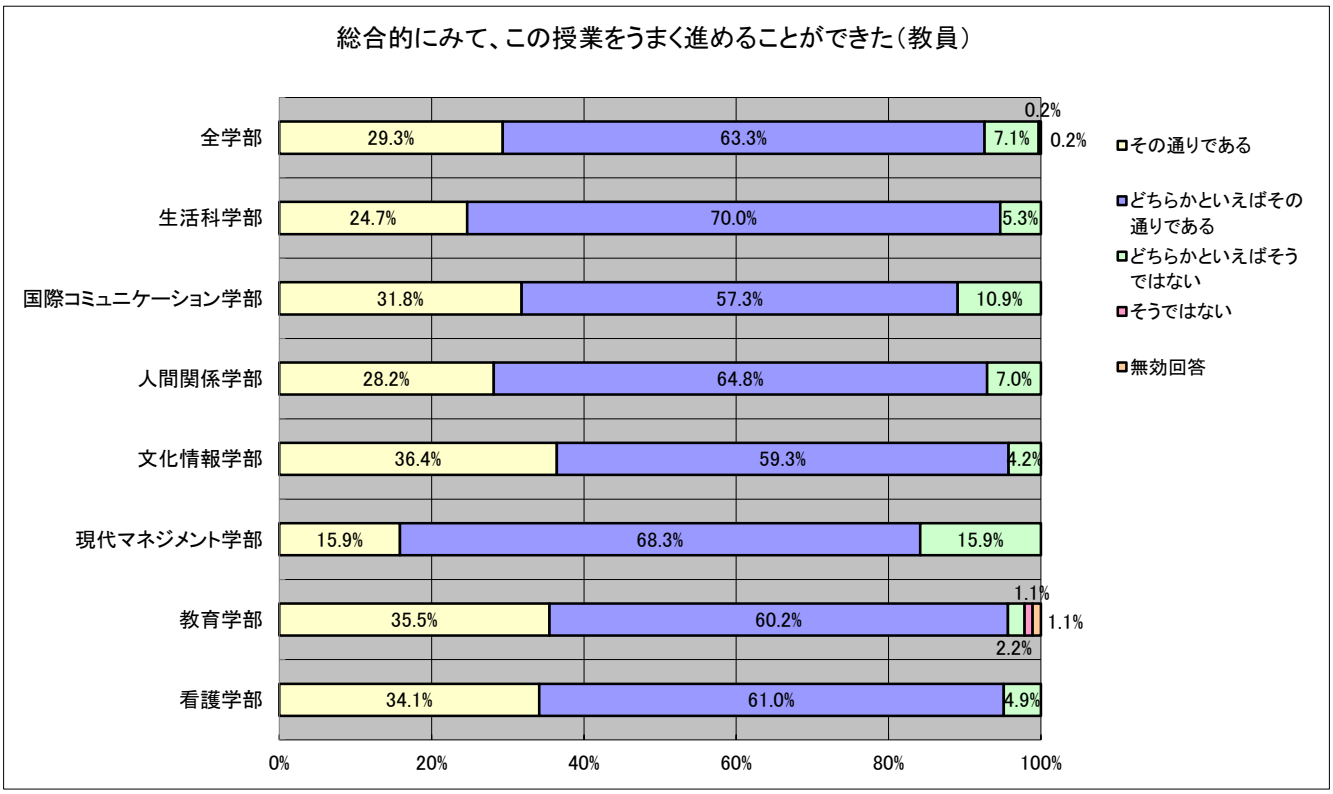

出席率と総合満足度（文化情報学部）
全体
80%以上
60%以上80%未満
40%以上60%未満
40%未満
42.0%
44.8%
11.1%
0.2%
1.9%
47.2%
41.4%
9.5%
0.2%
1.6%
33.3%
50.8%
13.1%
0.1%
2.8%
25.8%
53.0%
19.5%
1.7%
32.6%
58.7%
8.7%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

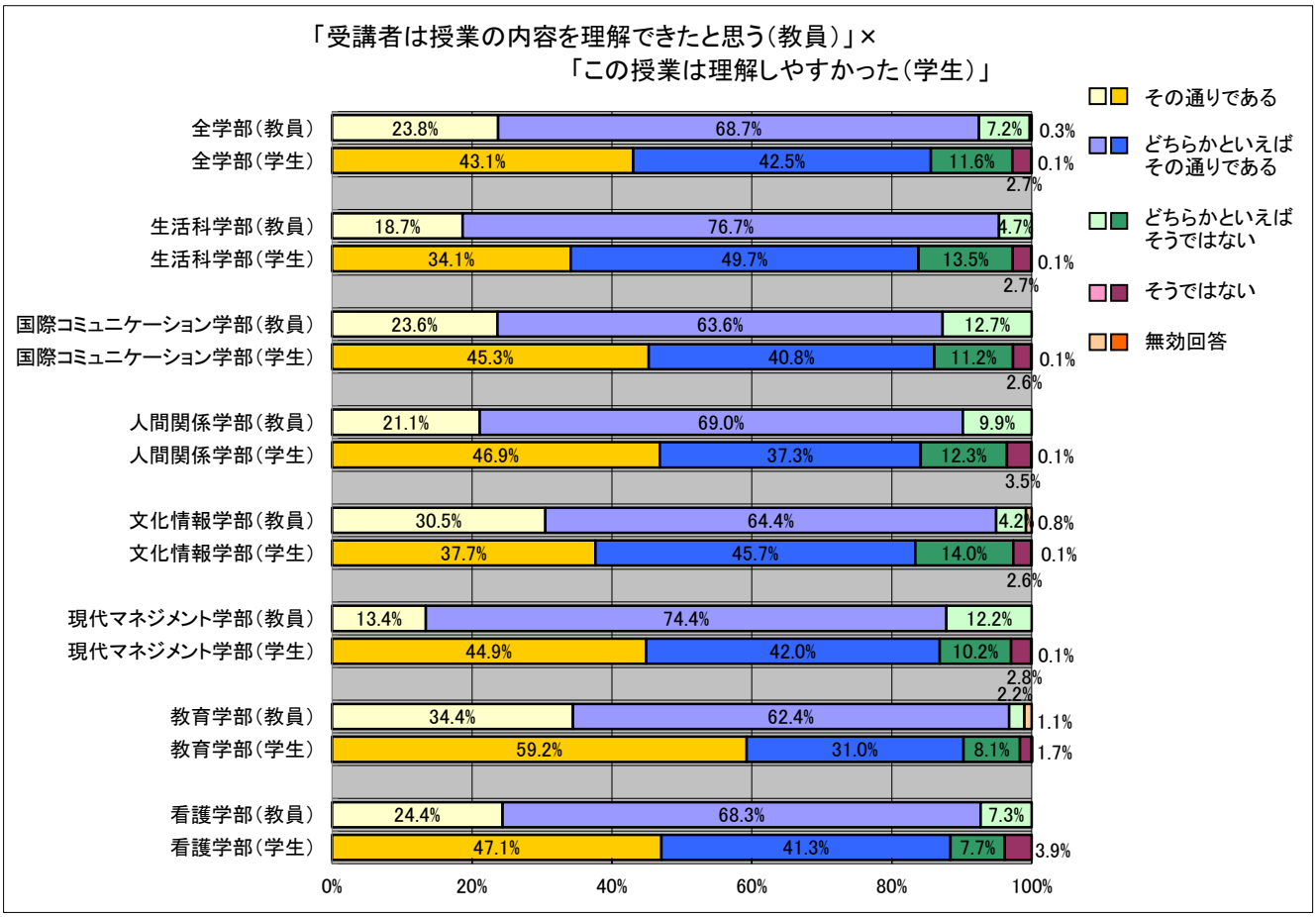

出席率と総合満足度（現代マネジメント学部）
全体
80%以上
60%以上80%未満
40%以上60%未満
40%未満
45.0%
42.4%
9.7%
0.2%
2.8%
48.5%
39.4%
9.0%
0.1%
3.0%
36.7%
47.7%
12.3%
0.4%
3.0%
49.6%
45.9%
4.1%
0.4%
35.3%
52.9%
11.8%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答


出席率と総合満足度（教育学部）
全体
80%以上
60%以上80%未満
40%以上60%未満
40%未満
63.5%
28.5%
6.3%
0.2%
1.4%
64.0%
28.1%
6.2%
0.2%
1.4%
51.5%
39.4%
9.1%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

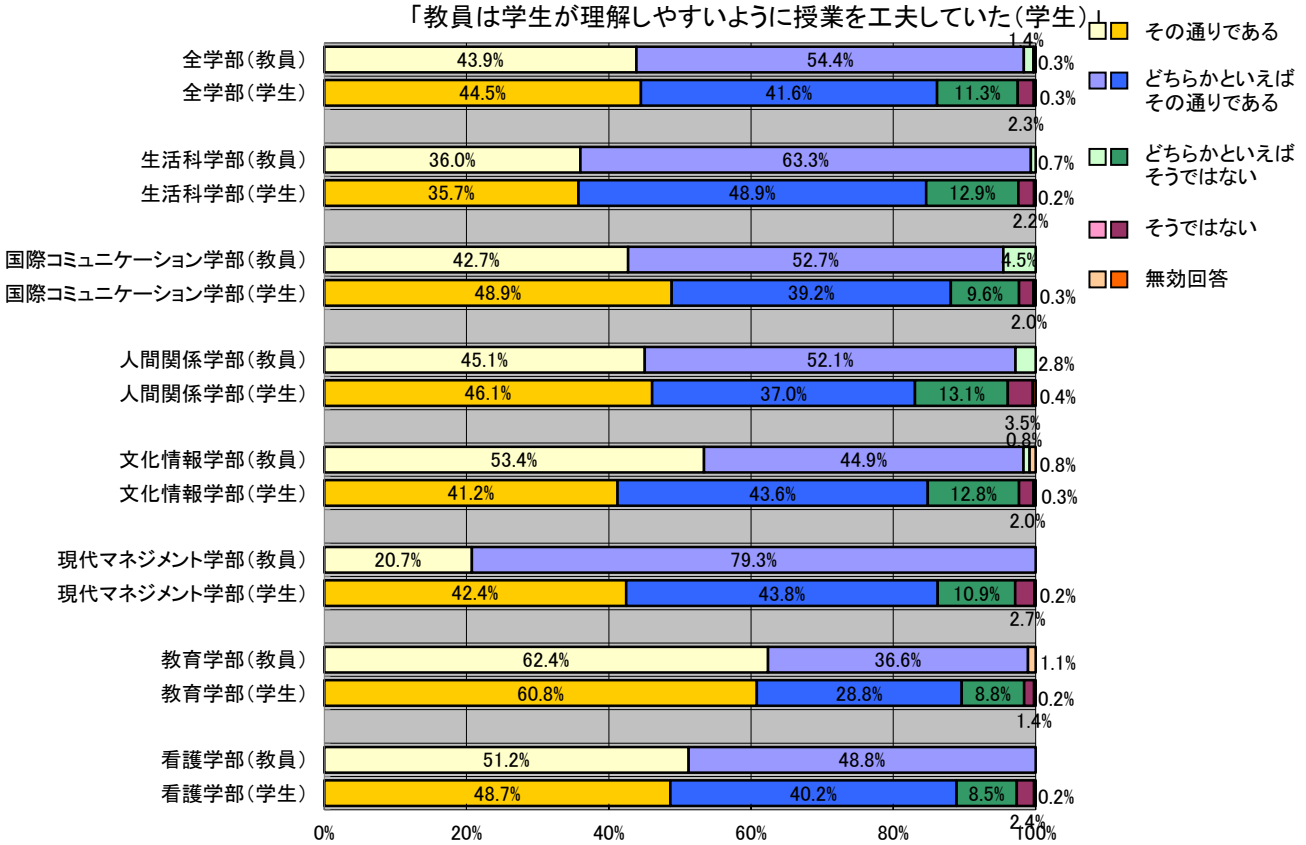

出席率と総合満足度（看護学部）
全体
80%以上
60%以上80%未満
40%以上60%未満
40%未満
51.4%
39.8%
6.1%
0.4%
2.4%
51.3%
39.8%
6.1%
0.4%
2.4%
100.0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答


出席率と総合満足度（全学部）
全体
80%以上
60%以上80%未満
40%以上60%未満
40%未満
47.2%
41.5%
9.0%
0.2%
2.1%
49.0%
40.3%
8.5%
0.2%
2.0%
41.1%
45.2%
10.9%
0.1%
2.8%
43.8%
46.2%
8.9%
0.1%
1.1%
36.1%
54.2%
9.7%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

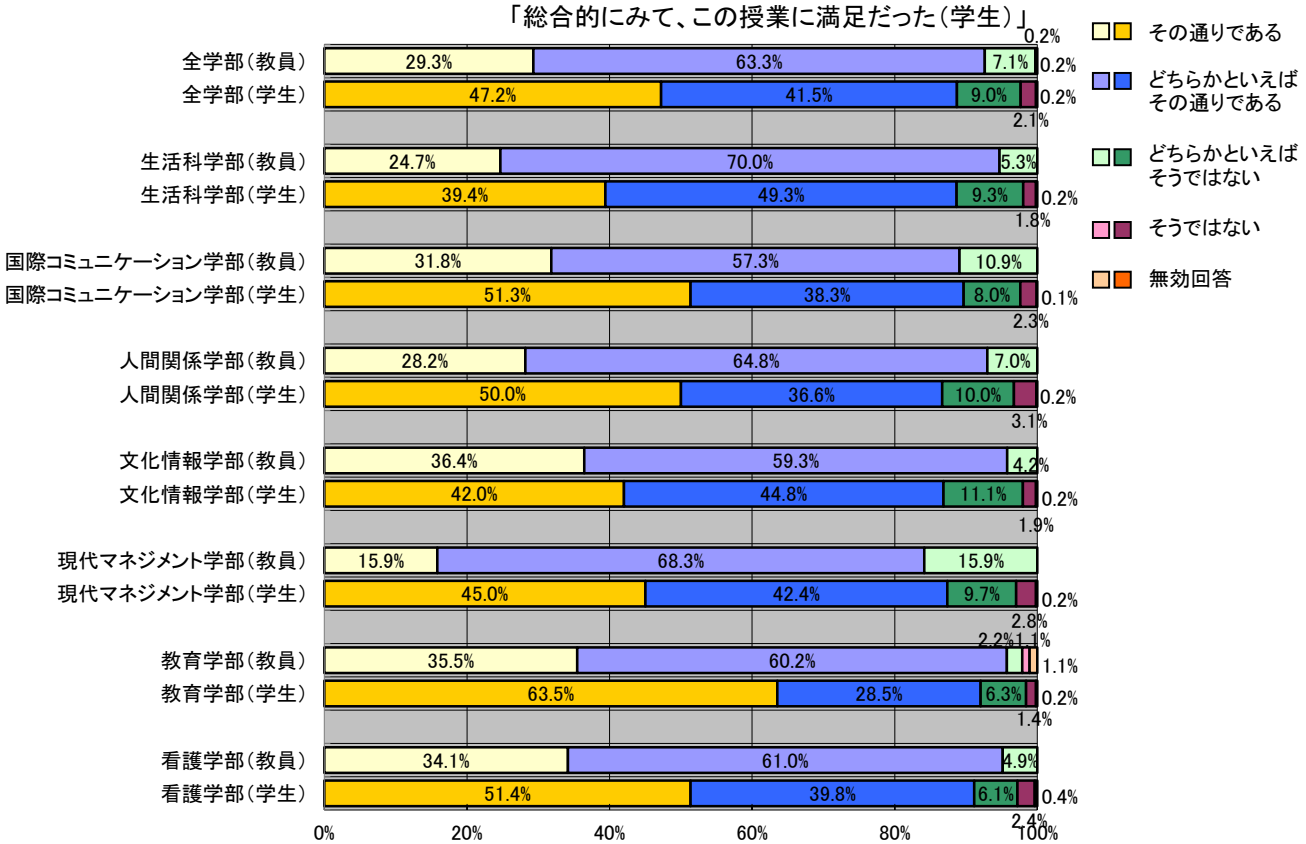

総合的にみて、この授業をうまく進めることができた（教員）
全学部
29.3%
63.3%
7.1%
0.2%
0.2%
生活科学部
24.7%
70.0%
5.3%
国際コミュニケーション学部
31.8%
57.3%
10.9%
人間関係学部
28.2%
64.8%
7.0%
文化情報学部
36.4%
59.3%
4.2%
現代マネジメント学部
15.9%
68.3%
15.9%
教育学部
35.5%
60.2%
1.1%
1.1%
2.2%
看護学部
34.1%
61.0%
4.9%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答


「受講者は授業の内容を理解できたと思う（教員）」×
「この授業は理解しやすかった（学生）」
全学部（教員）
23.8%
68.7%
7.2%
0.3%
全学部（学生）
43.1%
42.5%
11.6%
0.1%
2.7%
生活科学部（教員）
18.7%
76.7%
4.7%
生活科学部（学生）
34.1%
49.7%
13.5%
0.1%
2.7%
国際コミュニケーション学部（教員）
23.6%
63.6%
12.7%
国際コミュニケーション学部（学生）
45.3%
40.8%
11.2%
0.1%
2.6%
人間関係学部（教員）
21.1%
69.0%
9.9%
人間関係学部（学生）
46.9%
37.3%
12.3%
0.1%
3.5%
文化情報学部（教員）
30.5%
64.4%
4.2%
0.8%
文化情報学部（学生）
37.7%
45.7%
14.0%
0.1%
2.6%
現代マネジメント学部（教員）
13.4%
74.4%
12.2%
現代マネジメント学部（学生）
44.9%
42.0%
10.2%
0.1%
2.8%
2.2%
教育学部（教員）
34.4%
62.4%
1.1%
教育学部（学生）
59.2%
31.0%
8.1%
1.7%
看護学部（教員）
24.4%
68.3%
7.3%
看護学部（学生）
47.1%
41.3%
7.7%
3.9%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

「受講者の理解度に配慮した工夫をした（教員）」×
「教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた（学生）」

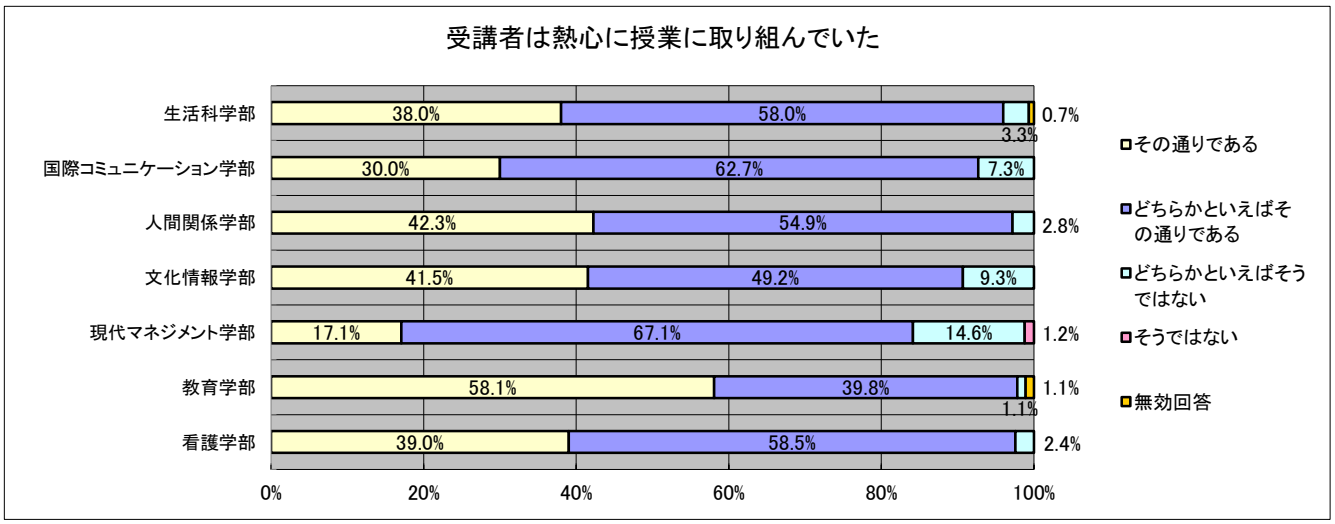


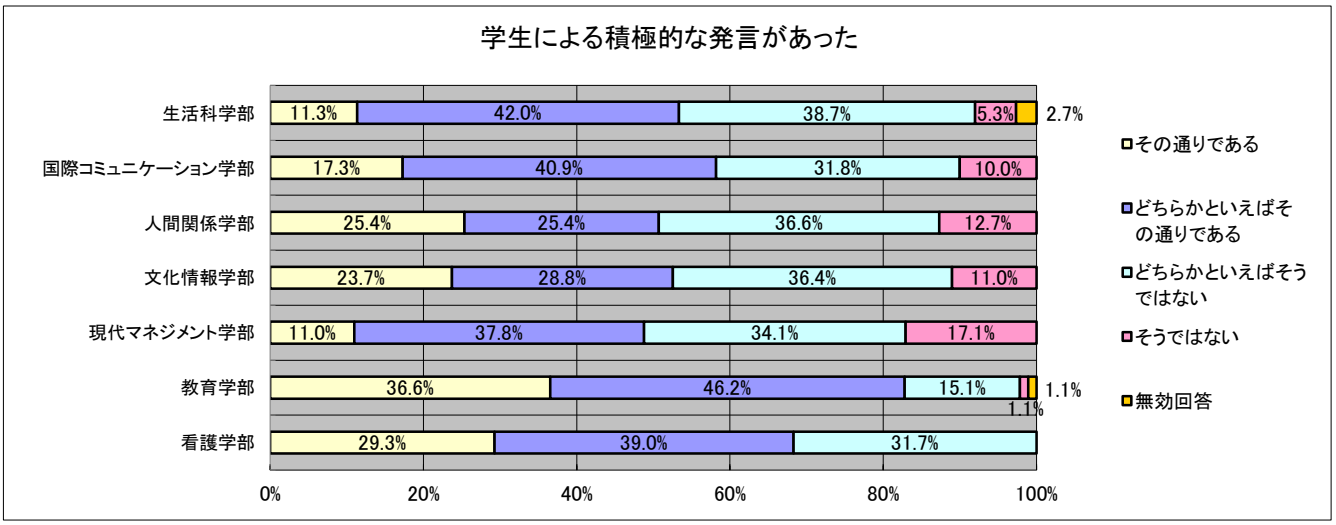
「総合的にみて、この授業はうまく進めることができた（教員）」×
「総合的にみて、この授業に満足だった（学生）」

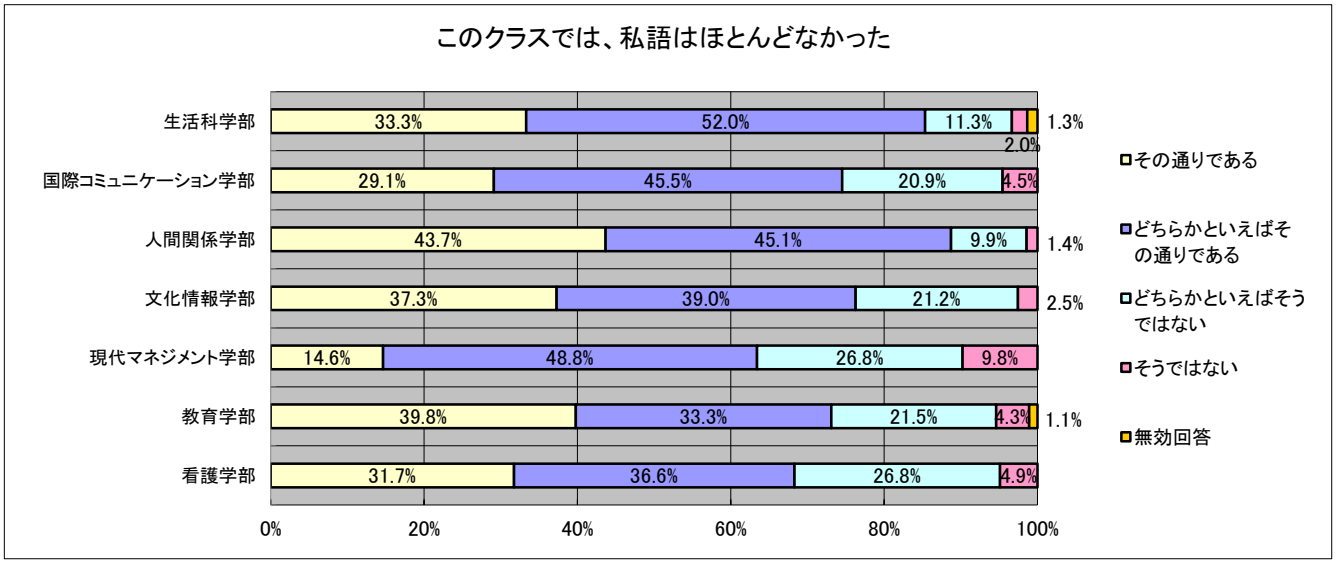


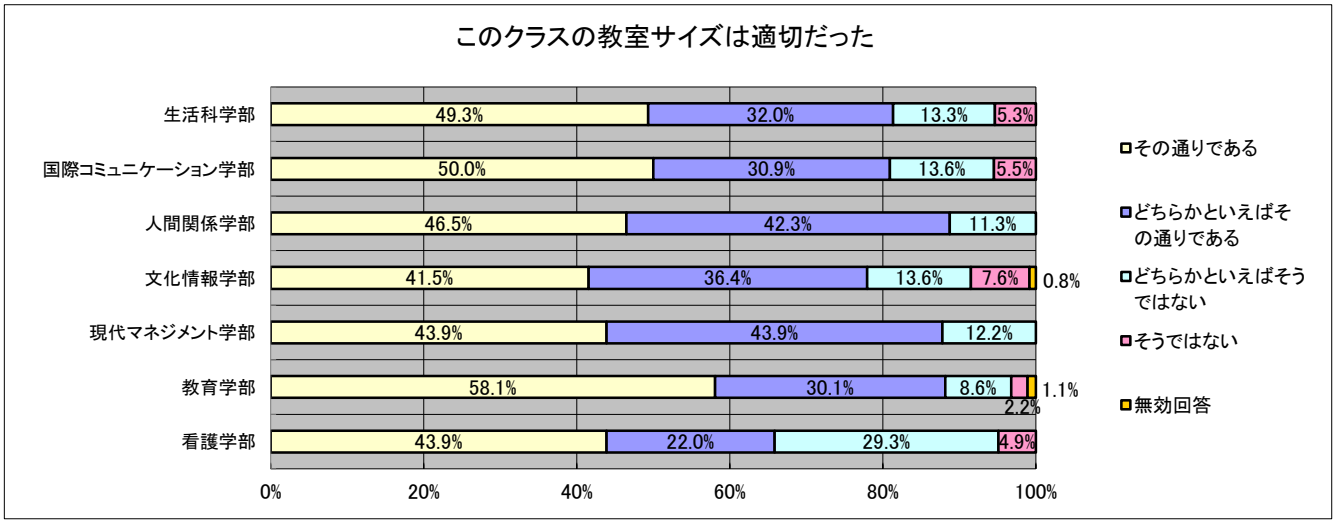
総合満足度と各項目との相関関係

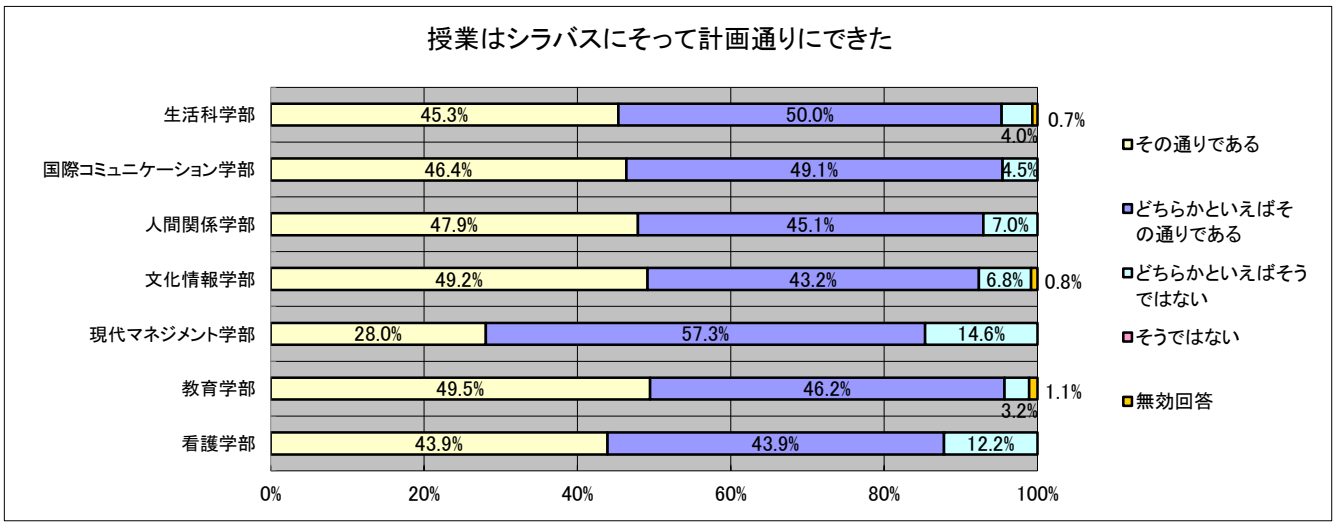
設問文	相関係数
3.　受講者は熱心に授業に取り組んでいた。	0.53
4.　学生による積極的な発言があった。	0.43
5.　このクラスでは、私語はほとんどなかった。	0.36
6.　このクラスの教室サイズは適切だった。	0.24
7.　授業はシラバスにそって計画通りにできた。	0.50
8.　受講者は授業の内容を理解できたと思う。	0.68
9.　受講者の理解度に配慮した工夫をした。	0.55

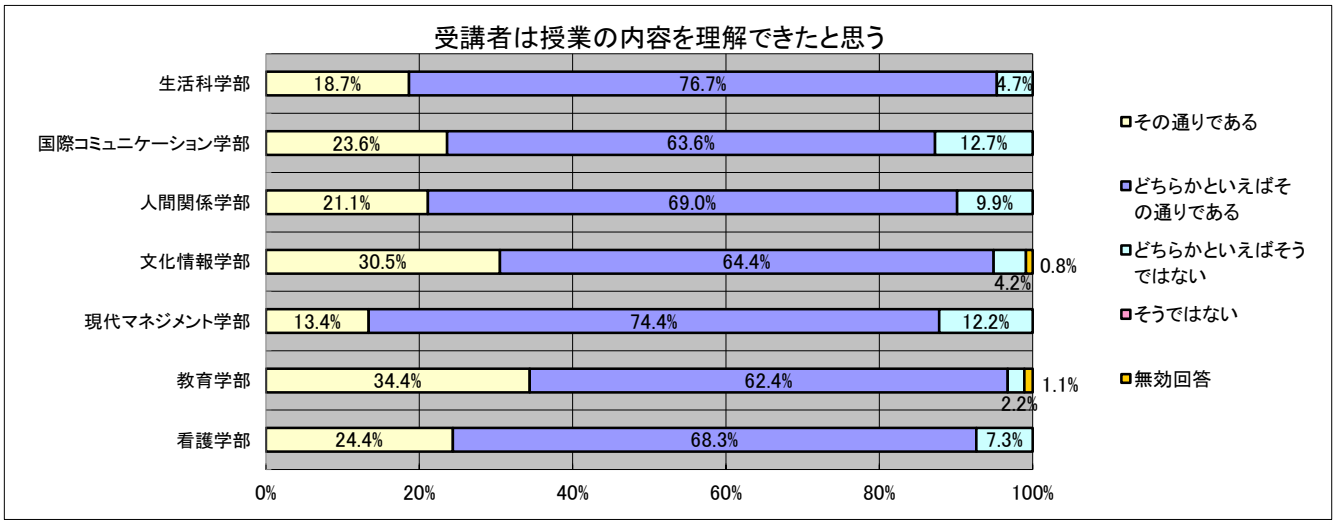

受講者は熱心に授業に取り組んでいた
生活科学部
38.0%
58.0%
3.3%
0.7%
国際コミュニケーション学部
30.0%
62.7%
7.3%
人間関係学部
42.3%
54.9%
2.8%
文化情報学部
41.5%
49.2%
9.3%
現代マネジメント学部
17.1%
67.1%
14.6%
1.2%
教育学部
58.1%
39.8%
1.1%
1.1%
看護学部
39.0%
58.5%
2.4%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

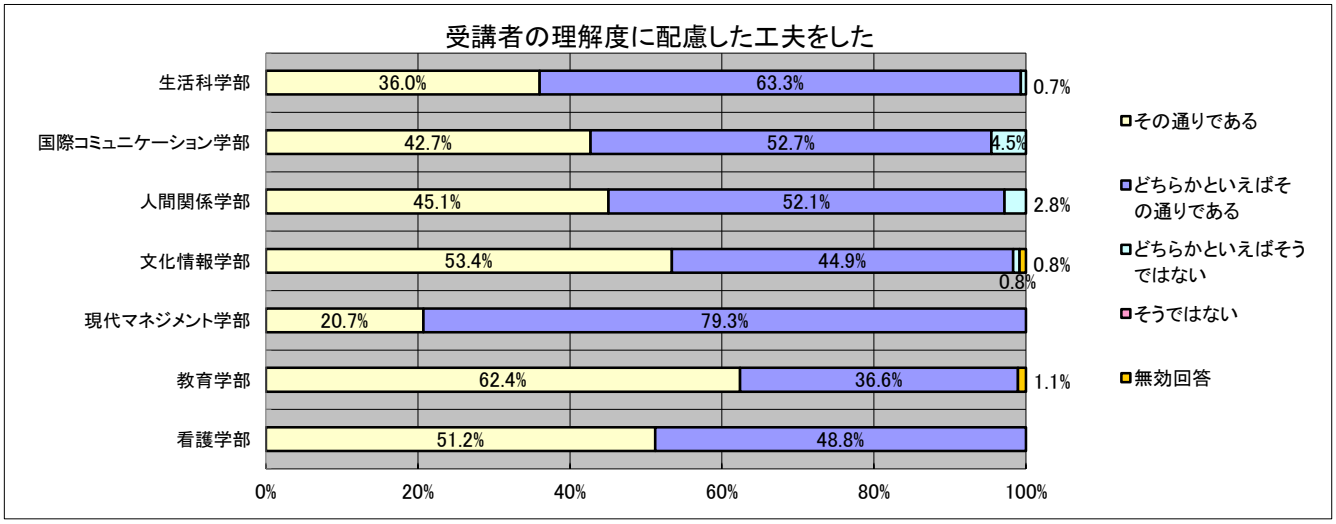

学生による積極的な発言があった
生活科学部
11.3%
42.0%
38.7%
5.3%
2.7%
国際コミュニケーション学部
17.3%
40.9%
31.8%
10.0%
人間関係学部
25.4%
25.4%
36.6%
12.7%
文化情報学部
23.7%
28.8%
36.4%
11.0%
現代マネジメント学部
11.0%
37.8%
34.1%
17.1%
教育学部
36.6%
46.2%
15.1%
1.1%
1.1%
看護学部
29.3%
39.0%
31.7%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答

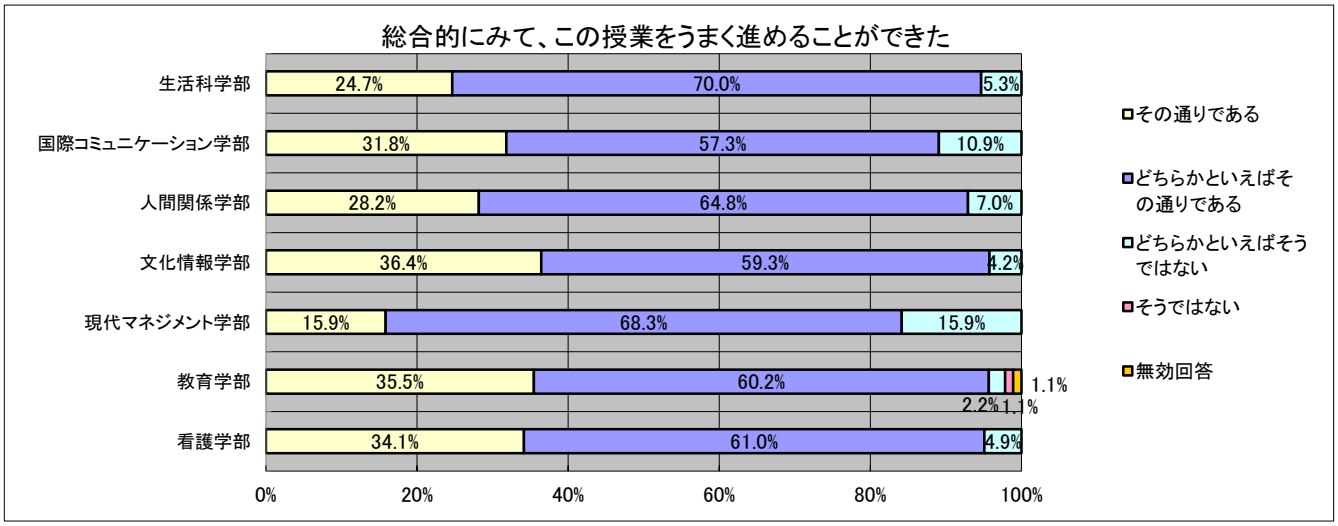

このクラスでは、私語はほとんどなかった
生活科学部
33.3%
52.0%
11.3%
2.0%
1.3%
国際コミュニケーション学部
29.1%
45.5%
20.9%
4.5%
人間関係学部
43.7%
45.1%
9.9%
1.4%
文化情報学部
37.3%
39.0%
21.2%
2.5%
現代マネジメント学部
14.6%
48.8%
26.8%
9.8%
教育学部
39.8%
33.3%
21.5%
4.3%
1.1%
看護学部
31.7%
36.6%
26.8%
4.9%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答


このクラスの教室サイズは適切だった
生活科学部
49.3%
32.0%
13.3%
5.3%
国際コミュニケーション学部
50.0%
30.9%
13.6%
5.5%
人間関係学部
46.5%
42.3%
11.3%
文化情報学部
41.5%
36.4%
13.6%
7.6%
0.8%
現代マネジメント学部
43.9%
43.9%
12.2%
教育学部
58.1%
30.1%
8.6%
2.2%
1.1%
看護学部
43.9%
22.0%
29.3%
4.9%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答


授業はシラバスにそって計画通りにできた
生活科学部
45.3%
50.0%
4.0%
0.7%
国際コミュニケーション学部
46.4%
49.1%
4.5%
人間関係学部
47.9%
45.1%
7.0%
文化情報学部
49.2%
43.2%
6.8%
0.8%
現代マネジメント学部
28.0%
57.3%
14.6%
教育学部
49.5%
46.2%
3.2%
1.1%
看護学部
43.9%
43.9%
12.2%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答


受講者は授業の内容を理解できたと思う
生活科学部
18.7%
76.7%
4.7%
国際コミュニケーション学部
23.6%
63.6%
12.7%
人間関係学部
21.1%
69.0%
9.9%
文化情報学部
30.5%
64.4%
4.2%
0.8%
現代マネジメント学部
13.4%
74.4%
12.2%
教育学部
34.4%
62.4%
2.2%
1.1%
看護学部
24.4%
68.3%
7.3%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答


受講者の理解度に配慮した工夫をした
生活科学部
36.0%
63.3%
0.7%
国際コミュニケーション学部
42.7%
52.7%
4.5%
人間関係学部
45.1%
52.1%
2.8%
文化情報学部
53.4%
44.9%
0.8%
0.8%
現代マネジメント学部
20.7%
79.3%
教育学部
62.4%
36.6%
1.1%
看護学部
51.2%
48.8%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答


総合的にみて、この授業をうまく進めることができた
生活科学部
24.7%
70.0%
5.3%
国際コミュニケーション学部
31.8%
57.3%
10.9%
人間関係学部
28.2%
64.8%
7.0%
文化情報学部
36.4%
59.3%
4.2%
現代マネジメント学部
15.9%
68.3%
15.9%
教育学部
35.5%
60.2%
1.1%
2.2%
1.1%
看護学部
34.1%
61.0%
4.9%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
その通りである
どちらかといえばその通りである
どちらかといえばそうではない
そうではない
無効回答